

第4章 遺物

出土遺物は、縄文時代～近世まで及び、とくに弥生時代後期前半（寄道様式）、古墳時代中期、古墳時代終末期、中世前期（12～13世紀）、中世後期（15～16世紀）、そして近世のものに大別される。

1. 環濠（SD-1）

環濠から出土した遺物は、弥生時代中期～後期、古墳時代がほとんどであり、上層において、混入と考えられる古代から中世の土器が少量出土している。なお、個々の土器の詳細は、文末の遺物観察表（表2）に示している。以下では、各時期ごとに小器種分類を行い、その器種について説明する。

A. 弥生時代中期（第53・56・57図）

弥生時代中期の土器は、細頸壺（1）、広口壺（23）、甕（97～99・117）がある。細頸壺（1）は中期後葉の長床様式で、飾描文が施されている頸部の破片である。広口壺（23）は口縁端部がわずかに立ち上がり、受け口になるもので、口径が大きいのでかなり大型の受口広口壺である。時期は長床様式で、橋良遺跡に類例（註1）がある。甕は頸部が開き、口縁部が短く外反するもので、体部はナデあるいはハケで調整されている。底部（117）は中実の棒状脚である。出土量は極少量であり、混入と考えられる。

B. 弥生時代後期（第53～59図）

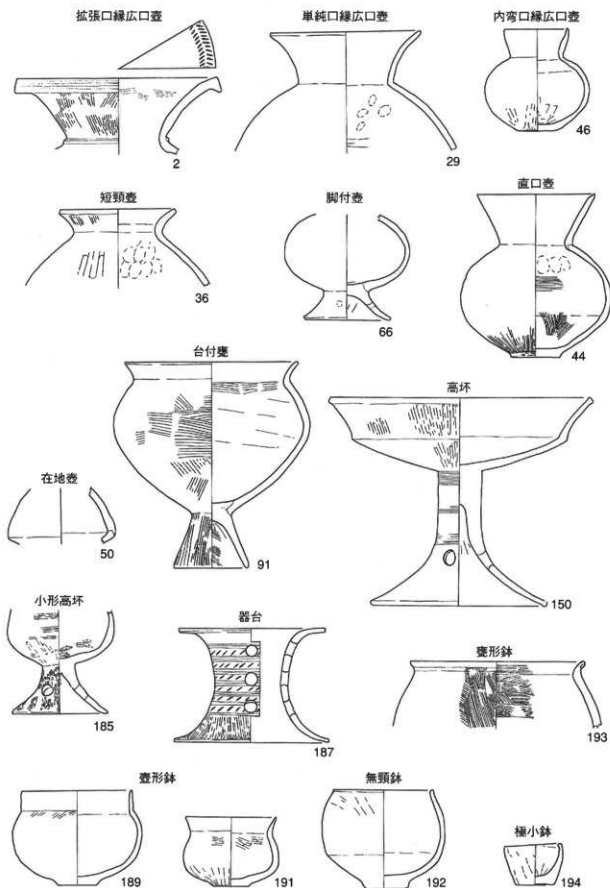
弥生時代後期の土器は、後期前半の寄道様式であり、壺・甕・高坏・器台・鉢の各器種が出土している。各器種は、本来細別された型式の集まりとして認識される。型式分類には量的な検討が必要であるが、今回の資料だけでは十分とはいえない。そこで、以下では便宜的に大器種の下に小器種を設定（第52図）して説明する。なお、小器種の分類に際しては、高井遺跡の分類（註2）を参考にして、これを再検討して今回便宜的に設定したものである。

壺

壺は口縁部の形状、脚の有無等を基準にして7小器種が設定できる。

表1 西側遺跡出土寄道様式土器分類表

大器種	小器種	遺物番号	大器種	小器種	遺物番号
壺	拡張口縁広口壺	2・7・11・14・15・18・27	高坏	高坏	129～139・141～169
	単純口縁広口壺	19・20・24～26・28～31		小型高坏	155・172～179・181・182・184～186
	短頸壺	36・38・48	鉢	器台	187
	直口壺	39・40・42～44・49		甕形鉢	193
	内湾口縁直口壺	46		壺形鉢	188～191
	脚付壺	65・66		無頸鉢	192
	在地壺	50		極小鉢	194・195
甕	台付甕	83・91～93			



第52図 弥生土器小器種分類図

拡張口縁広口壺 口縁部がくの字に大きく開き、口縁短部が面を持ち広く拡張されているものである。口縁短部は斜め下方（2～6等）に垂下するものや垂直に垂下したもの（7・15）があり、ほとんどの場合、口縁端部内面に刺突文が施されている。頸部には凸帯があり、胴部上半には櫛描直線文や刺突文が施されているものが多い。器形は、全形が推定できる資料はないが、他遺跡出土のものから推定すると、胴部がほぼ球形で、底部は平底で若干上げ底になるものもあると考えられる。単純口縁広口壺と器形は共通しており、胴部・底部のみでは分類は不可能である。外面調整はミガキ、内面調整はハケ、ナデで、頸部周辺はユビオサエである。

高井遺跡では、広口壺を口縁・口唇部の形態から7形式に分類しているが、今回分類した拡張口縁広口壺は、高井遺跡分類の広口壺A（垂下口縁部）と広口壺B（拡張口縁部）にあたる。この両者の分類基準は、斜め下方に垂下したもの（広口壺A）と垂直な面のもの（広口壺B）というものであるが、今回の資料ではその違いがはっきりしないため、一括して拡張口縁広口壺とした。

単純口縁広口壺 口縁部がくの字に大きく開き、口縁端部に明瞭な面を持たないものである（36・38・48）。口縁部は直線的に開くものが多いが、やや外反するもの（19・20・29）や、やや内湾するもの（31）も見られる。頸部に凸帯はなく、胴部上半には櫛描直線文や刺突文が施されているものが多い。器形は、胴部がほぼ球形で、底部は平底で若干上げ底になるものもあると考えられる。拡張口縁広口壺と器形は共通しており、胴部・底部のみでは、分類は不可能である。外面調整はミガキ、内面調整はハケ、ナデで、頸部周辺はユビオサエである。

高井遺跡では、広口壺を口縁・口唇部の形態から7形式に分類しているが、今回分類した単純口縁広口壺は、高井遺跡分類の広口壺C（単純口縁部）にあたる。

短頸壺 口縁部がくの字に小さく短く開き、口縁端部に明瞭な面を持たないものである。器形は、広口壺とほぼ同じと考えられるが、口縁部は半分ほどの長さである。小型のものは直口壺の胴部と共通しており、胴部だけでは分類は不可能である。口縁部の外面調整はハケ、胴部外面はミガキ、胴部内面はナデ、ユビオサエである。

高井遺跡では、広口壺を口縁・口唇部の形態から7形式に分類しているが、今回分類した直口壺は、高井遺跡分類の広口壺C（単純口縁部）に含まれると考えられる。

直口壺 口縁部がやや開いて直線的に立ち上がるもので、胴部は球形で平底である。口縁部の立ち上がりは長短が見られ、やや外反するもの（39・40・43）もある。外面調整は縦方向のミガキ、内面調整はハケ、ユビオサエである。

高井遺跡分類の直口壺Aにあたると考えられるが、高井遺跡で行われた口縁部の長さによる細分は明瞭ではない。

内湾口縁直口壺 直口壺の口縁部が内湾するものである（46）。西側遺跡出土のものは、口縁端部がわずかに内湾するものである。本来、この内湾化した口縁部は、寄道様式に続く欠山様式に顕著に見られるものである。西側遺跡のものは、内湾が端部にわずかに見られるだけなので、例外的なものと考えられる。

脚付壺 長頸壺や直口壺に脚部が付いたものである（65・66）。

在地壺 胴部の肩と腰が張り、台形になる広口壺（50）で、前段階の長床様式の承譜を引くもので

あるが、個体差が大きく、球形に近い胴部のものも見られる。調整は、外面が縦方向のミガキ、内面がナデあるいはハケの場合が多い。高井遺跡では、一定量が出土しているが、西側遺跡ではこの1点のみである。

甕

甕は、確認できるものはすべて台付甕である。

台付甕 口縁部がくの字に折れる単純なもので、胴部は最大径が中心より上にあり、下半が直線的に伸びるものである。口縁端部に刻目を施すものが少数見られる。調整は、胴部外面がナメハケ、胴部内面はナメハケあるいはナデ、口縁部外面がタテハケ、内面がナデである。

高井遺跡においては、口縁部の形状や口縁端部の刻目の有無、調整等により、6形式に細分している。今回、台付甕としたものは、ほとんどが甕Cにあたり、甕Bがわずかに見られるだけであるので、台付甕として一括している。

高坏

高坏は法量の大小を基準にして2小器種が設定できる。

高坏 口縁部が外反する浅い坏部とラッパ状に開く脚部を持つ。坏部は強く外反して浅くなるもの(127～139等)と、弱く外反して深くなるもの(145～147)がある。脚部は細く伸びて端部近くで大きく開くもの(150・157)から、太く、全体的に開くもの(148・156・158)がある。口縁部外面には描波状文、脚部上半部には櫛描直線文が施されるものがある。

高井遺跡においては、坏部や脚部の外反度の違いからA-1～6の6形式に細分し、坏部が浅いものから深いものへ、脚部が細長いものから、太く全体的に外反するものへと変化したと予想して細分している。西側遺跡の高坏は高井遺跡分類の高坏A-2～5にあたると考えられるが、浅い坏部で脚部が太く外反するものや、深い坏部で脚部が細長いものも見られ、坏部と脚部との関係は必ずしも対応しないため、今回は一括している。

小型高坏 ワイングラス形の坏部に外反して開く短い坏部が付くもの(184～186)である。坏部は半球形でまさしくワインカップのような形状である。脚部は坏部より短く、強く外反し、外面上半には櫛描直線文や刺突文が施されているものが多い。

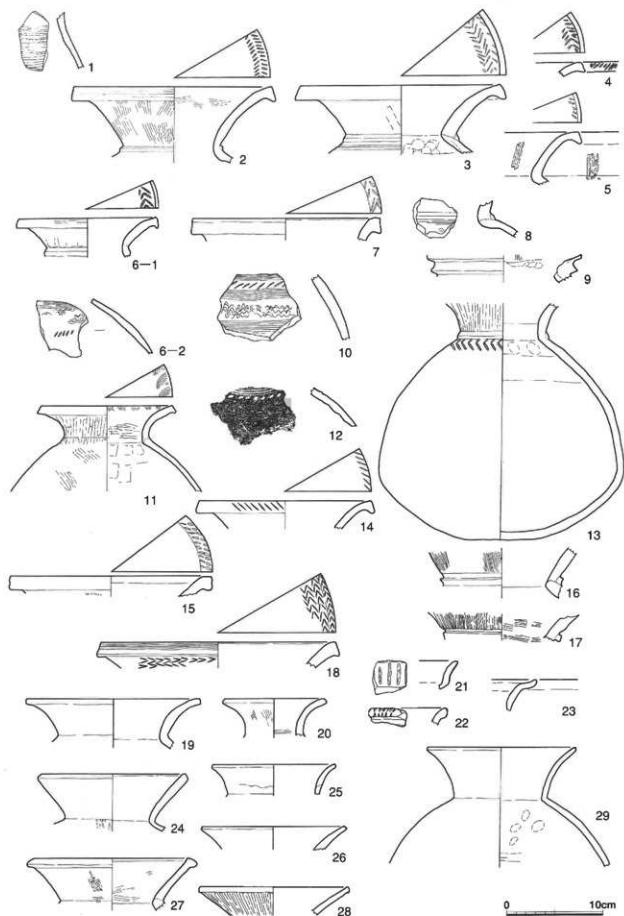
高井遺跡においては、坏部の形状からA-1～4の4形式に細分している。西側遺跡の小型高坏は、高井遺跡分類の小型高坏A-3にあたると考えられる。

器台

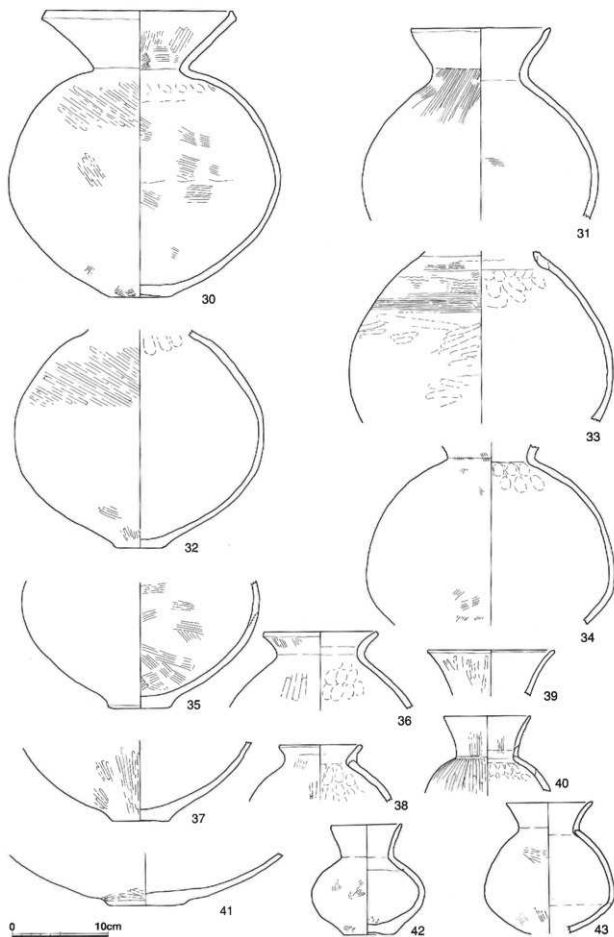
器台は1点のみが出土している。

器台 胴部が太く、口縁部は大きく外反し、脚部よりやや径が小さい程度である(187)。胴部には、四方向に三段の円孔があげられ、櫛描直線文と刺突文が施されている。畿内第V様式と同様な形態をしており、その影響が考えられる。

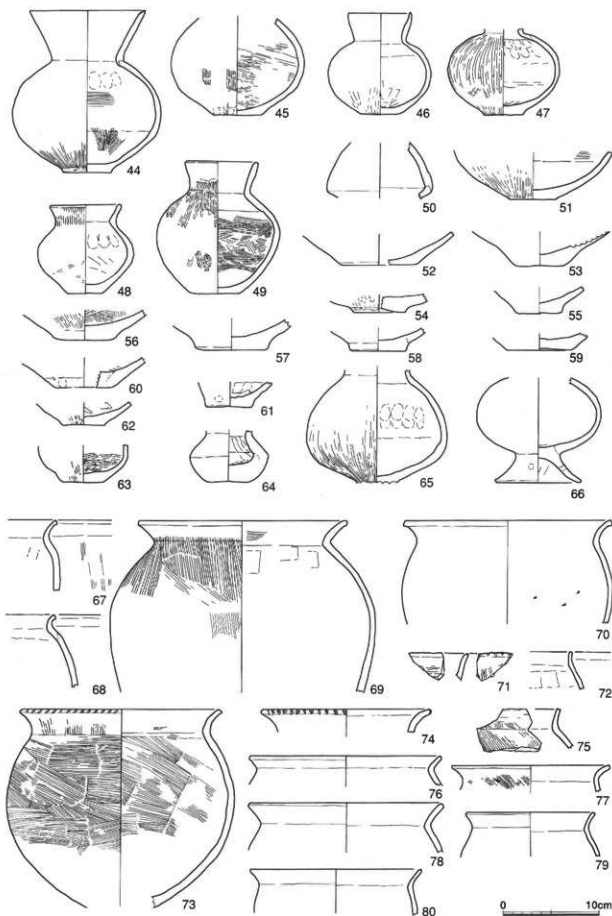
高井遺跡分類の器台Aにあたる。



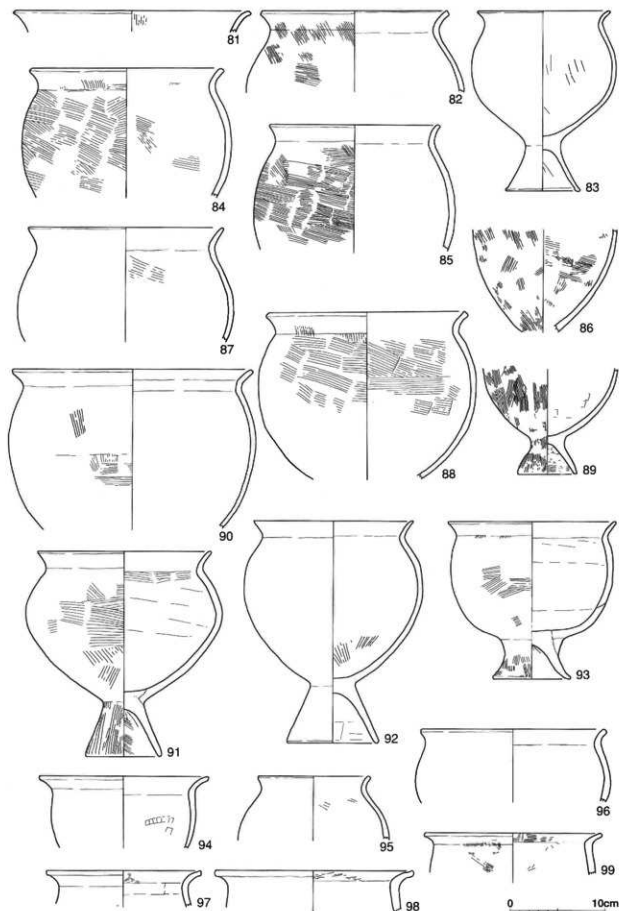
第53図 SD-1出土弥生土器-1 (1/4)



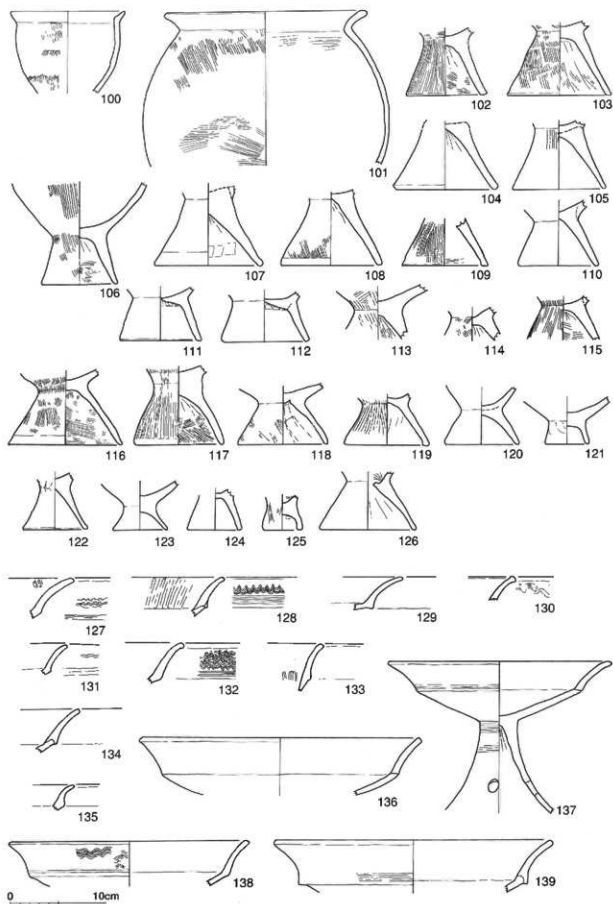
第54図 SD-1 出土弥生土器-2 (1/4)



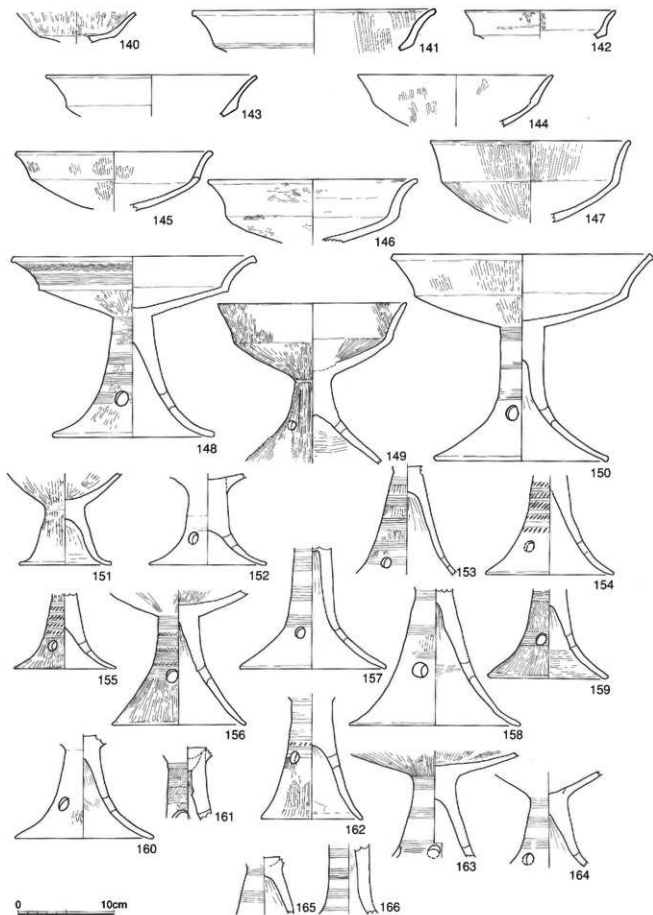
第55図 SD-1出土弥生土器-3 (1/4)



第56図 S D-1出土弥生土器-4 (1/4)



第57図 SD-1出土弥生土器-5 (1/4)



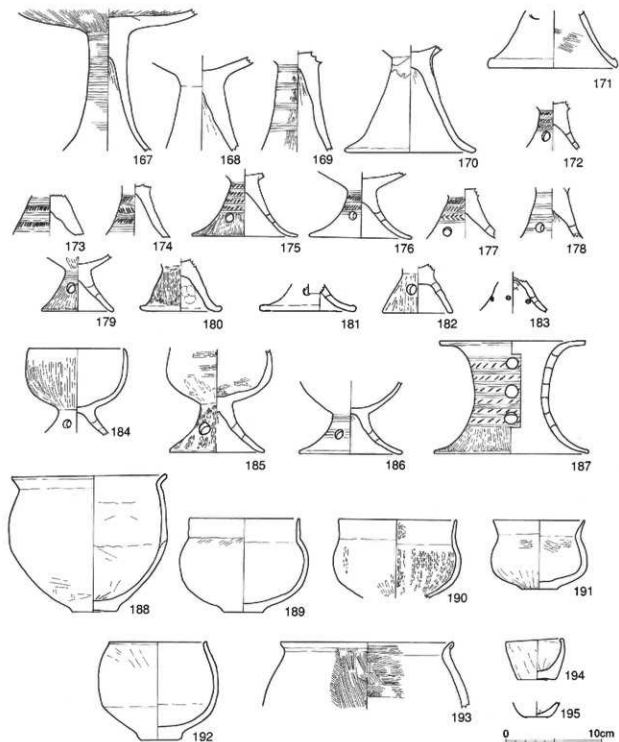
第58図 S D-1 出土弥生土器-6 (1/4)

鉢

鉢は、器形や調整を基準にして、4小器種が設定できる。

壺形鉢 頭部がややすぼまり、体部の内外面がハケ調整されているもの（193）で、台付甕の下半部に平底の底部を付けた形をしている。

壺形鉢 頭部が開き、体部の内外面がミガキあるいはナデ調整されているもので、広口壺の胴部に



第59図 SD-1出土弥生土器-7 (1/4)

口の開いた口縁部を付けたものである。口縁部が外反するもの(188・191)や直立するもの(189・190)があり、細分可能であるが、今回は資料数が少ないため一括している。

無頸鉢 壺形鉢に口縁部を付けたもので、壺の胴部と同一形態である。端部はわずかに外反している(192)。高井遺跡分類では、碗形鉢Bとしたものである。

極小鉢 手づくねに近い、小型の鉢形をした土器である(194・195)。

高井遺跡分類では、器形は碗形鉢C5としたものに近く、その小型品と考えられる。

外来系土器

ここでは、在地の土器ではないと考えられる土器をまとめて説明する。器種としては、壺と高坏である。

壺は、広口壺であり、受け口になり、口縁部外面に棒状浮文が貼り付けてある(21)ものと、口縁端部が凸帯状に膨れ、キザミが入れられた複合口縁のもの(22)があり、いずれも遠江系の土器と考えられる。

高坏は、脚端部でわずかに外反するものであり、スカシはない(151・170)。いずれも遠江系の土器と考えられる。171は脚端部が膨れているもので、円形のスカシが入れている。これについては産地不明であり、今後の類例調査により明らかにしたい。

C. 古墳時代中期(第60図)

古墳時代中期の土器は高坏・壺・甕・鉢の各器種が出土している。当該期の東三河地方における土器編年はいまだ確立していないので、隣接地域である遠江の状況(鈴木1999)を参考にして以下に述べる。なお土器の出土量が少ないので、器種ごとに説明する。

高坏

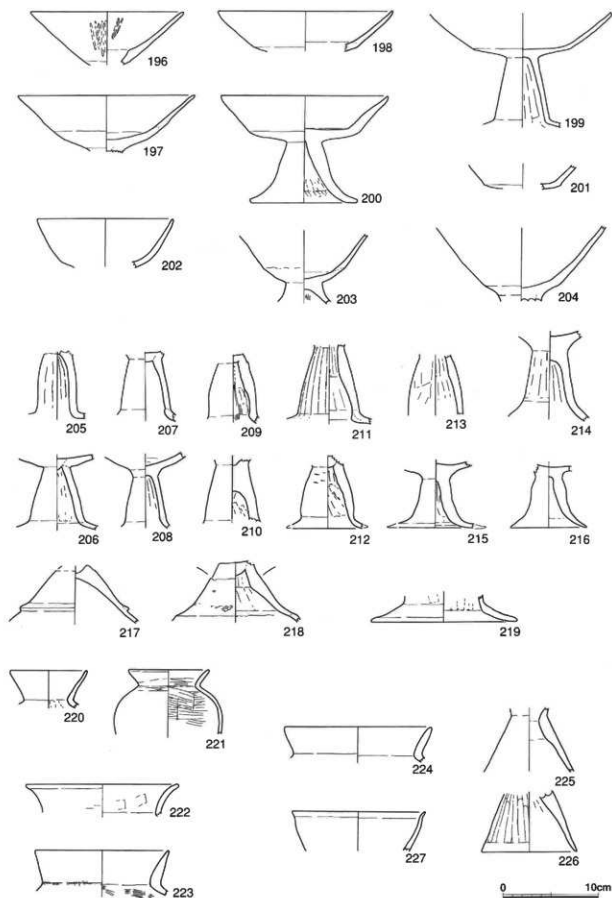
高坏は、脚の形状の違いから、3小器種が設定できる。

高坏A 坏部が直線的に開き、脚部が膨らんで、下端部近くで明瞭に折れて外側に大きく開く、いわゆる屈折脚の高坏(199・205～212・219)である。全体の形がわかるものは少ないが、坏部は腰が折れ、外反して立ち上がるものである。

詳細に見れば、坏部の法量や形態(直線的か、内湾するか)、脚部の湾曲の度合い(脚部が直線的か、下部のみがふくらむ形状か、全体がふくらむ形状か)などに時期差が反映すると考える。高坏Aの時期はおおむね中期前葉～中葉で占められ、とくに直線的な脚部を有した199や208は中期前葉に属するものだろう。一方、脚部が全体的にふくらむ212は中期中葉と考えて良いだろう。

高坏B 脚部が膨らまず、下端部近くで大きく湾曲して開くもの(200・214～216)である。坏部ははっきりしないが、200に見られるように高坏Aと同様と考えられる。また、内湾した坏部を有する202も高坏Bに該当する可能性が高い。

210のみ脚の上部が中実で、他はすべて中実とはならない。脚が特に短い215・216は、中でも新相を示すものである。高坏Bはおおむね中期後葉のものと考えて良いだろう。



第60図 S D-1 出土古墳時代土師器 (1/4)

高坏C 脚部が大きく開くもの(217・218)である。脚端部ははっきりしないが、端部近くの外面に突帯や段を持つものがあり、いわゆる二段脚に該当する。坏部ははっきりしないが、坏Aと異なり、有段で大きく開く可能性がある。帰属時期は不明だが、遠江では中期中葉～後葉に類似例が存在する。

壺

壺は口縁部がくの字に折れて直線的に伸びるもので、胴部は球形になる(220・221)。いずれも小型壺で、底部が丸底かどうかは分からない。

甕

甕は口縁部がくの字に折れて外反するもの(222)と直線的に伸びるもの(223・224)で、胴部は不明である。底部は出土していないが、脚台部(225・226)が出土しており、台付甕と考えられる。

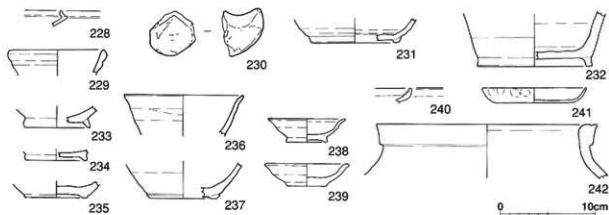
碗

碗は口縁部のみ(227)で、口縁短部が外側に屈曲し、くの字形を呈する中期中葉のものだろう。

D. その他の遺物(第61図)

環濠出土として取り上げられた土器には、古代から中世の資料が少数含まれている。これらは、遺構検出時に十分除去できなかった表土層からの混入品と考えられる。詳細は遺物観察表に記載しているので、ここでは概略を示す。

須恵器は、古墳時代型の坏身(218)、瓶類(229)、坏(231)、長頸壺(232)があり、7～8世紀のものと考えられる。土師器は、甕の把手(230)が出土している。坏身(218)とはほぼ同時期の7世紀代のものと考えられる。灰釉陶器は、碗(233・234・236)が出土している。10世紀のO-53～H-72号窯式の製品である。中世前期の土器には、山茶碗の碗(235・237)・小碗(238)・小皿(239)、土師器の伊勢型鍋(240)が出土している。中世後期の土器としては、15世紀～16世紀頃の手づくね成形土師器皿(241)と常滑窯の甕(242)がある。



第61図 S D-1 出土古墳時代～中世土器(1/4)

2. 竪穴住居 (第62図)

SH-2・3 (243~246) 243~246はすべて土師器である。243・244は高坏で、243は屈折脚を伴うだろう。244は柱状部の下部がふくらむが、その張り出しは大きくない。245は小型壺で体部は小さく、246は壺で広口になる。いずれも古墳時代中期のもので、244は中期前葉と思われる。

SH-3 (247~249) 247・248は高坏で、247の柱状部のふくらみは244に比べて大きく、やや後出的な印象を受ける。249は弥生土器と考えられる不明品で、表面にヘラ描きの線刻が見られる。

SH-5 (250・251) 250・251は弥生土器の高坏である。250は脚部で、柱状部が長く典型的な櫛描横線文が見られる寄道様式のもの。251は坏部の口縁部である。

SH-6 (255~257) 255・256は古墳時代後期前葉の土師器である。255は把手付鍋で、寸胴の体部は全面がハケメ調整される。256は小型の甕で、わずかに長胴化し、底部はやや平坦である。257は円筒埴輪の突帯付近である。焼成が不良のため、全体に白みがかった淡褐色を呈する。突帯は断面方形で高さは比較的高い。付近に埴輪を樹立した古墳が存在したことの証左であり、さらに埴輪生産に携わった人物の住居の可能性もあろう。

SH-7 (252~254) 252は弥生土器の壺の頸部と考えられ、断面三角形の2条の突帯が付く。253は弥生土器の台付甕の脚部。254は古墳時代中期の高坏で、脚部が広く裾広がりになる大型高坏である。

3. 掘立柱建物・柵 (第62図)

図化できた遺物の点数が少ないため、掘立柱建物と柵を合わせて説明する。

SB-2 (258) 258は須恵器の坏である。箱形を呈し、径はやや小さい。古墳時代終末期か。

SB-9 (259) 259は土師器の皿である。口縁部はヨコナデし、端部は上に摘み上げる。また端部外面には1条の沈線がめぐる。戦国時代、15・16世紀のものだろう。

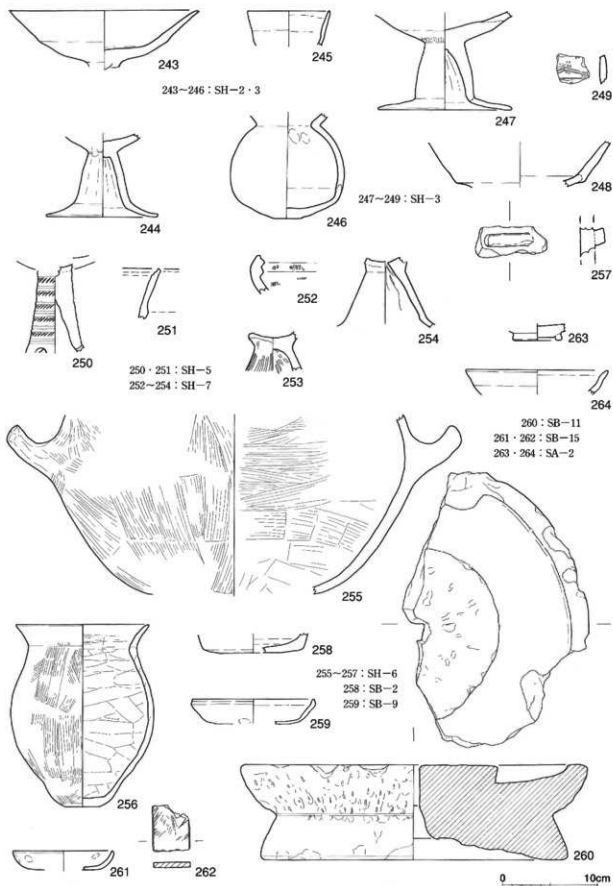
SB-11 (260) 凝灰岩製の茶臼で、柱の根固めに転用されたものである。外面には工具ではつった痕跡が明瞭に見られる。

SB-15 (261・262) 261は手づくね成形された土師器の皿で、262は薄い砥石である。いずれも近世のもの。

SA-2 (263・264) 263は龍泉窯系の青磁碗の高台。264は瀬戸美濃産陶器の端反皿で、灰釉が施される。いずれも戦国時代、15・16世紀のものである。

4. 井戸 (第63~66図)

SE-1 (265~280) 265~278は山茶碗である。265は高台の付いた小碗、266~268は小皿で、渥美・湖西産と考えられ、I~III期の製品まで存在する。269~278は碗で、小碗・小皿と同様にI~



第62図 竪穴住居・掘立柱建物・欄出土遺物 (1/4)

Ⅲ期の製品で占められる。なお、275～278は底部の外面に墨書が見られ、275は「東」と判読されるがほかは分からない。その形状から花押と思われる。なお、275～278はすべて渥美・湖西Ⅲ期の製品であり、ほぼ同時期にここに廃棄されたものだろう。279は常滑産の壺で7型式のもの。280は土師器の伊勢型鍋で、山茶碗に並行する13世紀代に比定されるものである。

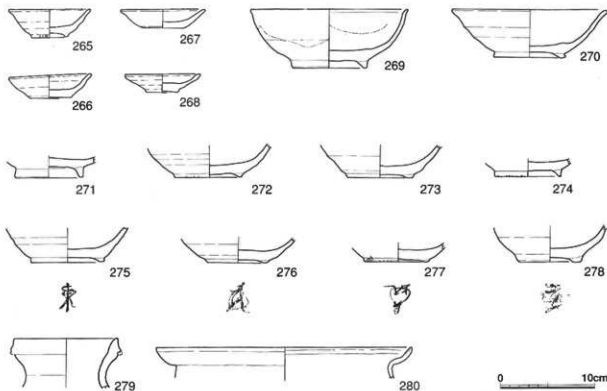
遺物から、S E - 1 は12～13世紀代にかけて使用された遺構と考える。

S E - 2 (281～307) 281・282は須恵器である。281は摘みのついた蓋、282は器高の浅い盤で、脚が付くものだろう。あるいは灰釉陶器に並行する托の可能性もある。283は灰釉陶器の深碗と考えられ、高台は高く断面形は彎曲が強い。底部は回転糸切りである。284は山茶碗の底部。285～292は陶器で、292は井戸の最上部から出土しており、混入品である。289・291・292は常滑産、ほかはすべて瀬戸美濃産である。285・286は天目茶碗で前者は登窯、後者は大窯の製品である。

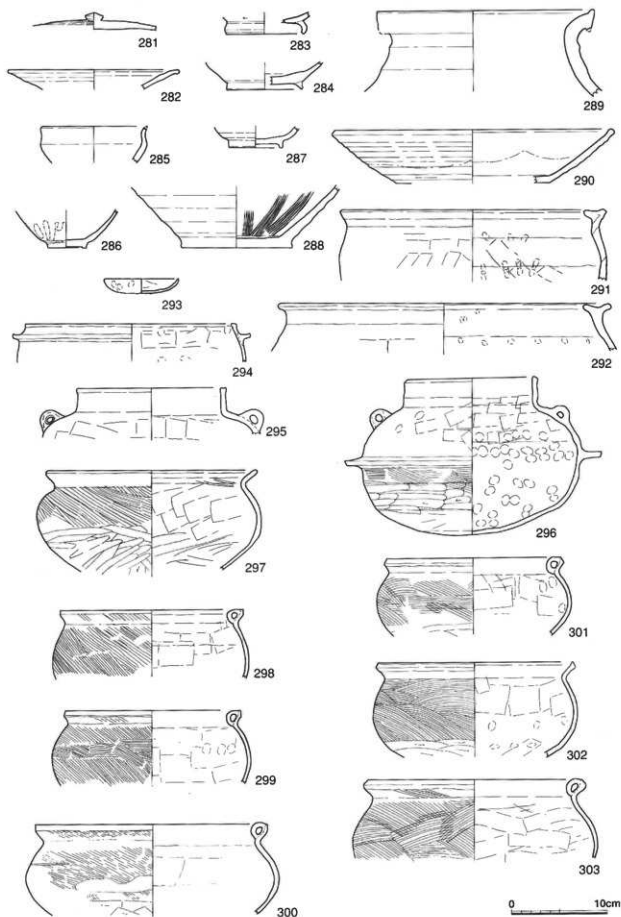
287は登窯期の灰釉の丸碗、288は大窯期の摺鉢。289は常滑7型式に比定される広口壺。290は古瀬戸後期の直縁大皿で灰釉が施される。291・292は常滑の赤物の甕で、前者は口縁部の外側への引き出しが弱いので17世紀、後者は強いので18世紀のものだろう。293～307は土師器である。293は手づくね成形された皿、294は羽釜形鍋で、器壁は比較的薄く15世紀のものだろう。296は茶釜形鍋である。297～307はく字状口縁鍋である。いずれも体部内面は板ナデ、外面上部はハケメ、下部はヘラケズリといった調整の共通性が認められる。ただし、297は口縁部の器壁が薄く、端部の外側への折り返しが顕著でないことや形態が異なり、古い特徴を留めると思われる。

遺物から、S E - 2 は15～16世紀を中心に使用され、17世紀代に埋められたと考える。

S E - 3 (308～327) 313は青磁碗の底部。317は中世前期の壺の肩付近で、2条のヘラ描き沈線



第63図 S E - 1 出土遺物 (1/4)



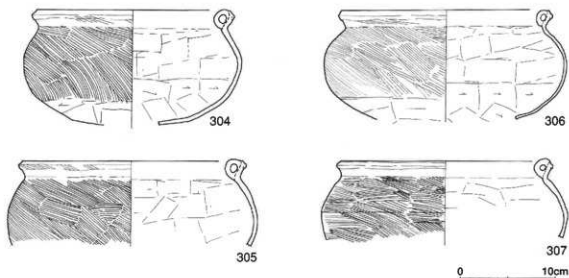
第64図 SE-2出土遺物-1 (1/4)

が見られ、二または三筋壺であろう。常滑産か。318は山茶碗の鉢で、口縁端部を強くナデて内外に張り出させる。瀬戸産か。308～312・314・319～322・325は瀬戸美濃産陶器である。308は出土例の少ない灰釉の天目茶碗である。体部は深く、口縁部は長く垂直気味に立ち上がる。登窯1～2小期に比定されよう。309は鉄釉の丸碗。310は長石釉の志野丸皿、311は見込みの釉が輪状にはがされた輪禿皿。312は菊花皿で、灰釉の後銅緑釉がかけられている。314は灰釉の徳利。319～322は摺鉢で、319・320は大窯製品、321・322は登窯製品である。325は鉄絵鉢で、口縁部を強く屈曲させ、内面に鉄絵を施したのち灰釉をかける。315・316・323は常滑産陶器である。315・316は甕で前者は11型式、後者は10型式に比定される。323は近世の赤物の鉢で、18世紀のものだろう。326は土師器の茶釜型鍋。327は砥石である。

遺物から、SE-3は17～18世紀に使用されたと考える。

5. 溝 (第67～70図)

SD-2 (328～401) 328～329は古墳時代の土師器で、前者は屈折脚の高坏、後者は把手である。330～331は古代の須恵器で、330は蓋、331は高盤の脚部だろう。333～336は灰釉陶器の碗。337～348は山茶碗で、大半が渥美・湖西産だろう。337は小皿、338～347は碗である。このうち345は体部が深く、口縁部が端反して輪花を伴うなどⅠ期の製品と考えて良いだろう。348は器種が不明であり、とりえず鉢とした。色調や焼成はまさしく山茶碗のそれであるが、吊手を持つなど鉄鍋に形態が類似する。349～352は舶載磁器である。349はへう描きの蓮弁文が乱れた龍泉窯系B4類の碗、350も碗、351は端反皿でやはり龍泉窯系である。352は染付皿B群。353～381は陶器である。このうち372～377は常滑産、363は産地不明、ほかは瀬戸美濃産である。353～357は皿で、354は灰釉の腰折皿、355は陶胎染付、356は長石釉の志野丸皿、357はさらに鉄絵を施した鉄絵皿である。358～361は鉄釉の天目茶碗で大窯・登窯期のもの。362は鉄釉の丸碗で大窯期と思われる。363は灰釉の丸碗で色調はややビ



第65図 SE-2出土遺物-2 (1/4)

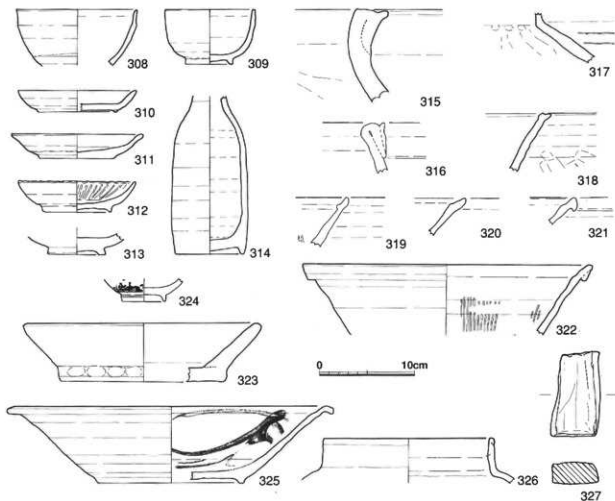
シクがかかる。364は腰鎗茶碗で、遺物の中では時期が著しく異なるため、混入品だろう。368～373は鉢で、常滑産は片口鉢、瀬戸美濃産は摺鉢である。片口鉢は372が端部に面を持った常滑6b型式に、ほかは12型式に比定される。摺鉢はいずれも瀬戸美濃大窯1～2のものである。375～377は甕で375は常滑7型式、ほかは10型式である。378・379は鉄釉の大皿で、378は底部がケズリ込みされた大窯4の製品である。380は鉄釉の古瀬戸瓶子、381は瀬戸美濃大窯3の茶入である。381～397は土師器である、381～390は手づくね成形の皿で、389・390の口縁部は端部内面に面を持つ。391は伊勢型鍋。392・393は半球形鍋、394・395・397はくの字状口縁鍋。396は内弯形口縁鍋である。398は凝灰岩製の鉢で、外面には加工時のハツリ痕が顕著である。石質はやハツリの痕跡は260の茶臼に近似している。399は土師器の不明品で、外面にヘラの線刻が見られる。400・401は砥石である。

遺物は戦国時代（16世紀）を中心に、12世紀～17世紀までのものがまとまっている。16～17世紀に検出された姿になった遺構と考えるが、はじめは中世前期までさかのぼる可能性がある。

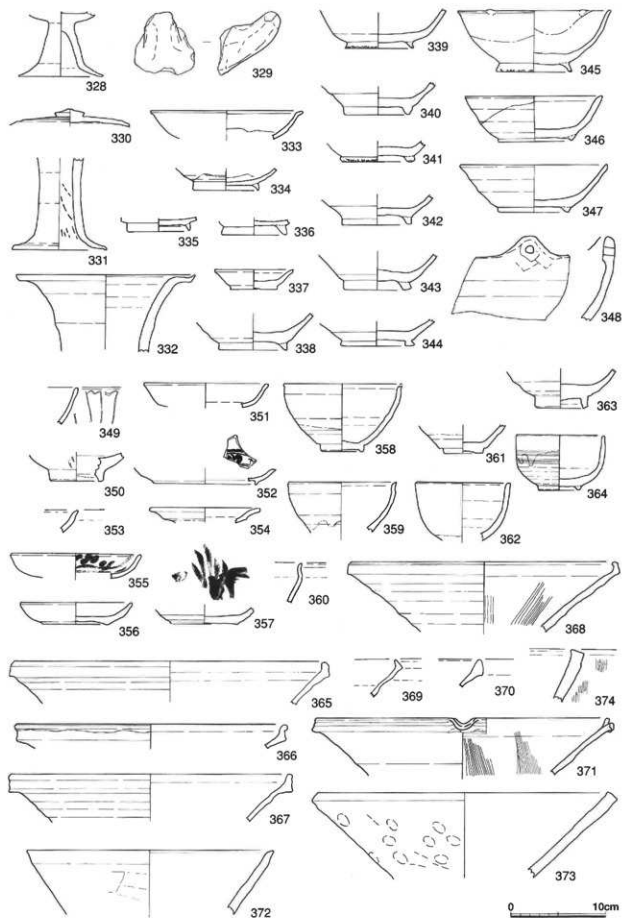
S D - 3 (402・403) 402は灰釉の丸皿、403は腰鎗茶碗で瀬戸美濃登窯3～8～9小期のもの。

S D - 4 (404) 常滑産の片口鉢で10型式に比定される。

S D - 5 (405～408) 405は巴文の軒棧瓦。406～408は磁器の染付碗・皿である。



第66図 SE-3出土遺物（1／4）

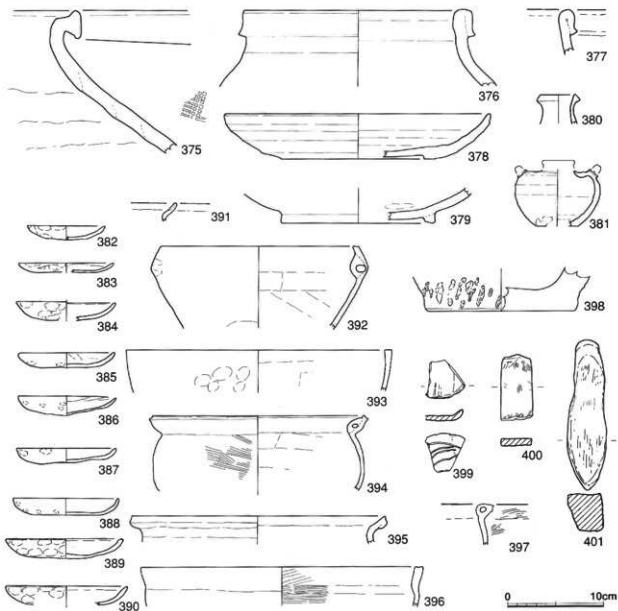


第67図 SD-2出土遺物-1 (1/4)

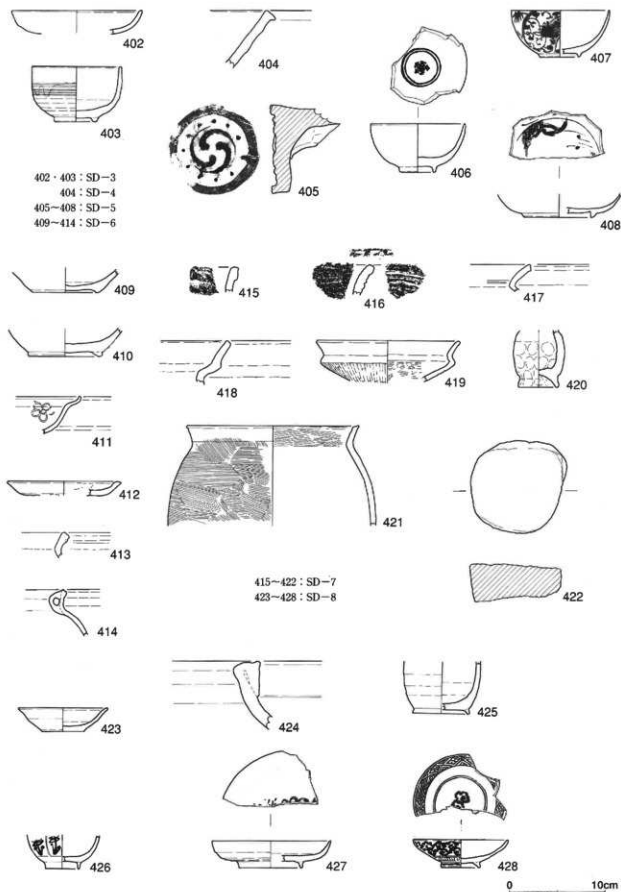
SD-6 (409~414) 409・410は山茶碗の碗で渥美・湖西産Ⅲ期のもの。411は古瀬戸後期の折縁小皿で内面に印花文を持つ。412~414は土師器で、412は口縁部をヨコナデした皿、413・414はくの字状口縁鍋である。

SD-7 (415~422) 415・416は縄文土器の深鉢である。415は外面に突帯を持ち、内外面はナデ調整される。416は口縁端部に竹管の押し引きが見られ、外面は条痕調整される。417~421は弥生土器と考えられる。417は単純口縁壺。418は有段口縁壺で、山陰系の影響を受ける。419は特殊な形状の高坏か。420は不明品の脚部ではないかと考える。中空で、外面は手づくねによるユビオサエ痕が明瞭である。また下端の椀地面を凹ませている。421は甕で細かなハケメが見られる。422は不明品で、破断した一部分である。被熱して外面は強く赤みがかかる。

SD-8 (423~428) 423は山茶碗の小皿。424は常滑産の甕でⅡ型式。425は瀬戸美濃産の登窯



第68図 SD-2 出土遺物-2 (1/4)



第69図 SD-3~8出土遺物(1/4)

期の壺、427も瀬戸美濃産で灰釉が施され、内面見込みに鉄絵が見られる摺絵皿。426・428は磁器・染付の丸碗と皿である。

SD-9 (429~441) 429~433は陶器で、431を除いて瀬戸美濃登窯期の製品である。429は鎗茶碗、430は鉢で、梅文鉢と思われる。431は端反の皿で、長石釉を用いて三島手とする。432は鉄釉の鍋。433は摺鉢である。434~441は磁器の染付である。434・435は広東碗、436~438は碗と小杯、439~441は箱形湯呑である。いずれも18~19世紀のものだろう。

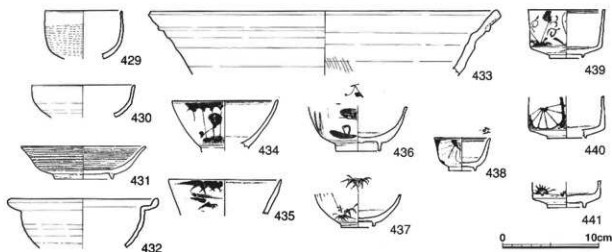
6. 土墳 (第71~76図)

今回は、遺構数が多く説明が煩雑になるため、各時代ごとにまとめて主要な遺物を説明したい。なお、各遺物の詳細は表2を参照されたい。

弥生時代の土墳 (442~446、448~455・457・458・462・463) 弥生時代の上墳には、性格不明の土器集積SX-1~3、SK-2~10・12・15・16がある。いずれも弥生時代後期前葉、寄道様式の土器である。器種には台付甕や高坏、壺類が見られ、特定器種の集中など特別な意図は見いだせない。SK-7から出土した452は小型高坏、または壺の脚部と考えられ、4方向に円孔を持つ。SK-15から出土した462は無頸鉢で、遺存状態の良くない土器が多い中、内外面のミガキが明瞭に観察される。SK-16から出土した463はミニチュア壺で、口縁部は欠損するが体部は完存しており、体部中位のやや下が稜を成す形状から、弥生土器と判断した。

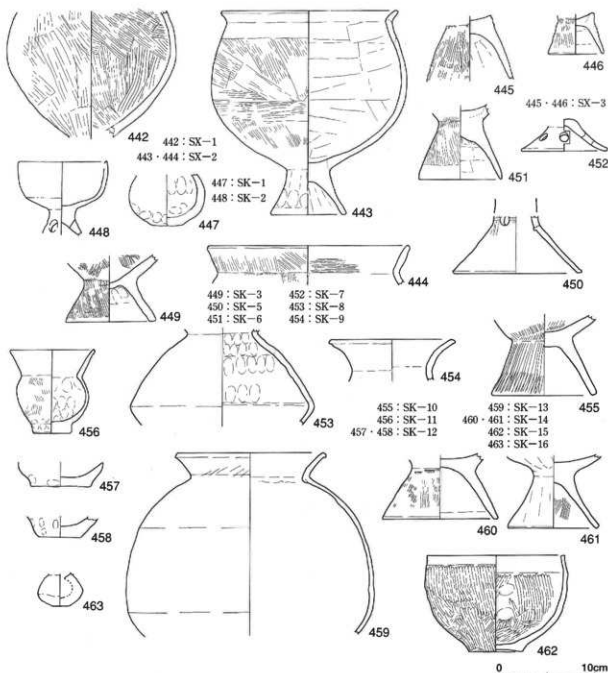
古墳時代~古代の土墳 (447・456・459~461・464~503) 古墳時代~古代の上墳にはSK-1・11・13・14・17~34がある。遺物の出土量はさほど多くなく、弥生時代など前時代の遺物を含むものが多い。

447はSK-1、456はSK-11からそれぞれ出土した小型壺で、前者はわずかに平坦な底部を持った丸底なのに対し、後者は突出した底部を形成する。後者はやや古い要素を残してはいるが、いずれも古墳時代中期のものとする。SK-13から出土した459は体部の内外面がナデ調整された甕でや



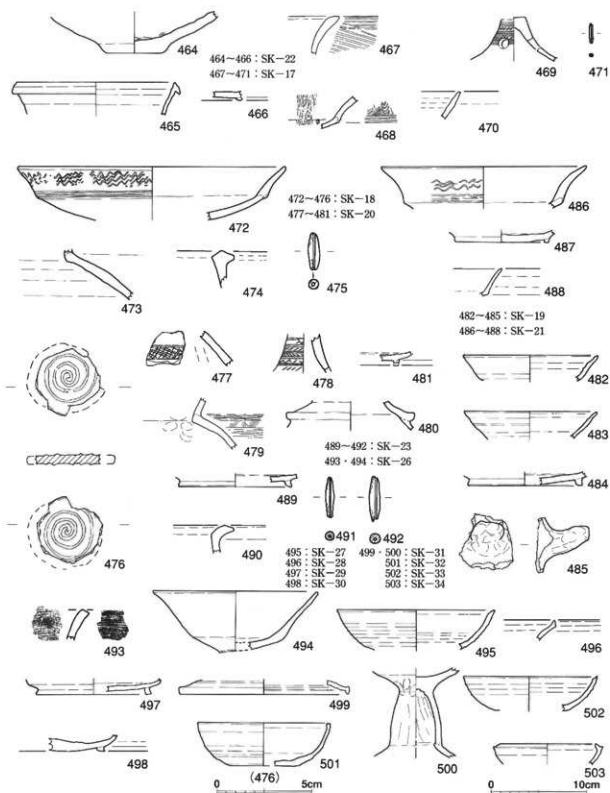
第70図 SD-9出土遺物 (1/4)

はり古墳時代中期のものとする。464～503は古墳時代終末期～奈良時代を中心に、一部は平安時代の遺構に伴うものである。SK-18から出土した473は須恵器の壺、474は土師器の清郷型鍋で灰釉陶器の巨大寺窯式（11世紀）に並行するもの、475は細形の土鍾で474と同時期のものだろう。SK-20から出土した480は弥生土器の混入品で、大型の裝飾高坏の脚部ではないかと考える。SK-19から出土した482・483は坏部の彎曲が弱く、古墳時代終末期でも最終末のものである。SK-23から出土した489は奈良時代の須恵器の坏だが、490は灰釉陶器のH-72号窯式（10世紀後葉）に並行する清郷型鍋、491・492は細形の土鍾で灰釉陶器並行期のものだろう。SK-26から出土した494、SK-31から出土した500はいずれも古墳時代中期の屈折脚高坏である。



第71図 土器出土遺物-1（弥生～古墳時代、1／4）

銅鐻片 ところで、古代の土壌から出土した遺物の中でも特筆されるものに、SK-18から出土した銅鐻鈕の飾耳片（476）がある。弥生時代の混入遺物であるが、双頭渦文の飾耳の片方で、周縁はわずかに一部が遺存するだけでほとんどは劣化のため欠損している。残存する最大径は3.4cm、厚さ



第72図 土壌出土遺物-2（古墳時代～古代、1/2・1/4）

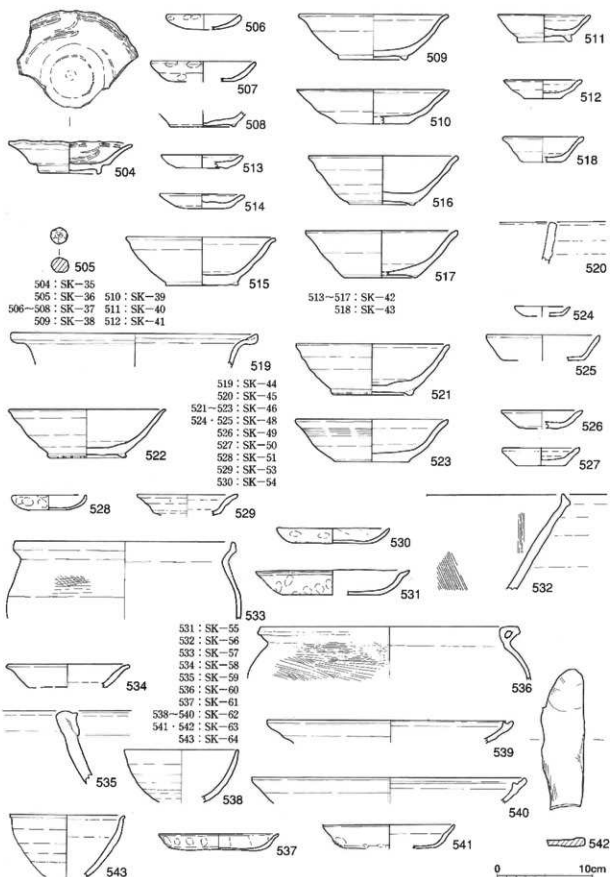
は0.4cmである。渦文は右巻きに陽鈐され、渦文の線の間の隙間は広い。その特徴から近畿式銅鐸の突線鈕Ⅲ式、なかでもⅢ1b～Ⅲ2式に比定される。すでに述べたように、SK-18は10世紀後葉の遺物を伴う平安時代の性格不明の土壌であり、この銅鐸片は恐らくその周辺で確認された包含層に含まれる遺物だったと考えられる。銅鐸自体は弥生時代後期前葉のものだろう。なお、本例は出土後に保存処理を行い、恒久的な保存をはかっている。また、後述するように鉛同位体比の分析を行い、比較品として豊橋市内の瓜郷遺跡でかつて採集された銅鐸片も分析している（第5章2参照）。

中世の土壌（504～548） 中世前期の遺構にはSK-36～51、中世後期の遺構にはSK-35・52～66がある。前者は渥美・湖西産山茶碗を主体にし、後者は瀬戸美濃あるいは常滑産陶器や土師器がおもに出土している。

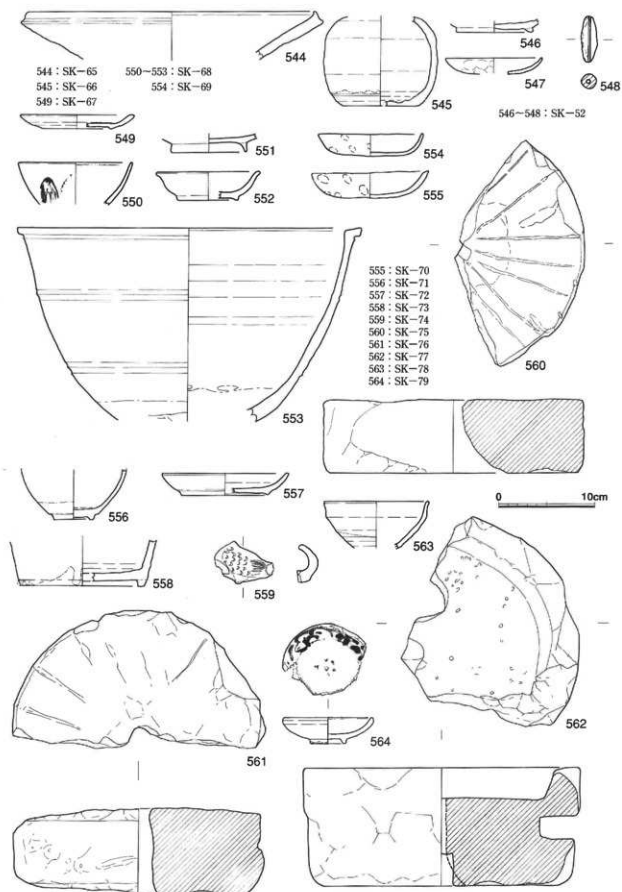
SK-35から出土した504は舶載磁器の青磁稜花皿である。腰折れ・端反の形態で、口縁端部は突出部を形成しており、内面にはヘラ描き文が見られる。龍泉窯系で15世紀のものである。

SK-36から出土した505は土玉で手づくね成形され、山茶碗の陶瓦に形状が近似している。SK-37から出土した506・507はいずれも非ロクロ成形の土師器皿で、口縁端部にヨコナデを施す。また508は本遺跡では数少ない知多産山茶碗の碗で、知多6型式に比定される。SK-46から出土した521・522は渥美・湖西産山茶碗の碗で、高台はやや高く、体部も深めで口縁端部がわずかに端反となることから、渥美・湖西Ⅱ期のものである。523は土師器のロクロ成形皿で、形態は山茶碗の碗に類似し、高台は無く底部は回転糸切りされている。SK-55から出土した531は非ロクロ成形の土師器皿で、口縁部はヨコナデされ、端部はわずかに上に摘み上げる。また端部の外面には1条の沈線がめぐる。底部外面はユビオサエ痕が明瞭である。中世後期、15世紀後葉～16世紀前葉のものだろう。SK-62から出土した538～540はすべて瀬戸美濃産陶器である。538は鉄釉の天目茶碗で口縁部はあまり屈曲しない。539・540は摺鉢で、口縁部内面に断面三角形の突帯がめぐる。いずれも古瀬戸後Ⅳ期のものである。

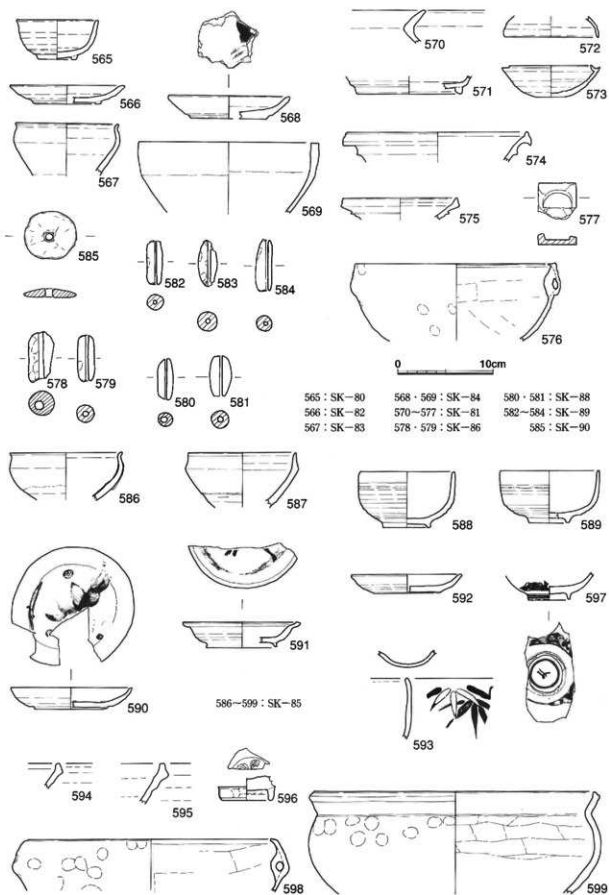
近世の土壌（549～621） 近世の遺構にはSK-67～91がある。SK-68から出土した552は志野丸皿で、形態は大窯期の端反皿に似る。大窯～登窯移行期の製品であろう。SK-74から出土した559は土人形の鳥である。羽が立体的に表現され、羽毛がヘラ描きされている。560～561はそれぞれ柱穴のSK-75～77から出土した挽き臼である。560・561は上部、562は下部で、いずれも凝灰岩製で欠損していた。柱の根石や根固めに使用されたものである。SK-90から出土した585は土製品の紡錘車である。断面形は傘形を呈し、中央に円孔が穿たれる。また円孔の周りは方形に凹んでおり、固定する際の型として利用された部分と考える。600～621は段丘斜面に設けられた大型廃棄土壌SK-91の遺物である。600は古墳時代中期の土師器の坏で、混入品。そのほかは一部大窯期の製品もあるが、おおむね登窯1～2段階の初め、17世紀の遺物を主体としている。



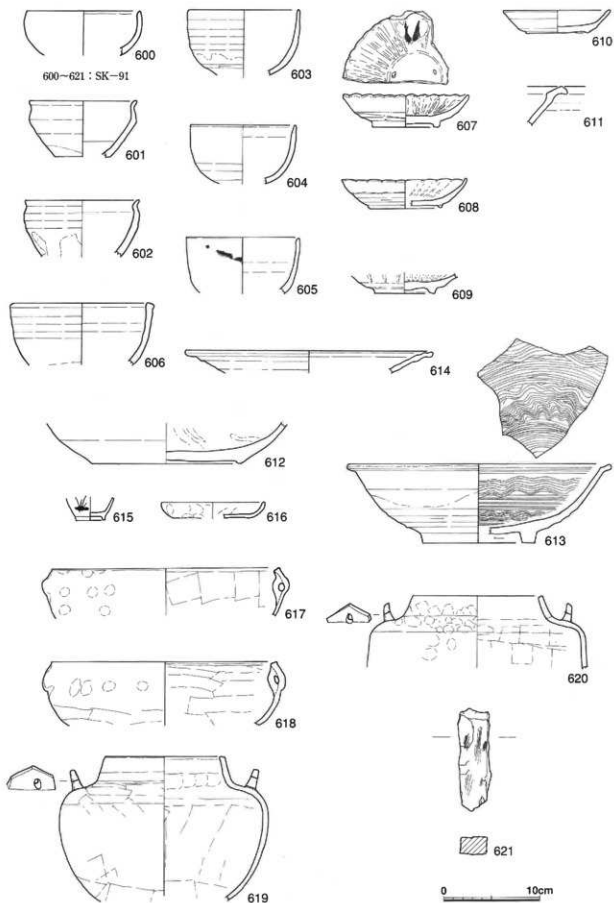
第73図 土器出土遺物-3 (中世、1/4)



第74図 土壇出土遺物-4 (中世後期~近世-1、1/4)



第75図 土墳出土遺物-5 (近世-2、1/4)



第76図 土壇出土遺物-6 (近世-3、1/4)

7. 遺物包含層 (第77図)

最も多いのは弥生土器で、いずれも寄道様式のものである。古墳時代以降の遺物はその出土量から客体的な存在であり、包含層の形成自体を弥生時代後期前葉に求めることができる。

622～635は弥生土器である。622～624は高坏、625・626は拡張口縁広口壺で、625は口縁部内面に連続する櫛刺突、626は口縁部外面に2条の沈線が見られる。627～629は壺で、627は体部外面に櫛描波状文と横線文が明瞭である。629はわずかに底部を形成するが体部は丸みを帯びるので、古墳時代中期の小型壺の可能性も否定できない。630～634は台付甕で634は小型品、635はワイングラス形高坏と考える。

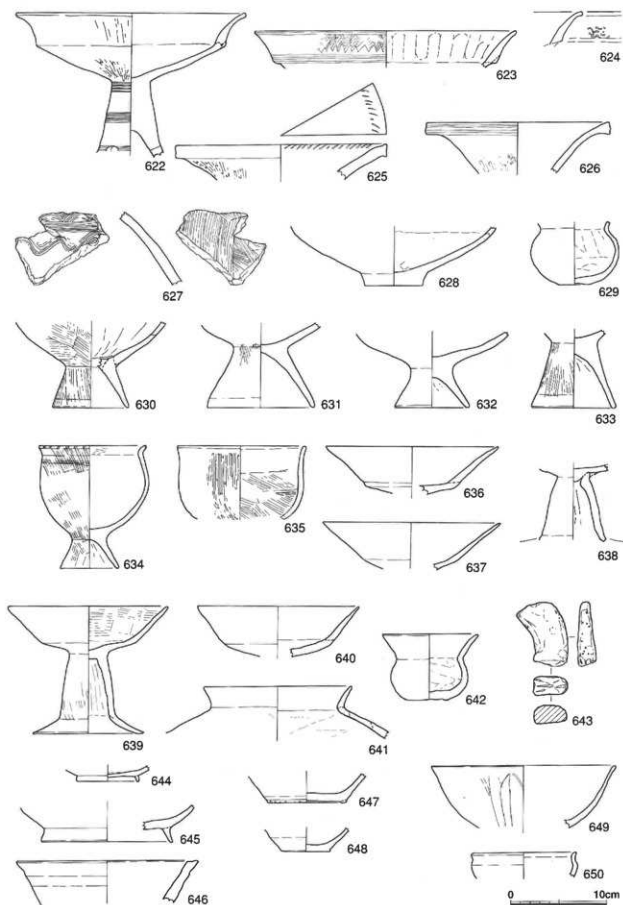
636～642は古墳時代中期の土師器である。636～640は屈折脚高坏と考えられ、636・637は坏部が浅いものの径は大きく、640は坏部の径が小さくやや内弯している。641は甕で体部はナデ調整。642は小型壺で底部はわずかに平坦となる。内外面ともナデ調整である。

643～645は古代の遺物である。643は不明土製品で、手づくねで成形されている。側面には細い棒で刺突した盲孔が無数に見られる。また欠損した部分にはヘラの線刻があり、接合部ではないかと考えられる。その形状から、土馬の頭部となる可能性が高い。644は灰釉陶器の碗でO-53～H-72号窯式のもの、645は灰釉陶器の大碗で高台は細く高い。

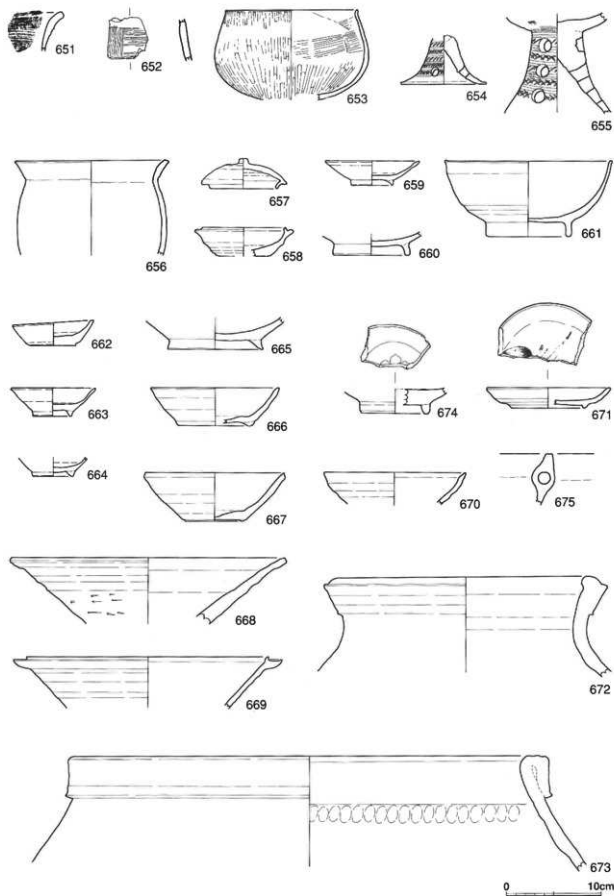
646～650は中世の遺物である。646は知多産と考えられる鉢で口縁端部は凹んだ面を持つ。647は渥美・湖西産Ⅲ期の碗、648は同じくⅡ期の小皿。649は青磁の蓮弁文碗で能泉窯系B1類に比定される。650は鉄釉の天目茶碗で、瀬戸美濃大窯4に比定される。

8. 表土

重機を使用した表土除去作業や、遺構検出作業の中で出土した帰属不明の遺物を一括して説明する。651は縄文晩期の深鉢で、外面に貝殻と思われる条痕が見られる。652は弥生土器の細頸壺で、外面には櫛描文が施された瓜郷様式のもの。653～655は弥生土器で、いずれも寄道様式のもの。653は無頸鉢と考えるが、ワイングラス形高坏の可能性もある。654は小型高坏の脚部で外面に櫛の連続刺突が見られる。655は高坏と考えるが、脚は太く大型で、3方向に三段の円孔を穿った(うち、最上段は貫通しない盲孔)特異な器形を呈する。5段の櫛描横線文と櫛の連続刺突列があり、櫛の刺突は交差させてX字状にしている。656は古墳時代の土師器の甕で、体部内外面はナデ調整である。657・658は古墳時代の須恵器で、657は湖西産の壺蓋(湖西Ⅳ期前葉)、658は産地不詳だが7世紀後葉のものである。659～661は灰釉陶器で、659は皿、ほかは深碗である。659は底部が回転ヘラケズリされている。662～669は山茶碗で、662は小皿、663・664は小碗、665～667は碗、668・669は鉢である。667・668は知多産、669は口縁部の形態から瀬戸産、ほかは渥美・湖西産と考える。670・671は瀬戸美濃産陶器である。670は灰釉の古瀬戸平碗、671は登窯期の鉄絵皿である。672・673は常滑産陶器の甕で、両者とも11型式に比定される。674は青磁碗で見込みに押印文がある。675は土師器の半球形鍋。



第77図 遺物包含層出土遺物 (1/4)



第78図 表土出土遺物 (1/4)

註

- 1 小林久彦 1994 「第4章 遺物 1. 弥生時代の遺物」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』74頁
123の広口壺
- 2 鈴木敏則 1996 「第6章 環濠（SD-1）出土土器」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第26集 高井遺跡』

参考文献

- 岩原（赤木）剛 1994 「3. 出土遺物について」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址（I）』豊橋市教育委員会他
- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼を追って」資料集』日本福祉大学
知多半島総合研究所
- 賛 元洋 1997 「須恵器から灰釉陶器へ」『三河考古』第10号 三河考古学談話会
- 藤澤良祐 1989 「本業焼の研究（3）」『研究紀要』Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要』Ⅹ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1993 「瀬戸美濃大窯の編年」『瀬戸市史 陶磁史編4』 瀬戸市
- 鈴木敏則 1999 「遠江の古墳時代中期土器様式（山ノ花様式）」『東国土器研究』5号 東国土器研究会
- 鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』 東海土器研究会

表2 遺物観察表

No.	遺物番号	分類	大型種	小型種	延尺	幅尺	重量	長さ	厚さ	高さ	色	形状	特徴	備考
1	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										中流部に横溝
2	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	6.4	21.5	10.2							
3	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	22.2									
4	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
5	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
6	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	14.9									
7	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	20.0									
8	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
9	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
10	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
11	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	3.5	14.5	9.0							
12	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
13	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	7.5		9.6	25.8	6.6					
14	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			18.9							
15	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			21.4							
16	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			12.4							
17	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			12.0							
18	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			25.6							
19	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	3.9	18.4	11.5							
20	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			11.0							
21	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
22	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
23	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
24	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	4.8	15.8	9.5							
25	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	3.2	13.1	9.7							
26	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			15.4							
27	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	4.6	18.0	10.8							
28	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			15.9							
29	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	3.5	15.8	9.9							
30	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	20.5	7.2	4.1	30.4	9.8	28.3	6.4			
31	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	4.7	14.8	10.1	24.8						
32	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	13.9		26.2	4.8						
33	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			27.7							
34	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			9.2	26.0						
35	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			24.9	5.1						
36	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	3.5	12.2	9.1							
37	SD-1	粘土土器	壺	壺腹				5.5						
38	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	2.0	6.7	7.7							
39	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			13.5							
40	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	4.4	9.2	6.6							
41	SD-1	粘土土器	壺	壺腹				6.8						
42	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	11.8	4.5	3.5	7.4	5.4	11.8	5.1			
43	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			3.0	9.1	6.5	13.6				
44	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	17.2	7.0	3.3	12.2	7.5	15.6	5.0			
45	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	5.9		14.0	4.9						
46	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	10.8	4.5	3.0	6.7	5.5	10.9	4.0			
47	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			5.0	4.2	11.8	4.0				
48	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	9.4	4.0	1.8	7.5	6.4	10.0	3.4			
49	SD-1	粘土土器	壺	壺腹	14.1	6.2	3.1	7.7	6.4	12.9	4.2			
50	SD-1	粘土土器	壺	壺腹			11.1							
51	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
52	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
53	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
54	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
55	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
56	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
57	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
58	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
59	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
60	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
61	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
62	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
63	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
64	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
65	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
66	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
67	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
68	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
69	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
70	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
71	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
72	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
73	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
74	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
75	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
76	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
77	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
78	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
79	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
80	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
81	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
82	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
83	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
84	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
85	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
86	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
87	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
88	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
89	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
90	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
91	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
92	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
93	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
94	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
95	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
96	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
97	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
98	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
99	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										
100	SD-1	粘土土器	壺	壺腹										

No.	作品名	分類	人・団体	小冊種	紙版	紙版冊数	紙版C/D	紙版E/F	紙版G/H	紙版I/J	紙版K/L	紙版M/N	紙版O/P	紙版Q/R	紙版S/T	紙版U/V	紙版W/X	紙版Y/Z	紙版AA	紙版AB	紙版AC	紙版AD	紙版AE	紙版AF	紙版AG	紙版AH	紙版AI	紙版AJ	紙版AK	紙版AL	紙版AM	紙版AN	紙版AO	紙版AP	紙版AQ	紙版AR	紙版AS	紙版AT	紙版AU	紙版AV	紙版AW	紙版AX	紙版AY	紙版AZ	紙版BA	紙版BB	紙版BC	紙版BD	紙版BE	紙版BF	紙版BG	紙版BH	紙版BI	紙版BJ	紙版BK	紙版BL	紙版BM	紙版BN	紙版BO	紙版BP	紙版BQ	紙版BR	紙版BS	紙版BT	紙版BU	紙版BV	紙版BW	紙版BX	紙版BY	紙版BZ	紙版CA	紙版CB	紙版CC	紙版CD	紙版CE	紙版CF	紙版CG	紙版CH	紙版CI	紙版CJ	紙版CK	紙版CL	紙版CM	紙版CN	紙版CO	紙版CP	紙版CQ	紙版CR	紙版CS	紙版CT	紙版CU	紙版CV	紙版CW	紙版CX	紙版CY	紙版CZ	紙版DA	紙版DB	紙版DC	紙版DD	紙版DE	紙版DF	紙版DG	紙版DH	紙版DI	紙版DJ	紙版DK	紙版DL	紙版DM	紙版DN	紙版DO	紙版DP	紙版DQ	紙版DR	紙版DS	紙版DT	紙版DU	紙版DV	紙版DW	紙版DX	紙版DY	紙版DZ	紙版EA	紙版EB	紙版EC	紙版ED	紙版EE	紙版EF	紙版EG	紙版EH	紙版EI	紙版EJ	紙版EK	紙版EL	紙版EM	紙版EN	紙版EO	紙版EP	紙版EQ	紙版ER	紙版ES	紙版ET	紙版EU	紙版EV	紙版EW	紙版EX	紙版FY	紙版FZ	紙版GA	紙版GB	紙版GC	紙版GD	紙版GE	紙版GF	紙版GG	紙版GH	紙版GI	紙版GJ	紙版GK	紙版GL	紙版GM	紙版GN	紙版GO	紙版GP	紙版GQ	紙版GR	紙版GS	紙版GT	紙版GU	紙版GV	紙版GW	紙版GX	紙版GY	紙版GZ	紙版HA	紙版HB	紙版HC	紙版HD	紙版HE	紙版HF	紙版HG	紙版HH	紙版HI	紙版HJ	紙版HK	紙版HL	紙版HM	紙版HN	紙版HO	紙版HP	紙版HQ	紙版HR	紙版HS	紙版HT	紙版HU	紙版HV	紙版HW	紙版HX	紙版HY	紙版HZ	紙版IA	紙版IB	紙版IC	紙版ID	紙版IE	紙版IF	紙版IG	紙版IH	紙版II	紙版IJ	紙版IK	紙版IL	紙版IM	紙版IN	紙版IO	紙版IP	紙版IQ	紙版IR	紙版IS	紙版IT	紙版IU	紙版IV	紙版IW	紙版IX	紙版IY	紙版IZ	紙版JA	紙版JB	紙版JC	紙版JD	紙版JE	紙版JF	紙版JG	紙版JH	紙版JI	紙版JJ	紙版JK	紙版JL	紙版JM	紙版JN	紙版JO	紙版JP	紙版JQ	紙版JR	紙版JS	紙版JT	紙版JU	紙版JV	紙版JW	紙版JX	紙版JY	紙版JZ	紙版KA	紙版KB	紙版KC	紙版KD	紙版KE	紙版KF	紙版KG	紙版KH	紙版KI	紙版KJ	紙版KK	紙版KL	紙版KM	紙版KN	紙版KO	紙版KP	紙版KQ	紙版KR	紙版KS	紙版KT	紙版KU	紙版KV	紙版KW	紙版KX	紙版KY	紙版KZ	紙版LA	紙版LB	紙版LC	紙版LD	紙版LE	紙版LF	紙版LG	紙版LH	紙版LI	紙版LJ	紙版LK	紙版LM	紙版LN	紙版LO	紙版LP	紙版LQ	紙版LR	紙版LS	紙版LT	紙版LU	紙版LV	紙版LW	紙版LX	紙版LY	紙版LZ	紙版MA	紙版MB	紙版MC	紙版MD	紙版ME	紙版MF	紙版MG	紙版MH	紙版MI	紙版MJ	紙版MK	紙版ML	紙版MN	紙版MO	紙版MP	紙版MQ	紙版MR	紙版MS	紙版MT	紙版MU	紙版MV	紙版MW	紙版MX	紙版MY	紙版MZ	紙版NA	紙版NB	紙版NC	紙版ND	紙版NE	紙版NF	紙版NG	紙版NH	紙版NI	紙版NJ	紙版NK	紙版NL	紙版NM	紙版NO	紙版NP	紙版NQ	紙版NR	紙版NS	紙版NT	紙版NU	紙版NV	紙版NW	紙版NX	紙版NY	紙版NZ	紙版OA	紙版OB	紙版OC	紙版OD	紙版OE	紙版OF	紙版OG	紙版OH	紙版OI	紙版OJ	紙版OK	紙版OL	紙版OM	紙版ON	紙版OO	紙版OP	紙版OQ	紙版OR	紙版OS	紙版OT	紙版OU	紙版OV	紙版OW	紙版OX	紙版OY	紙版OZ	紙版PA	紙版PB	紙版PC	紙版PD	紙版PE	紙版PF	紙版PG	紙版PH	紙版PI	紙版PJ	紙版PK	紙版PL	紙版PM	紙版PN	紙版PO	紙版PP	紙版PQ	紙版PR	紙版PS	紙版PT	紙版PU	紙版PV	紙版PW	紙版PX	紙版PY	紙版PZ	紙版QA	紙版QB	紙版QC	紙版QD	紙版QE	紙版QF	紙版QG	紙版QH	紙版QI	紙版QJ	紙版QK	紙版QL	紙版QM	紙版QN	紙版QO	紙版QP	紙版QQ	紙版QR	紙版QS	紙版QT	紙版QU	紙版QV	紙版QW	紙版QX	紙版QY	紙版QZ	紙版RA	紙版RB	紙版RC	紙版RD	紙版RE	紙版RF	紙版RG	紙版RH	紙版RI	紙版RJ	紙版RK	紙版RL	紙版RM	紙版RN	紙版RO	紙版RP	紙版RQ	紙版RR	紙版RS	紙版RT	紙版RU	紙版RV	紙版RW	紙版RX	紙版RY	紙版RZ	紙版SA	紙版SB	紙版SC	紙版SD	紙版SE	紙版SF	紙版SG	紙版SH	紙版SI	紙版SJ	紙版SK	紙版SL	紙版SM	紙版SN	紙版SO	紙版SP	紙版SQ	紙版SR	紙版SS	紙版ST	紙版SU	紙版SV	紙版SW	紙版SX	紙版SY	紙版SZ	紙版TA	紙版TB	紙版TC	紙版TD	紙版TE	紙版TF	紙版TG	紙版TH	紙版TI	紙版TJ	紙版TK	紙版TL	紙版TM	紙版TN	紙版TO	紙版TP	紙版TQ	紙版TR	紙版TS	紙版TU	紙版TV	紙版TW	紙版TX	紙版TY	紙版TZ	紙版UA	紙版UB	紙版UC	紙版UD	紙版UE	紙版UF	紙版UG	紙版UH	紙版UI	紙版UJ	紙版UK	紙版UL	紙版UM	紙版UN	紙版UO	紙版UP	紙版UQ	紙版UR	紙版US	紙版UT	紙版UU	紙版UV	紙版UW	紙版UX	紙版UY	紙版UZ	紙版VA	紙版VB	紙版VC	紙版VD	紙版VE	紙版VF	紙版VG	紙版VH	紙版VI	紙版VJ	紙版VK	紙版VL	紙版VM	紙版VN	紙版VO	紙版VP	紙版VQ	紙版VR	紙版VS	紙版VT	紙版VU	紙版VV	紙版VW	紙版VX	紙版VY	紙版VZ	紙版WA	紙版WB	紙版WC	紙版WD	紙版WE	紙版WF	紙版WG	紙版WH	紙版WI	紙版WJ	紙版WK	紙版WL	紙版WM	紙版WN	紙版WO	紙版WP	紙版WQ	紙版WR	紙版WS	紙版WT	紙版WU	紙版WV	紙版WW	紙版WX	紙版WY	紙版WZ	紙版XA	紙版XB	紙版XC	紙版XD	紙版XE	紙版XF	紙版XG	紙版XH	紙版XI	紙版XJ	紙版XK	紙版XL	紙版XM	紙版XN	紙版XO	紙版XP	紙版XQ	紙版XR	紙版XS	紙版XT	紙版XU	紙版XV	紙版XW	紙版XX	紙版XY	紙版XZ	紙版YA	紙版YB	紙版YC	紙版YD	紙版YE	紙版YF	紙版YG	紙版YH	紙版YI	紙版YJ	紙版YK	紙版YL	紙版YM	紙版YN	紙版YO	紙版YP	紙版YQ	紙版YR	紙版YS	紙版YT	紙版YU	紙版YV	紙版YW	紙版YX	紙版YY	紙版YZ	紙版ZA	紙版ZB	紙版ZC	紙版ZD	紙版ZE	紙版ZF	紙版ZG	紙版ZH	紙版ZI	紙版ZJ	紙版ZK	紙版ZL	紙版ZM	紙版ZN	紙版ZO	紙版ZP	紙版ZQ	紙版ZR	紙版ZS	紙版ZT	紙版ZU	紙版ZV	紙版ZW	紙版ZX	紙版ZY	紙版ZZ
-----	-----	----	------	-----	----	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

No.	遺物名	分類	図録	口径	底径	高さ	重量	出土	時代	色澤	製	器	等	産地・時期	備考
243	SH-2-3	土師器	高林	20.0	(6.3)			20	青	良好	淡茶褐色	内面ナメカラマシ、外面薄皮		古墳時代中期	
244	SH-2-3	土師器	高林		(5.8)			25	黄	良好	淡茶褐色	内面シロミナナデ、外面薄皮		古墳時代中期	高林A
245	SH-2-3	土師器	小形	8.8	(3.8)			20	青	良好	淡茶褐色	内外面シロミナナデ、底ナデ		古墳時代中期	
246	SH-2-3	土師器	小型		(11.3)	3.1		30	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ		古墳時代中期	
247	SH-3	土師器	高林		(10.4)			50	青	良好	淡褐色	内面ナメカラマシ、外面内面ナメカラマシ、外面薄皮		古墳時代中期	高林A
248	SH-3	土師器	高林		(4.6)			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ			
249	SH-3	土師器	下物					10	青	良好	淡茶褐色	薄皮		外周に線刻	
250	SH-5	土師器	高林		(9.3)			15	青	良好	淡茶褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ、底面線刻・横線刻		青銅器	
251	SH-5	土師器	高林		(4.3)			5	青	良好	淡茶褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		青銅器	
252	SH-7	土師器	高林		(5.1)			5	青	良好	淡茶褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		青銅器	
253	SH-7	土師器	高林		(3.4)			5	青	良好	淡茶褐色	内外面シロミナナデ、外面ナメ		大型土師	
254	SH-7	土師器	高林		(7.3)			15	青	良好	淡褐色	内外面シロミナナデ、底ナデ			
255	SH-6	土師器	高林		(19.1)			30	青	良好	淡茶褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
256	SH-6	土師器	高林	14.0		19.4	3.0	40	青	良好	淡茶褐色	内外面シロミナナデ、底ナデ、底面線刻・横線刻		古墳時代中期	
257	SH-6	土師器	高林		(3.2)			1	青	不良	淡褐色	内外面ナメ		古墳時代中期	
258	SH-2	土師器	高林		(2.0)	6.0		10	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
259	SH-9	土師器	高林	12.7		(2.6)	7.4	10	青	良好	淡茶褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ、底面線刻・横線刻		古墳時代中期	
260	SH-11	土師器	高林	36.2		13.1	11.8	50	青	良好	淡茶褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
261	SH-15	土師器	高林	19.6		2.6		10	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
262	SH-15	土師器	高林												
263	SH-2	土師器	高林		(1.7)	5.2		5	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
264	SH-2	土師器	高林	15.0		(2.7)		10	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
265	SH-1	土師器	高林	8.6		3.0	3.9	10	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
266	SH-1	土師器	高林	8.7		2.7	4.5	40	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
267	SH-1	土師器	高林	8.8		2.1	4.4	95	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
268	SH-1	土師器	高林	7.9		2.0	2.4	40	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
269	SH-1	土師器	高林	16.6		6.3	7.8	40	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
270	SH-1	土師器	高林	16.4		5.1	7.2	40	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
271	SH-1	土師器	高林		(2.2)	7.3		30	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
272	SH-1	土師器	高林		(3.4)	7.0		30	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
273	SH-1	土師器	高林		(3.6)	6.7		40	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
274	SH-1	土師器	高林		(1.8)	7.0		25	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
275	SH-1	土師器	高林		(3.6)	7.7		40	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
276	SH-1	土師器	高林		(2.6)	6.7		30	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
277	SH-1	土師器	高林		(2.1)	6.9		20	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
278	SH-1	土師器	高林		(4.0)	6.8		30	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
279	SH-1	土師器	高林	(11.0)	(3.3)			5	青	良好	淡褐色	内外ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
280	SH-1	土師器	高林	27.0	(3.3)			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
281	SH-2	土師器	高林		(1.7)			30	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
282	SH-2	土師器	高林	18.0	(2.1)			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
283	SH-2	土師器	高林		(2.3)	8.0		10	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
284	SH-2	土師器	高林		(2.8)	8.0		20	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
285	SH-2	土師器	高林		(3.8)			10	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
286	SH-2	土師器	高林		(4.2)	4.0		20	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
287	SH-2	土師器	高林		2.2	5.6		20	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
288	SH-2	土師器	高林		6.8	11.8		20	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
289	SH-2	土師器	高林	20.4	(8.4)			10	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
290	SH-2	土師器	高林	25.6	(5.7)	16.0		30	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
291	SH-2	土師器	高林	59.0	13.6			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
292	SH-2	土師器	高林	70.0	11.6			5	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
293	SH-2	土師器	高林	7.9	1.8			80	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
294	SH-2	土師器	高林	22.2	(4.0)			5	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
295	SH-2	土師器	高林	15.8	(4.8)			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
296	SH-2	土師器	高林	14.0	16.6			10	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
297	SH-2	土師器	高林	22.2	(10.5)			50	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
298	SH-2	土師器	高林	19.2	7.6			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
299	SH-2	土師器	高林	18.6	7.7			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
300	SH-2	土師器	高林	24.4	(9.8)			25	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
301	SH-2	土師器	高林	18.8	8.2			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
302	SH-2	土師器	高林	21.0	(10.0)			20	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
303	SH-2	土師器	高林	22.6	8.0			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
304	SH-2	土師器	高林	21.2	(12.2)			65	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
305	SH-2	土師器	高林	23.8	(9.0)			10	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
306	SH-2	土師器	高林	22.5	11.7			30	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
307	SH-2	土師器	高林	22.8	(8.3)			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
308	SH-2	土師器	高林	12.8	(6.0)			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
309	SH-2	土師器	高林	9.5	5.0			60	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
310	SH-2	土師器	高林	12.2	2.3	(5.2)		10	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
311	SH-2	土師器	高林	13.6	2.6	7.8		30	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
312	SH-2	土師器	高林	12.3	3.2	7.2		30	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
313	SH-2	土師器	高林		(2.3)	6.0		40	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
314	SH-2	土師器	高林		(16.9)	7.2		70	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
315	SH-2	土師器	高林		(9.8)			15	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	
316	SH-2	土師器	高林		(5.5)			5	青	良好	淡褐色	内外面ナメカラマシ、底ナデ		古墳時代中期	

No.	通称名	分類	部類	口注	部類	収録	その他	原形	転写	機成	色調	演	型	号	意地・時期	備考
317	52-3	陶器	壺			(7.6)		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
318	52-3	山形陶	鉢			(7.6)		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
319	52-3	山形陶	鉢			(5.5)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
320	52-3	山形陶	鉢			(5.5)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
321	52-3	山形陶	鉢			(3.7)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
322	52-3	山形陶	鉢	30.4		(7.5)		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
323	52-3	山形陶	鉢	22.2		(6.8 17.0)		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
324	52-3	山形陶	鉢			(2.5) 4.6		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
325	52-3	山形陶	鉢	52.4		8.2 15.4		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
326	52-3	土師器	罎	18.0		(4.7)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
327	52-3	土師器	罎			(5.9), 厚0.23, 重225g		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
328	52-2	土師器	高杯			(6.6)	御膳8.8	20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
329	52-2	土師器	高杯					3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
330	52-2	土師器	高杯			(1.8)		40	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
331	52-2	土師器	高杯			(9.8) 9.9		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
332	52-2	土師器	高杯			(8.1)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
333	52-2	土師器	高杯			(3.0)		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
334	52-2	土師器	高杯			(2.3) 7.0		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
335	52-2	土師器	高杯			(1.4) 6.6		25	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
336	52-2	土師器	高杯			(1.7) 6.9		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
337	52-2	土師器	高杯			2.1 5.0		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
338	52-2	土師器	高杯			(3.9) 7.2		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
339	52-2	土師器	高杯			(4.1) 7.1		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
340	52-2	土師器	高杯			(3.4) 6.9		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
341	52-2	土師器	高杯			(2.1) 7.8		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
342	52-2	土師器	高杯			(3.3) 7.3		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
343	52-2	土師器	高杯			(3.8) 7.1		25	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
344	52-2	土師器	高杯			(2.7) 7.7		25	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
345	52-2	土師器	高杯			(16.2)		25	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
346	52-2	土師器	高杯			14.6 5.0 8.1		65	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
347	52-2	土師器	高杯			(15.6)		40	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
348	52-2	土師器	高杯			(8.8)		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
349	52-2	土師器	高杯			(3.9)		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
350	52-2	土師器	高杯			(3.1) 5.7		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
351	52-2	土師器	高杯			(2.5)		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
352	52-2	土師器	高杯			(1.7) 11.0		100	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
353	52-2	土師器	高杯			(2.4)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
354	52-2	土師器	高杯			(1.5)		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
355	52-2	土師器	高杯			(2.5)		40	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
356	52-2	土師器	高杯			11.9 2.3 7.0		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
357	52-2	土師器	高杯			(1.9) 7.2		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
358	52-2	土師器	高杯			12.4 (7.1) 4.6		25	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
359	52-2	土師器	高杯			11.3 5.3		40	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
360	52-2	土師器	高杯			(4.1)		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
361	52-2	土師器	高杯			(3.1) 4.2		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
362	52-2	土師器	高杯			(6.1)		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
363	52-2	土師器	高杯			(4.2) 5.6		25	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
364	52-2	土師器	高杯			9.4 5.9 4.5		80	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
365	52-2	土師器	高杯			(33.6)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
366	52-2	土師器	高杯			28.8 (2.3)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
367	52-2	土師器	高杯			20.8 (5.1)		3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
368	52-2	土師器	高杯			28.6 (7.5)		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
369	52-2	土師器	高杯			(3.5)		3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
370	52-2	土師器	高杯			(2.8)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
371	52-2	土師器	高杯			(6.0)		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
372	52-2	土師器	高杯			(6.8)		3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
373	52-2	土師器	高杯			(8.8)		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
374	52-2	土師器	高杯			(5.6)		3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
375	52-2	土師器	高杯			(18.2)		3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
376	52-2	土師器	高杯			(8.0)		5	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
377	52-2	土師器	高杯			(4.7)		3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
378	52-2	土師器	高杯			28.9 (4.8) 16.9		15	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
379	52-2	土師器	高杯			16.1 (4.0)		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
380	52-2	土師器	高杯			4.5 (3.0)		3	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
381	52-2	土師器	高杯			(6.0) 4.4		20	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
382	52-2	土師器	高杯			(1.5)		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
383	52-2	土師器	高杯			(1.8)		40	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
384	52-2	土師器	高杯			(3.0)		60	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
385	52-2	土師器	高杯			(1.6)		75	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
386	52-2	土師器	高杯			(2.1)		90	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
387	52-2	土師器	高杯			(1.6)		90	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
388	52-2	土師器	高杯			(1.8) 6.7		10	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
389	52-2	土師器	高杯			(2.3) 2.1		100	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット
390	52-2	土師器	高杯			(2.6) 2.0 7.0		60	悪	良好	灰白色	同前	ナデ		江戸時代中期後半	二瓶セット

No.	遺物名	分類	品種	口径	器高	器径	その他	重量	胎土	構成	色澤	装	意	考	出所・時期	備考
391	S0-2 土師器	鉢					(1.8)		3	良好	淡褐色	内外面ナメ				伊勢型鉢
392	S0-2 土師器	鉢	22.8			(8.7)		10	良好	灰褐色	口縁部黒コナデ、体面内面ナメ、外面ナメヘラヌリ					手塚型鉢
393	S0-2 土師器	鉢	28.0			(4.4)		3	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ、ユビエナシ					手塚型鉢
394	S0-2 土師器	鉢	23.0			(7.8)		5	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、体面内面ナメ、外面ナメ				中世後期	この字状口縁鉢
395	S0-2 土師器	鉢	26.7			(2.9)		3	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ				中世後期	この字状口縁鉢
396	S0-2 土師器	鉢	29.7			(4.0)		2	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ				中世後期	内面口縁鉢
397	S0-2 土師器	鉢				(4.2)		3	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、体面内面ナメ、外面ナメ				中世後期	この字状口縁鉢
398	S0-2 土師器	鉢				(4.5)	15.2	10	良好	灰色	内面平流口縁部、使用面、体面内面ナメ					黒川型鉢
399	S0-2 土師器	不用品								良好	暗褐色	内外面ナメ				内面口縁部と蓋付
400	S0-2 土師器	短石					身長7.0、幅3.3、厚0.8、重量34.0g									
401	S0-2 土師器	短石					身長16.0、幅4.0、厚0.8、重量34.1g									
402	S0-3 陶器	土師器	13.8			(2.5)		40	良好	黄白色	同転ナデ					灰釉
403	S0-3 陶器	土師器	9.4			5.9 4.5		80	良好	淡黄白色	同転ナデ					黒川型土師器
404	S0-4 陶器	片門鉢				(6.1)		10	良好	暗茶褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
405	S0-5 瓦	軒瓦式				9.3		10	良好	暗灰色	板ナデナメ、瓦ノミナメ					巴瓦
406	S0-5 瓦	軒瓦	10.0			5.1 3.8		50	良好	淡褐色	同転ナデ					内面口縁部と蓋付
407	S0-5 瓦	軒瓦	10.4			5.0 4.2		45	良好	白色	同転ナデ					灰釉
408	S0-5 瓦	軒瓦				(2.5)	7.4	30	良好	白色	同転ナデ					灰釉
409	S0-6 土師器	鉢				(2.5)	7.6	30	良好	暗灰色	同転ナデ、瓦ノミナメ、瓦ノミナメ					黒川型土師器
410	S0-6 土師器	鉢				(3.0)	7.8	30	良好	暗灰色	同転ナデ、内面黒コナデ、体面内面ナメ					黒川型土師器
411	S0-6 土師器	鉢				(3.0)	7.8	30	良好	暗灰色	同転ナデ、内面黒コナデ、体面内面ナメ					黒川型土師器
412	S0-6 土師器	鉢	12.0			5.1 8.0		5	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
413	S0-6 土師器	鉢				(2.7)		5	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
414	S0-6 土師器	鉢				(3.0)		5	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
415	S0-7 土師器	鉢				(2.0)		1	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
416	S0-7 土師器	鉢				(2.0)		3	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
417	S0-7 土師器	鉢				(2.0)		5	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
418	S0-7 土師器	鉢				(4.7)		5	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
419	S0-7 土師器	鉢	15.0			(4.3)		10	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
420	S0-7 土師器	鉢				(5.0)		1	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
421	S0-7 土師器	鉢	18.2			(10.4)		15	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
422	S0-7 土師器	鉢				9.7 6.1 3.0 2.5		10	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
423	S0-7 土師器	鉢	9.4			3.5 4.4		80	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
424	S0-8 陶器	鉢				(7.0)		10	良好	暗茶褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
425	S0-8 陶器	鉢				(5.4)	3.9 最大径8.0	15	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
426	S0-8 陶器	鉢				(3.5)	3.5 最大径7.8	20	良好	白色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
427	S0-8 陶器	鉢	12.5			2.8 6.7		15	良好	白色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
428	S0-8 陶器	鉢	9.0			3.0 4.2		50	良好	白色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
429	S0-9 陶器	鉢	30.0			(5.1)		15	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
430	S0-9 陶器	鉢	33.8			(2.4)		15	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
431	S0-9 陶器	鉢	13.0			3.5 6.2		20	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
432	S0-9 陶器	鉢	15.1			(5.3)		15	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
433	S0-9 陶器	鉢	37.8			(6.9)		10	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
434	S0-9 陶器	鉢	11.2			(5.4)		10	良好	白色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
435	S0-9 陶器	鉢	12.0			(3.7)		30	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
436	S0-9 陶器	鉢				(4.7)	4.8	25	良好	白色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
437	S0-9 陶器	鉢				(3.5)	5.5	20	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
438	S0-9 陶器	鉢				3.5 3.8		40	良好	白色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
439	S0-9 陶器	鉢	8.0			5.1 3.5		15	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
440	S0-9 陶器	鉢				(4.4)	4.0	20	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
441	S0-9 陶器	鉢				(2.0)	4.0	15	良好	淡褐色	同転ナデ、内面ナメ、外面ナメ					黒川型土師器
442	SX-1 土師器	小付				(13.5)		30	良好	淡褐色	内外面ナメ					内外面ナメ
443	SX-2 土師器	小付	18.6			29.8	最大径7.8	10	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
444	SX-2 土師器	小付	21.4			(4.3)		5	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
445	SX-3 土師器	小付				(6.8)		8	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
446	SX-3 土師器	小付				(4.2)	最大径5.4	10	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
447	SX-4 土師器	小付				(5.5)	2.8	30	良好	淡褐色	内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
448	SX-2 土師器	小付	9.2			(7.8)		60	良好	淡褐色	内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
449	SX-3 土師器	小付				(6.9)	最大径6.4	10	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
450	SX-5 土師器	小付				(5.9)	最大径13.6	10	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
451	SX-6 土師器	小付				(7.7)	最大径10.8	20	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
452	SX-7 土師器	小付				(3.4)	最大径10.1	30	良好	淡褐色	内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
453	SX-8 土師器	小付				(10.2)	最大径10.4	30	良好	淡褐色	内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
454	SX-9 土師器	小付	13.2			(4.3)		80	良好	淡褐色	内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
455	SX-10 土師器	小付				(8.5)	最大径11.0	30	良好	淡褐色	内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
456	SX-11 土師器	小付	8.9			8.9 4.1		10	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
457	SX-12 土師器	小付				(2.6)	6.3	30	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
458	SX-12 土師器	小付				(2.2)	6.1	10	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
459	SX-13 土師器	小付	16.0			(19.4)	最大径26.0	30	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
460	SX-14 土師器	小付				(19.2)	最大径22.2	20	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
461	SX-14 土師器	小付				(7.7)	最大径19.6	20	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
462	SX-15 土師器	小付	14.6			10.3 5.6		30	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
463	SX-16 土師器	小付				(3.6)	最大径4.7	30	良好	淡褐色	口縁部黒コナデ、内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ
464	SX-22 土師器	小付				(4.4)	5.8	15	良好	淡褐色	内面ナメ、外面ナメ					内外面ナメ

No.	発掘名	分類	器種	口径	底径	底厚	その他	器高	口上	焼色	裏	底	等	産地・時期	備考
465	SK-22	遺物	土器	16.6		(3.4)		5	底	良好	淡灰色	同色ナデ			
466	SK-22	遺物	土器			(1.0)		5	底	良好	淡灰色	同色ナデ、底部同色ヘラナデ			
467	SK-17	陶文土器	深鉢			(4.1)		3	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ			条状土器
468	SK-17	陶文土器	深鉢			(3.4)		3	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
469	SK-17	陶文土器	深鉢			(4.7)		15	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
470	SK-17	陶文土器	深鉢			(2.9)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			
471	SK-17	土製	土製			底径22.2、口径24.4、高さ20.4g		90	底	良好	淡灰色	ナデ			
472	SK-18	土製	土製	28.2		(5.9)		15	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
473	SK-18	土製	土製			(5.1)		5	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
474	SK-18	土製	土製			(3.7)		3	底	良好	淡灰色	内面ナデ			条状土器
475	SK-18	土製	土製			底径28.8、口径30.4、高さ24.4g		90	底	良好	淡灰色	ナデ、口上ナデ			
476	SK-18	土製	土製			底径28.8、口径30.4、高さ24.4g		90	底	良好	淡灰色	ナデ、口上ナデ			
477	SK-20	陶文土器	深鉢			(3.5)		5	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
478	SK-20	陶文土器	深鉢			(4.0)		5	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
479	SK-20	陶文土器	深鉢			(5.5)		3	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
480	SK-20	陶文土器	深鉢			(3.6)		3	底	良好	淡灰色	内面ナデ			条状土器
481	SK-20	陶文土器	深鉢			(3.5)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
482	SK-19	陶文土器	深鉢	14.2		(2.7)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
483	SK-19	陶文土器	深鉢	14.2		(2.8)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
484	SK-19	陶文土器	深鉢			(1.4)	12.2	19	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
485	SK-19	陶文土器	深鉢			(5.8)		3	底	良好	淡灰色	ナデ、口上ナデ			
486	SK-21	陶文土器	深鉢	21.6		(4.4)		5	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
487	SK-21	陶文土器	深鉢			(1.2)	13.0	5	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
488	SK-21	陶文土器	深鉢			(3.8)		5	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
489	SK-25	陶文土器	深鉢			(1.3)	12.0	3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
490	SK-25	陶文土器	深鉢			(3.4)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
491	SK-25	土製	土製			底径24.3、口径26.8、高さ25.7g		90	底	良好	淡灰色	ナデ、口上ナデ			
492	SK-25	土製	土製			底径24.3、口径26.8、高さ25.7g		90	底	良好	淡灰色	ナデ、口上ナデ			
493	SK-25	土製	土製			底径24.3、口径26.8、高さ25.7g		90	底	良好	淡灰色	ナデ、口上ナデ			
494	SK-26	土製	土製	37.4		6.5		50	底	良好	淡灰色	内面ナデ			条状土器
495	SK-27	土製	土製	36.9		(4.2)		20	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
496	SK-28	土製	土製			(2.3)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
497	SK-28	土製	土製			(1.4)	12.0	20	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
498	SK-28	土製	土製			(1.7)		10	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
499	SK-21	土製	土製	18.0		(1.5)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
500	SK-21	土製	土製			(3.5)		35	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
501	SK-22	土製	土製	14.0		4.6	7.0	10	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
502	SK-24	土製	土製	14.0		(3.6)		10	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
503	SK-23	土製	土製	10.6		(2.2)		3	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
504	SK-25	土製	土製	12.0		3.2	6.8	40	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
505	SK-26	土製	土製	11.7		2.5	6.5	100	底	良好	淡灰色	ナデ、口上ナデ			
506	SK-27	土製	土製	8.0		1.6	5.0	40	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
507	SK-27	土製	土製	11.2		2.1	6.6	5	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
508	SK-27	土製	土製			(1.7)	6.8	30	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
509	SK-28	土製	土製	15.8		4.5	7.2	40	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
510	SK-29	土製	土製	16.0		3.6	7.6	40	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
511	SK-40	土製	土製	6.8		2.0	5.7	70	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
512	SK-41	土製	土製	8.2		2.6	3.8	80	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
513	SK-42	土製	土製	6.6		1.4	5.4	30	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
514	SK-42	土製	土製	9.6		1.5	4.0	80	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
515	SK-42	土製	土製	15.9		5.2	7.7	70	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
516	SK-42	土製	土製	15.8		6.2	6.8	90	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
517	SK-42	土製	土製	16.0		5.0	7.5	40	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
518	SK-43	土製	土製	8.8		2.7	4.0	30	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
519	SK-44	土製	土製	36.0		(3.5)		10	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
520	SK-45	土製	土製			(4.3)		5	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
521	SK-46	土製	土製	16.0		5.4	8.5	50	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
522	SK-46	土製	土製	16.4		5.2	8.3	80	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
523	SK-46	土製	土製	16.4		4.5	7.6	40	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
524	SK-48	土製	土製	5.9		1.1		3	底	良好	淡灰色	内面ナデ、外面ナデ、縁部同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
525	SK-48	土製	土製	12.6		2.7	8.7	5	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
526	SK-49	土製	土製	6.6		1.9	5.7	90	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
527	SK-50	土製	土製	8.2		1.9	5.0	50	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
528	SK-51	土製	土製	7.8		1.6	4.0	90	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
529	SK-52	土製	土製	16.0		12.0		5	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
530	SK-54	土製	土製	11.8		1.9	7.9	30	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
531	SK-55	土製	土製	(36.1)		3.6	10.0	10	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
532	SK-56	土製	土製			(9.9)		15	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
533	SK-57	土製	土製	23.4		10.0		15	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
534	SK-58	土製	土製	13.6		(12.4)		3	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器
535	SK-59	土製	土製			7.6		10	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
536	SK-60	土製	土製	27.7		(5.3)		10	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
537	SK-61	土製	土製	12.7		1.7		20	底	良好	淡灰色	同色ナデ、縁部同色ナデ			条状土器
538	SK-62	土製	土製	12.0		(5.3)		10	底	良好	淡灰色	同色ナデ			条状土器

No.	遺物名	分類	場所	口徑	高さ	径	その他	年代	形状	色澤	製	型	等	所在地・時期	備考
338	SR-62	陶器	漆鉢	26.0	(2.4)			3	底	良好	暗茶褐色	同様ナデ		古瀬戸(古瀬戸)	鉄砲
340	SR-62	陶器	漆鉢	26.0	(2.7)			3	底	良好	淡黄褐色	同様ナデ		古瀬戸(古瀬戸)	鉄砲
341	SR-63	土師器	甕	14.0	2.4	10.0		10	底	良好	淡黄褐色	1) 漆器ナデナデ, 内面ナデ, 外面ナデ, ユニオス		中世前期	
342	SR-63	土師器	甕				長径12.0, 幅4.5, 厚径1.2, 重径1.1(15g)								
343	SR-64	陶器	大付茶碗	12.0	(5.5)			10	底	良好	暗茶褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
344	SR-65	陶器	片門鉢	30.4	(5.0)			15	底	良好	暗茶褐色	コナナデ		古瀬戸(古瀬戸)	鉄砲
345	SR-66	陶器	鉢		(9.4)	8.0	最大径12.0	15	底	良好	暗茶褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
346	SR-62	漆器	杯		(1.3)	6.5		30	底	良好	灰色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ			
347	SR-52	土師器	甕	10.2	(1.7)			30	底	良好	淡褐色	内面マツナデ, 外面ユニオス		下つく(古瀬戸)	
348	SR-52	土師器	上鉢				長径4.8, 最大径3.0g	70	底	良好	淡灰色	外面マツナデ, ユニオス			
349	SR-67	陶器	志野丸皿	12.0	1.5	7.2		5	底	良好	淡灰色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ		美濃(古瀬戸)	
350	SR-68	陶器	鉢	(12.0)	(4.4)			5	底	良好	白色	同様ナデ		瀬戸(古瀬戸)	
351	SR-68	陶器	鉢		(1.9)	7.8		20	底	良好	暗茶褐色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ		古瀬戸(古瀬戸)	
352	SR-68	陶器	志野丸皿	10.9	3.0	6.2		10	底	良好	淡白色	同様ナデ		古瀬戸(古瀬戸)	
353	SR-68	陶器	下鉢	36.0	(20.5)			15	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
354	SR-69	土師器	甕	11.0	2.3	6.2		35	底	良好	暗褐色	内面同様ナデ, 外面マツナデ, ユニオス		下つく(古瀬戸)	
355	SR-70	土師器	甕	12.3	2.6	6.4		100	底	良好	淡褐色	内面ナデ, 1) 漆器(漆器)内面, 外面ナデ, ユニオス		下つく(古瀬戸)	
356	SR-71	陶器	天目茶碗		(5.3)	4.0		30	底	良好	茶褐色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
357	SR-72	陶器	丸皿	13.4	2.3	8.2		15	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
358	SR-73	陶器	鉢		(5.0)	13.0		20	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
359	SR-74	土師器	土人形(馬)		7.8			35	底	良好	淡褐色	内面漆器, 外面へり漆器・印刷		瀬戸(古瀬戸)	
360	SR-75	土師器	漆鉢	27.2	2.4			25	底	良好	淡褐色			瀬戸(古瀬戸)	
361	SR-76	土師器	漆鉢		2.4		長径20.5	30	底	良好	淡褐色			瀬戸(古瀬戸)	
362	SR-77	土師器	漆鉢	29.0	2.5	26.4		30	底	良好	淡褐色			瀬戸(古瀬戸)	
363	SR-78	陶器	天目茶碗	11.0	(3.0)			10	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
364	SR-79	陶器	鉢	9.6	2.8	5.8		60	底	良好	淡白色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
365	SR-80	陶器	小杯	8.6	4.2	4.1		65	底	良好	淡白色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
366	SR-82	陶器	丸皿	12.1	2.0	7.2		40	底	良好	淡白色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
367	SR-83	陶器	天目茶碗	10.8	(5.5)			10	底	良好	暗茶褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
368	SR-84	陶器	鉢	12.9	2.4	8.0		10	底	良好	淡白色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
369	SR-84	土師器	鉢	10.0	(7.4)			10	底	良好	淡白色	内面同様ナデ		下つく(古瀬戸)	
370	SR-85	土師器	甕		(3.5)			5	底	良好	暗褐色	内面ナデ・漆器			
371	SR-85	漆器	杯	(1.8)	11.0			5	底	良好	淡灰色	同様ナデ			
372	SR-85	漆器	杯	10.0	(2.2)			3	底	良好	灰色	同様ナデ		瀬戸(古瀬戸)	
373	SR-85	漆器	杯	8.6	3.3	3.0	外径10.3	30	底	良好	灰色	内面同様ナデ, 底面同様ナデナデ		瀬戸(古瀬戸)	
374	SR-85	漆器	杯	13.0	(2.1)			5	底	良好	淡灰色	同様ナデ		瀬戸(古瀬戸)	
375	SR-85	漆器	杯	12.0	(2.3)			3	底	良好	淡灰色	同様ナデ		瀬戸(古瀬戸)	
376	SR-85	土師器	甕	21.0	(8.2)	最大径22.0		30	底	良好	淡褐色	口縁部コナナデ, 内面同様ナデ, 外面ナデ, ユニオス		下つく(古瀬戸)	
377	SR-85	土師器	甕				長径13.0, 幅4.0, 厚径1.2, 重径30.4g	50	底	良好	淡褐色				
378	SR-86	土師器	上鉢				長径5.3, 最大径2.7, 重径34.0g	80	底	良好	暗茶褐色	外面ナデ, ユニオス			
379	SR-86	土師器	上鉢				長径4.0, 最大径1.8, 重径16.4g	100	底	良好	黄褐色	外面ナデ, ユニオス			
380	SR-88	土師器	上鉢				長径4.5, 最大径1.6, 重径1.8g	100	底	良好	淡灰色	外面ナデ			
381	SR-88	土師器	上鉢				長径4.7, 最大径1.6, 重径13.2g	90	底	良好	淡灰色	外面ナデ			
382	SR-89	土師器	上鉢				長径4.7, 最大径1.6, 重径14.4g	100	底	良好	黄褐色	外面ナデ, ユニオス			
383	SR-89	土師器	上鉢				長径4.4, 最大径2.0, 重径16.0g	100	底	良好	暗茶褐色	外面ナデ, ユニオス			
384	SR-89	土師器	上鉢				長径4.8, 最大径1.7, 重径16.2g	100	底	良好	黄褐色	外面ナデ, ユニオス			
385	SR-90	土師器	鉢				長径3.5, 厚径0.9, 重径28.0g	98	底	良好	茶褐色	内面同様ナデ			
386	SR-95	陶器	天目茶碗	11.8	(5.0)			10	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
387	SR-95	陶器	天目茶碗	11.5	(5.8)	最大径12.0		10	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
388	SR-95	陶器	漆鉢	10.0	5.9	5.0		40	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
389	SR-95	陶器	漆鉢	10.4	5.5	4.2		30	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
390	SR-95	陶器	丸皿	12.7	2.3	7.5		75	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ, 内面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
391	SR-95	陶器	丸皿	12.5	2.7	7.5		30	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 内面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
392	SR-95	陶器	丸皿	11.6	2.0	6.8		30	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
393	SR-95	陶器	内付		(6.4)			30	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
394	SR-95	陶器	漆鉢	(2.7)				3	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
395	SR-95	陶器	漆鉢	(4.2)				5	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
396	SR-95	陶器	鉢	(2.5)	5.0			10	底	良好	淡褐色	底面同様ナデナデ, 内面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
397	SR-95	陶器	鉢	(1.4)	4.3	最大径9.2		20	底	良好	白色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
398	SR-95	土師器	鉢	26.4	(5.5)	最大径29.0		10	底	良好	暗茶褐色	口縁部コナナデ, 外面同様ナデ, 外面ナデ, ユニオス・漆器		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
399	SR-95	土師器	鉢	28.4	(10.9)	最大径30.6		15	底	良好	淡茶褐色	1) 漆器ナデナデ, 外面同様ナデナデ, 外面ナデ, ユニオス		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
400	SR-95	土師器	鉢	12.0	(4.7)	最大径12.4		10	底	良好	淡褐色	内面同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
401	SR-95	陶器	天目茶碗	11.3	(5.8)			35	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
402	SR-95	陶器	天目茶碗	12.0	(6.0)			15	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
403	SR-95	陶器	丸皿	11.6	(6.9)			15	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
404	SR-95	陶器	丸皿	11.2	(6.3)			15	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
405	SR-95	陶器	丸皿	12.0	(6.6)			25	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
406	SR-95	陶器	片口	15.2	(6.5)			30	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
407	SR-95	陶器	茶碗	13.4	3.5	7.1		35	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ, 内面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
408	SR-95	陶器	茶碗	13.3	3.1	7.8		35	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
409	SR-95	陶器	茶碗	12.1	6.4	最大径10.3		25	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 底面同様ナデナデ, 内面同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
410	SR-95	陶器	茶碗	11.3	2.4	6.5		40	底	良好	淡褐色	同様ナデ, 外面下腹部同様ナデナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
411	SR-95	陶器	漆鉢		14.2			3	底	良好	淡褐色	同様ナデ		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲
412	SR-95	陶器	茶碗	14.3	15.7	最大径15.2		15	底	良好	淡褐色	内面ナデ, 外面同様ナデナデ, 外面ナデ, ユニオス		瀬戸(美濃・大瀬)	鉄砲

No.	遺構名	分類	形状	1/100	長さ	幅	高さ	その他	発掘時期	出土状況	出土品	調査者	年代・時期	備考
633	3K-01	陶器	片断	27.3	8.4	11.7			10	良好	灰褐色	陶板ナデ、外周下リ部一部破損ヘラナズリ	瀬戸内海 豊後	縄文前期中頃
634	3K-01	土器	壺	26.5		(2.3)			5	良好	淡褐色	陶板ナデ		灰褐色
635	3K-01	土器	小皿			(2.4)	3.0		25	良好	灰色	陶板ナデ		灰褐色
636	3K-01	土器	鉢	11.9		(1.7)			25	良好	淡褐色	内周ナデ、外周ナデ、ユビオキス		灰褐色
637	3K-01	土器	鉢	24.0		(5.2)		最大径26.0	5	良好	淡褐色	内周ナデ、外周ナデ、ユビオキス		灰褐色
638	3K-01	土器	鉢	22.7		(6.7)		最大径25.5	10	良好	淡褐色	内周ナデ、外周ナデ、ユビオキス、下部ヘラナズリ		灰褐色
639	3K-01	土器	鉢	12.6		(15.3)		最大径22.0	6	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ		灰褐色
620	3K-01	土器	鉢	13.6		(7.7)			6	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
621	3K-01	土器	壺		最大径10.8、厚1.9、高さ2.5、重さ125g									
622	遺構名不明	土器	高杯	24.2		(15.6)			40	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
623	遺構名不明	土器	高杯	27.5		(13.6)			10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
624	遺構名不明	土器	高杯			(3.3)			5	良好	淡褐色	内周ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
625	遺構名不明	土器	高杯	22.2		(3.4)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
626	遺構名不明	土器	高杯	18.4		(5.5)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
627	遺構名不明	土器	高杯			(7.6)			10	良好	淡褐色	内周ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
628	遺構名不明	土器	高杯			(6.2)			15	良好	淡褐色	内周ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
629	遺構名不明	土器	高杯			(6.6)	(3.6)		10	良好	淡褐色	内周ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
630	遺構名不明	土器	高杯			(9.2)		最大径4.0	30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
631	遺構名不明	土器	高杯			(9.6)		最大径11.2	20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
632	遺構名不明	土器	高杯			(8.1)		最大径7.8	40	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
633	遺構名不明	土器	高杯			(8.3)		最大径6.8	20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
634	遺構名不明	土器	高杯	11.5		(3.1)		最大径6.1	80	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
635	遺構名不明	土器	高杯	13.4		(7.8)			20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
636	遺構名不明	土器	高杯	9.8		(5.6)			30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
637	遺構名不明	土器	高杯	18.6		(5.6)			10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
638	遺構名不明	土器	高杯			(6.1)			20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
639	遺構名不明	土器	高杯	16.8		(3.6)		最大径11.6	40	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
640	遺構名不明	土器	高杯	16.8		(5.4)			30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
641	遺構名不明	土器	高杯	11.6		(5.3)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
642	遺構名不明	土器	高杯	10.0		7.0	4.3		70	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
643	遺構名不明	土器	高杯	8.6.9					10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
644	遺構名不明	土器	高杯			(1.6)	6.6		10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
645	遺構名不明	土器	高杯			(4.6)	14.0		5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
646	遺構名不明	土器	高杯	19.1		(4.6)			10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
647	遺構名不明	土器	高杯			(3.1)	8.2		40	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
648	遺構名不明	土器	高杯			(2.7)	4.9		30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
649	遺構名不明	土器	高杯	19.2		(6.6)			10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
650	遺構名不明	土器	高杯	10.7		(2.7)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
651	遺構名不明	土器	高杯			(4.6)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
652	遺構名不明	土器	高杯			(4.3)			3	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
653	遺構名不明	土器	高杯	14.0		(9.6)		最大径16.2	30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
654	遺構名不明	土器	高杯			(5.4)		最大径9.0	30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
655	遺構名不明	土器	高杯			(10.5)			40	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
656	遺構名不明	土器	高杯	16.2		(10.6)			30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
657	遺構名不明	土器	高杯	7.0		3.3			40	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
658	遺構名不明	土器	高杯	10.3		(3.6)			15	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
659	遺構名不明	土器	高杯	9.8		2.6	4.4		20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
660	遺構名不明	土器	高杯			(2.4)	8.9		20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
661	遺構名不明	土器	高杯			(8.6)	9.6)		20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
662	遺構名不明	土器	高杯	8.6		2.7	4.8		70	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
663	遺構名不明	土器	高杯	8.9		3.9	4.1		80	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
664	遺構名不明	土器	高杯			(2.6)	4.3		20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
665	遺構名不明	土器	高杯			(3.4)	10.0		20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
666	遺構名不明	土器	高杯			(4.6)	6.2		30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
667	遺構名不明	土器	高杯	14.8		5.1	6.2		40	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
668	遺構名不明	土器	高杯	29.0		(7.6)			15	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
669	遺構名不明	土器	高杯	28.2		(5.5)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
670	遺構名不明	土器	高杯	14.8		(3.5)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
671	遺構名不明	土器	高杯	13.0		2.2	7.8		30	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
672	遺構名不明	土器	高杯			(10.6)			20	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
673	遺構名不明	土器	高杯	50.4		(11.2)			5	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
674	遺構名不明	土器	高杯			(2.6)	6.8		10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色
675	遺構名不明	土器	高杯			(5.3)			10	良好	淡褐色	口縁ナデ、外周ナデ、下部ヘラナズリ、ユビオキス		灰褐色

第5章 西側遺跡出土銅鐸片の歴史的評価と分析

1. 銅鐸の埋納と破壊

難波洋三（京都国立博物館）

本稿では、西側遺跡で出土した銅鐸破片の型式について説明した後、銅鐸の埋納と破壊に関するいくつかの問題を検討する。

西側遺跡出土の近畿式銅鐸破片

西側遺跡で出土した近畿式銅鐸の双頭渦文飾耳破片は、腐食が著しく、現状で確認できる最大径が約3.4cmで渦文の巻数は4だが（註1）、本来の径は4cm程度で渦文の巻数はおそらく5であったと考えられる。双頭渦文飾耳の頭部の渦文の巻数が5の例は突線鈕2～4式にあるが、3Ⅰa式と3Ⅰb式に多く2式や4式には少ない（註2）。また、頭部の径が4cmを越える例は突線鈕3Ⅰb式からみられるようになる。以上から、この破片は突線鈕3式、その中でも3Ⅰb式か3Ⅱ式のものである可能性が高い。西側遺跡で出土した弥生土器は山中式（寄道式）の中～新段階に限られているので、この破片の廃棄年代もこの時期内、すなわち畿内の後期後半頃と考えられる。

破片で出土した近畿式銅鐸

近畿式銅鐸の破片は、現在、31遺跡で出土している（表3）。これには、同一個体の破片が1個、稀に2、3個出土する場合と、多数まとまって出土する場合がある。前者を破片出土のA類型、後者をB類型としよう。A類型は28遺跡で、B類型は3遺跡で、みつまっている。

A類型のほとんどは、集落内やその付近で検出されている。これに対し、B類型のうち、和歌山県ごとき岩例は、経塚も営まれた山頂の巨石の間隙でみつかった。これはA類型とは発見地の立地が異なるので、完形埋納銅鐸が出土時にあるいはそれ以後に壊されてこの地に再埋納された可能性が高い。愛知県柵例もみつかった場所がA類型とは異なり、銅鐸埋納地と共通する集落から離れた谷奥で、工事中の発見である。これも、完形埋納品が壊された可能性がある。兵庫県久田谷例は、弥生時代に銅鐸が破壊されて破片となったものである可能性が3例あるB類型の中で最も高い。しかし、工事時の発見であり、また、確実な類例がないので、本稿ではこれも含めB類型をすべて除外して検討する。当然、A類型にも、完形で埋納されていた銅鐸が二次的に破壊されたものが含まれている可能性はある（註3）。たとえば、通常よりも破片が大きく、集落との関係が判明していない兵庫県穴尾例や、出土状態がわからず、同一個体の可能性のある破片2個からなる伝静岡県浜松市南海岸例は、検討を要する。

A類型の破片の総数は現在35個で、既発見の近畿式銅鐸の総数の3割弱を占める。ただし、破片の出土数には地域差があり、和歌山や四国では今のところ未発見であるのに対し、東海地方や畿内の中心地域では多く出土している。そのため、尾張・三河・遠江では破片で出土した近畿式銅鐸の数がこの地域で出土した近畿式銅鐸の総数のほぼ半分にもなり、摂津・河内・和泉・大和でもこれが約4割

と高い。

破片の部位別の個数は、双頭渦文飾耳が11個、身が10個、鰭が6個、重弧文飾耳と鈕が各3個、鰭か鈕脚壁が1個、不明が1個である。すでに指摘されているように、その部位が銅鐸全体に占めている割合からみれば、身や鈕の破片は少なく、双頭渦文飾耳の破片が多い。ただし、現状では、銅鐸のどの部位の破片が出土するかについてはかなり地域性があり、三重を除く東海地方では、12個中7個と半数以上が双頭渦文飾耳の破片であり、他の部位に比してその比率が極めて高い。これに対し、今のところ播磨・但馬以西の地域では、双頭渦文飾耳の破片は1個と少なく、身の破片が9個中5個と多い。

身の破片が出土する場合は、銅鐸全体を破壊したのであろう（註4）。このような例は10個と、A類型のほぼ3割を占めている。3個ある鈕の破片の出土例についても、鈕が大きく欠損した銅鐸を埋納した例はないので銅鐸全体が破片となった可能性が高く、これに加えると、少なくともA類型の約4割については、銅鐸全体を完全に破壊して破片としたと推定できる（註5）。

これに対し、飾耳や鰭の破片が出土する場合については、銅鐸全体を壊して破片としたのではなく、銅鐸の最終処理の一環として飾耳や鰭の一部だけを取り除いた後、銅鐸本体は破壊せずに通常通り集落外に埋納したことも考えうる。

ただし、近畿式銅鐸で埋納前に飾耳を取り除いたと考えられる例は滋賀県大岩山出土銅鐸にしかないで、現状では、飾耳を取り除いた後、本体を埋納することが普通であった可能性は低いと考える。また、少数の例外を除いて、飾耳や鰭の破片は身や鈕の破片と同じように集落内から出土し、折面に切断痕や加工痕がない。このように両者の扱いに差異がみられないことから、飾耳や鰭の破片が出土する例の多くについても、銅鐸全体を破壊して破片とした可能性が高い。また、このようにほとんどの破片には二次的な加工痕がないので、再利用されることなく、破片化後まもなく廃棄されたのであろう。

破片で出土した近畿式より古い型式の銅鐸

破片となって出土する銅鐸には、少数ではあるが近畿式よりも古い型式もある。そのうち奈良県唐古・鍵遺跡出土例は、鋳込み時に内型が熔銅の浮力で浮き上がって鋳造に失敗した銅鐸を破片化したもので、鋳造関係の遺物や遺構が集中する地区から出土した。再溶解するのに適した大きさに割ったのであろう。高知県西分増井遺跡では、扁平鈕式新段階が突線鈕1・2式と考えられる銅鐸の菱環の破片のほか、広形銅戈・中広形銅矛・銅鏡の破片が多数出土した。銅矛破片には二次的な加工痕があるので、加工痕がない銅鐸の破片もやはり再利用するための素材であった可能性がある。この銅鐸破片は、後期中葉の包含層から出土した。香川県森弘遺跡では同一個体と考えられる破片が7個、香川県旧連兵場遺跡では同一個体と考えられる破片が6個と、多数まとまって出土した。これらは、大型の破片あるいは完形品であったものが、後世、二次的に壊れた可能性がある。以上の例は、前記の近畿式銅鐸の破片出土例のA類型とは性格が異なる。

近畿式よりも古い型式の銅鐸の破片が、近畿式銅鐸の破片出土例のA類型と同じように、集落内から1個あるいは少数個出土した例は、島根県西川津例、鳥取県青谷上寺地例、大阪府亀井例、和歌山

表3 銅鐸破片の出土例

近畿式銅鐸破片の出土例

(A類型)

1) 島根県出雲市青木	3 I a 式の可能性が高い	双頭渦文飾耳
2) 鳥取県鳥取市青谷上寺地①	3 I b ~ 5 I 式 (B か C 系列)	身
3) “ ②	4 式か 5 式	身
4) “ ③	近畿式の新しい段階	身
5) 兵庫県豊岡市女代	2 式	緒
6) 岡山県玉野市沖海底	3 I b ~ 3 II 式の可能性が高い	身
7) 岡山県岡山市高塚	2 式か 3 式	身
8) 兵庫県栗東市穴尾	4 式か 5 式 (C 系列)	鈕と双頭渦文飾耳の一部
9) 兵庫県姫路市大井川第 6 地点	3 式の可能性がある	緒か鈕脚壁
10) 大阪府豊中市利倉	2 式か 3 I a 式の可能性が高い	重弧文飾耳
11) 大阪府豊中市利倉南	2 式か 3 I 式	鈕
12) 大阪府八尾市亀井①	4 式か 5 I 式	緒下端
13) 大阪府和泉市池上曾根①	2 式か 3 式	身
14) “ ②	4 式か 5 式	身
15) 奈良県桜井市神向	3 I b ~ 5 II 式	双頭渦文飾耳
16) 滋賀県守山市下長	2 式か 3 I a 式の可能性が高い	双頭渦文飾耳
17) 福井県丸岡町高柳・下安田①	3 II b ~ 5 II 式	鈕
18) “ ②	型式不明 近畿式	身
19) “ ③	型式不明 近畿式か	不明
20) 三重県伊賀市千歳	3 II a ~ 5 II 式	双頭渦文飾耳
21) 三重県伊賀市西場谷 C	4 式の可能性が高い	緒下端
22) 三重県鈴鹿市一反通	3 I a ~ 5 I 式	緒下端
23) 三重県伊勢市桶子	3 ~ 5 式	緒
24) 愛知県名古屋朝日①	3 I a ~ 3 II a 式の可能性が高い	双頭渦文飾耳
25) “ ②	3 II a ~ 5 II 式	双頭渦文飾耳
26) 愛知県名古屋見晴台	2 式の可能性が高い	双頭渦文飾耳
27) 愛知県豊橋市西側	3 I b ~ 3 II 式の可能性が高い	双頭渦文飾耳
28) 愛知県豊橋市瓜破	型式不明 近畿式か	身か
29) 静岡県浜松市松東	3 I a ~ 3 II a 式	双頭渦文飾耳
30) 静岡県浜松市梶子	3 I b ~ 3 II 式	重弧文飾耳
31) 静岡県浜松市南海岸①	3 I b ~ 3 II 式	双頭渦文飾耳
32) “ ②	3 式の可能性が高い	緒
33) 静岡県袋井市掛之上	2 式か 3 式古段階の可能性が高い	身
34) 静岡県沼津市藤井原	3 II a ~ 5 II 式	双頭渦文飾耳
35) 静岡県伊豆の国市段	4 式か 5 式	重弧文飾耳

(B類型)

1) 兵庫県豊岡市久田谷	5 II 式 (C 系列)	117個
2) 和歌山県新宮市ごとき岩	4 式か 5 I 式 (C 系列か)	現22個 (18個に接合)
3) 愛知県遊美町桃 1 号	5 I 式 (B 系列)	1・2 号の合計196個
“ 2 号	5 II 式 (B 系列)	

近畿式より古い型式の銅鐸破片の出土例

1) 高知県春野町西分増井	扁平鈕式新段階～突線鈕 2 式	鈕菱環
2) 香川県善通寺市旧練兵場	扁平鈕式新段階 (名東型 B 類か C 類)	鈕・身・飾耳 計 6 個
3) 香川県さぬき市森弘	外縁付鈕 1 式末～扁平鈕式新段階	身・緒 計 7 個
4) 鳥取県鳥取市青谷上寺地④	扁平鈕式新段階～突線鈕 1 式初頭 (東海派 A 1 類か)	身・緒 計 7 個
5) 島根県松江市西川津	外縁付鈕 2 式か扁平鈕式古段階 (横型流水文)	身・緒
6) 大阪府八尾市亀井②	扁平鈕式か	鈕
7) 奈良県田原町唐古・鍵	外縁付鈕 2 式～扁平鈕式新段階 (四区装束澤文)	身
8) 和歌山県上富田町田熊	型式不明	身
9) 三重県四日市市金塚	扁平鈕式新段階～突線鈕 2 式	鈕菱環

三連式銅鐸破片の出土例

1) 佐長野県松本市宮調	三連 1 式か 2 式	鈕菱環
--------------	-------------	-----

県田館例、三重県金塚例、以上である。このうち、鳥取県青谷上寺地例は、飾耳や文様の特徴などからみて扁平鈕式新段階あるいは突線鈕1式初頭の東海派銅鐸（東海派A類かB類）の破片の可能性が高く（註6）、外周に輪郭の細線がないことに着目すれば、扁平鈕式新段階の東海派銅鐸でも、古式のA1類となろう。この破片は後期初頭から前葉の溝の埋土から出土しており、この時期すでに近畿式より古い型式の銅鐸が破片化されて集落内に廃棄されることがあったことを確認できる。

銅鐸の埋納

銅鐸の破片化を分析するのに先立って、まず銅鐸の埋納時期などについて検討しておく。これを考える上で重要となるのは、以下の点である。

- ①外縁付鈕1式の愛知県八王子鐸の埋納坑は、中期末の高蔵式期の方形周溝墓群や土器廃棄層よりも下層で検出された。よって、この銅鐸は中期末以前に埋納されたことが確実である（註7）。
- ②近畿式の突線鈕5Ⅱ式の徳島県矢野鐸の埋納坑からは後期中葉から後葉の土器の小片が出土したので、この銅鐸は後期後葉かそれより少し後に埋納された可能性が高い（註8）。近畿式銅鐸の最後の型式は徳島県矢野鐸の直後に作られた突線鈕5Ⅱ式なので、近畿式銅鐸の祭祀の終焉に伴う埋納は、徳島県矢野鐸の埋納と同時期あるいはその後まもなくおこなわれたのであろう。
- ③少数の銅鐸がまとまって出土した例のほとんどは、型式幅が小さい銅鐸の組み合わせになっている。
- ④多数の銅鐸がまとまって出土した例は、かなり型式幅がある銅鐸の組み合わせになっている。
- ⑤島根県加茂岩倉例と兵庫県中山例を除き、互いに同范の銅鐸がいっしょに出土した例はない。
- ⑥扁平鈕式あるいはそれより古い型式の銅鐸には、大きさにいくつかの規格があるが、これがまとまって出土する場合、大きさが揃っていることが多い。

以上の諸点について、詳しく検討しよう。①と②の埋納銅鐸の発掘調査例によって、銅鐸はその祭祀が終る時期に一齐に埋められたのではないことが確定した。これと③を考え合わせれば、銅鐸は古い型式から順番に埋められていったとも考えうる。

しかし、ここで問題となるのは④である。たとえば10個以上の銅鐸がまとまって出土した3例の型式の組み合わせは以下のようにになっている（表4）。

島根県加茂岩倉例は、外縁付鈕1式19個、外縁付鈕2式9個、扁平鈕式古段階2個、扁平鈕式新段階9個からなり、兵庫県桜ヶ丘例は、外縁付鈕1式2個、外縁付鈕2式2個、扁平鈕式古段階1個、扁平鈕式新段階9個、大阪湾型銅戈b類7本からなる。両例ともに製作が最も新しいのは、正統派六区袈裟文銅鐸2式など扁平鈕式新段階末のものである。よって、扁平鈕式新段階末に、まだ外縁付鈕1式や2式が相当数使われていたことがわかる。

滋賀県大岩山では、1881年に14個、1962年に9個と1個の銅鐸が出土した。1881年出土銅鐸の多くはその後散逸し、出土が確認できるあるいは錆や付着する砂土の特徴から出土を推定できる個体は現在12個で、2個は所在不明である。前者の12個は、突線鈕1式大福型1個、突線鈕2式段階に作られた三連1式1個、近畿式の突線鈕2式2個、3Ⅰa式4個、3Ⅰb式3個、5Ⅱ式の中でも最も新しいものの1個である。所在不明の2個は、出土時の記録によって全高70cm以下であったことがわかる

ので、これらも突線鈕3式かそれより古い型式である。よって、最も新しい近畿式銅鐸が埋納される頃でも、突線鈕1～3式がまだ多数使われていたと考えられる。

以上の3例は、古い型式の銅鐸のかなりの数が長期間埋納されることなく、新しい型式の銅鐸といっしょに使われたことを示している。ただし、3例のうち、兵庫県桜ヶ丘例と島根県加茂岩倉例は外縁付鈕1式から扁平鈕式新段階末までの型式の組み合わせであるのに対し、滋賀県大岩山例は1881年出土例、1962年出土例、いずれも突線鈕1式以後の型式で構成されており、すでに指摘されているように、扁平鈕式以前の型式と近畿式銅鐸や三遠式銅鐸がいっしょに出土した例は、少数個まとまって出土した例を含めても、今のところまったくない。

さて、①の愛知県八王子鐸の事例から、古い型式の銅鐸にはほかに埋納が中期に遡る例があったと考えてよいであろう。しかし、型式の古い銅鐸と新しい銅鐸で埋め方や埋める場所の選定に明確な差はない。このことから、愛知県八王子鐸などが埋められた中期から徳島県矢野鐸などが埋められた後期後葉頃まで、なんらかの方法で埋納に関する情報が伝えられたと考えられる。おそらく、いくつかの銅鐸は製作後しばらくして埋められており、これが繰り返されることによって、埋め方や埋める場所の選定などについての決りが変化せずに伝えられていったと考えられる。

ただし、すべての銅鐸が製作後それほどたずに埋められたとすれば、島根県加茂岩倉例や滋賀県大岩山1881年出土例のように、多数の古い型式の銅鐸が新しい型式の銅鐸といっしょに出土した例があることを説明できない。しかし、一方で、前記のように扁平鈕式以前の型式と近畿式銅鐸や三遠式銅鐸がいっしょに出土した例はないのであるから、近畿式銅鐸が埋められるころには扁平鈕式以前の型式がみられなくなる程度に、古い型式の埋納が進行していたことになる。

銅鐸の変遷を「見る銅鐸」から「聞く銅鐸」への変化と総括し、銅鐸の祭り自体の大きな変動をそこに想定する田中琢の説(註9)は、その後、春成秀爾によって受け継がれ、銅鐸の性格や埋納の意味の変化と積極的に結びつけて叙述されることになった(註10)。福永伸哉はさらに銅鐸のこの変化を弥生時代中期末から後期初頭にかけての大きな社会変化と関係付けて説明し、「聞く銅鐸」が扁平鈕式の製作終了直後のこの時期、ごく短期の間に一斉に埋納されたと考えた(註11)。福永は、銅鐸自身の観察に基づくその根拠として、前記のように扁平鈕式以前の銅鐸と近畿式銅鐸や三遠式銅鐸がいっしょに出土した例がないことと、佐原真の指摘を踏まえて古い型式ほど内面突帯の磨滅が顕著なことをあげている。

後者の内面突帯の磨滅については、全体としてはこのような傾向がある。しかし、外縁付鈕1式でも小型品には同型式の大型品やより古い菱環鈕式以上に内面突帯の磨滅が目立つ例がある(註12)。また、扁平鈕式新段階の正統派六区装裱文銅鐸では、その中で難波が最古と考える伝香川県出土鐸は内面突帯が磨滅していないが、伝香川県出土鐸よりも明らかに製作が遅れる、福井県向山鐸(1a式)、徳島県曲り1号鐸(1a式)、鳥取県小田2号鐸(1b式)、福井県南伊夜山鐸(2式)、三重県伊坂鐸(2式)は、内面突帯がかなり磨滅している。このように内面突帯の磨滅の様相は複雑であり、古い型式ほど顕著であると単純にはいえない。そして、扁平鈕式新段階末に作られた福井県南伊夜山鐸や三重県伊坂鐸は、内面突帯が磨滅しており、製作後かなりの期間使われた可能性があるため、福永の扁平鈕式製作終了直後に「聞く銅鐸」が一斉に埋納されたとする説は検討の余地がある。

さて、④によって相当数の古い型式の銅鐸が新しい型式の銅鐸と同時に使用されていたと考えられることと、③の少数の銅鐸がまとまって出土した例のほとんどが、型式幅の小さい銅鐸の組み合わせになっていることは、整合しない。④からは、少数の銅鐸がいっしょに出土した例に、たとえば外縁付鈕1式と扁平鈕式新段階、あるいは近畿式銅鐸の突線鈕3Ⅰa式と5Ⅱ式というような型式幅の大きい銅鐸の組み合わせがもっとあってもよいはずだが、実際にはない。この点については、どのように説明できるのだろうか。

佐原分類に基いて、銅鐸が何個かまとまって出土した例を初めて総合的に分析した田中は、2個がまとまって出土した場合はほとんどが同一型式の組み合わせであり、残りも隣接型式の組み合わせなので、2個まとまって出土した銅鐸のすべてが集団統合の結果集まったものとは考えにくく、銅鐸は1祭祀集団に1個が原則だが、時には2個を使うこともあったと推定した(註13)。春成はこの指摘をさらに発展させて、銅鐸は2個1組で使用するものと考えた(註14)。春成の仮説が正しいとすれば、複数個まとまって出土した例の大半を占める2個出土例の2個の銅鐸のほとんどは、単独集団が同時に入手した銅鐸のはずであり、前記のようにこの2個の銅鐸のほとんどが同型式の組み合わせになっていることの説明はうまくつく。

しかし、近年進展した銅鐸の細分や銅鐸群の分析結果を踏まえて(註15)、現段階で複数個の銅鐸がまとまって出土した例の型式の組み合わせを再検討すると、2個をはじめとする少数個の銅鐸がまとまって出土した例で、佐原の分類段階では同型式の組み合わせとなっていた例でも、複数個同時に入手した可能性のある例は非常に少ないことがわかるのである。具体的に検討しよう。

三遠式銅鐸には複数個がまとまって出土した例、特に2個いっしょに出土した例が多い。佐原と春成が作成した銅鐸出土地名表では、三遠式銅鐸のうち軸突線が4条となった三重県野田鐸と愛知県伊奈2・3号鐸を突線鈕4式とし、他の三遠式銅鐸はすべて突線鈕3式としている(註16)。その結果、5組あった佐原と春成が確認しえた三遠式銅鐸どうしがまとまって出土した例は、突線鈕4式を含む愛知県伊奈例を除き4組が同型式、具体的には突線鈕3式2個がまとまって出土した例となっていた。よって、春成が分析した段階では、これら4組については、2個同時に入手した可能性があったのである。

しかし、難波の分類編年案によって、現段階で判明している、三遠式銅鐸がまとまって出土した6組の型式の組み合わせをみると、三遠1式と2式各1個が1組(静岡県船渡)、2式と3式各1個が2組(静岡県荒神山、静岡県敷地)、3式2個が1組(静岡県木船)、3式1個と4式2個が1組(愛知県伊奈)、3式1個と4式3個が1組(伝愛知県豊橋市付近)となる(表4)。すなわち、三遠式銅鐸がまとまって出土した例のほとんどは、製作に新旧が確認できる銅鐸の組み合わせで、2個まとまって出土した4組では、そのうち3組が明らかに新旧の組み合わせである。6組の中で2個同時に入手した可能性が残るのは、静岡県木船出土の2個と、愛知県伊奈出土の3個のうち2・3号鐸のみである。

このように、田中や春成が佐原の編年案に基づいて分析した段階では、突線鈕3式どうしの組み合わせとなっていた三遠式銅鐸の複数個一括埋納例のほとんどが、実は、別々に入手したものの組み合わせなのである。三遠式銅鐸では、複数個がまとまって出土した例の型式の組み合わせが、三遠3式

表4 複数一括埋納された銅鐸の型式組み合わせ
 型式の組み合わせと大きさの組み合わせがともに不明な例は略した

【突線鈕1式以前の複数銅鐸一括埋納例】									
	変		外		扁		突		
	1	2	1	2	古	新	1		
出雲神庭荒神谷	1	1	3						小のみ 1号鐸は除く
越前 井向		1	1						大のみ
摂津 中山			2						大のみ 2個は互いに同范
山城 梅ヶ畑			2	2					小2個・中2個 外1式は小型、外2式は中型
但馬 氣比				4					大のみ 横型流水文3個と縦型流水文1個
大和 秋篠			1		2				小のみ 近接地点で同大の外1式が1個出土
出雲 志谷奥				1	1				中1個・小1個
*石見 上府					2				中のみ 2号は型式不明確
*和泉 流木					2				小1個・中1個 2号は型式不明確
備前 百枝月					2				中のみ 石井谷型2個だが互いに同范ではない
*尾張 二ノ宮									中のみ 型式不明
出雲 加茂岩倉			19	9	2	9			中19個・大20個
摂津 桜ヶ丘			2	2	1	9			小2個・中1個・大11個
丹波 野々間				1		1			小のみ
河内 四束畷					1	1			中1個・大1個
紀伊 石井谷					1	1			中1個・大1個
近江 山面					1	1			小1個・中1個
飛騨 上呂					1	1			中のみ
阿波 安都真					2	2			小3個・中1個
阿波 長者ヶ原						2			大のみ
阿波 曲り						2			大のみ
阿波 星河内						6			小のみ 6個以上出土
河内 大和田						3			小のみ
紀伊 龜山						3			小のみ
阿波 源田						2	1		大のみ
石見 中野假屋						1	1		大のみ

*は型式構成が不明確

【近畿式を含む複数銅鐸一括埋納例】										
	突 線 鈕 式									
	1	2	3Ⅰa	3Ⅰb	3Ⅱa	3Ⅱb	4	5Ⅰ	5Ⅱ	
伊勢 高茶屋		1		1						
推定土佐 董生野			1	1						
紀伊 前木				1		1				
三河 梶								1	1	
丹後 下安久					1					三遠4式1個を共伴
近江 大岩山Ⅰ	1	2	4	3					1	三遠1式1個を共伴
近江 大岩山Ⅱ	2	1	1	2						三遠1・2・4式各1個を共伴

【三遠式を含む複数銅鐸一括埋納例】									
	三遠式								
	1	2	3	3末	4				
遠江 船渡	1	1							
遠江 敷地		1	1			近接地で三遠3式が1個出土			
遠江 荒神山		1	1						
遠江 木船			2						
伝三河 豊橋				1	3				
三河 伊奈				1	2				
近江 大岩山Ⅰ	1					近畿式銅鐸など11個以上(突線鈕1～5Ⅱ式)を共伴			
近江 大岩山Ⅱ	1	1			1	近畿式銅鐸など6個(突線鈕1～3Ⅰb式)を共伴			
丹後 下安久					1	近畿式(突線鈕3Ⅱa式)1個を共伴			

2個の1例を除いて、1式と2式、2式と3式、3式と4式というように、現在の細分型式でみても隣接する二つの型式どうしになっていることも、重要な点である。

近畿式銅鐸の場合はどうだろうか。三遠式銅鐸に比べると近畿式銅鐸が2個まとまって出土した例は少ないが、三重県高茶屋例が突線鈕2式と3Ⅰb式、推定高知県生野付近出土例が突線鈕3Ⅰa式と3Ⅰb式、和歌山県荊木例が3Ⅰb式と3Ⅱb式、愛知県梶原例が5Ⅰ式と5Ⅱ式で、いずれもやはり2個の間に型式差があり、同時に入手したとは考えにくい(表4)。

扁平鈕式新段階の正統派六区袈裟文銅鐸が2個まとまって出土した例は、2組ある。そのうち徳島県曲り例は、1個がⅠa式、もう1個が2式の横帯分割型A類で、両者は製作時期に新旧の差があるだけでなく、おそらく製作工人集団も異なる。徳島県源田例は扁平鈕式新段階の正統派六区袈裟文銅鐸2個と突線鈕1式六区袈裟文銅鐸1個からなる。正統派六区袈裟文銅鐸の1個は通常のⅠb式、もう1個は2式併行の名東型B類であり、両者には製作時期に新旧があり、製作工人集団が異なる可能性が高い。よって、これらの場合も、2個同時に入手したとは考えにくい。

扁平鈕式新段階の亀山型は特異な銅鐸群で、複数個まとまって出土することがきわめて多い(註17)。つぎにこれを検討しよう。徳島県星河内出土銅鐸は出土後に壊されてすべて細片となっているため総個体数や型式の組み合わせが明確でないが、亀山型6個以上からなりA類とB類の両方を含んでいる。徳島県安都真例は出土した4個のうち2個が亀山型で、B2類とB3類である。大阪府大和田例はA1類2個とB3類1個からなる。和歌山県亀山例はA1類1個とB2類2個からなり、下辺横帯鋸歯文の有無などからみてB2類の2個には製作時期に若干新旧があるようだ。大阪府大和田例のA1類2個と和歌山県亀山例のB2類2個については同時に入手した可能性がないわけではなく、型式構成が明らかでない徳島県星河内例にも、そのような例が含まれている可能性がある。しかし、より重要な点は、複数個まとまって出土することが特に多い亀山型についても、まとめて1回で入手したのではなく、どの例も少数個ずつ複数回入手したものからなっていることである。

以上の分析からは、春成が推定した2個同時入手が普通であったとは考えられない。複数個まとまって出土した例のほとんどは、別々に、普通は1個ずつ入手したものからなっているのである。

さて、春成は、同范品が既発見の銅鐸を含む、複数個の銅鐸がまとまって出土した例でも、その中に互いに同范の銅鐸を含んでいないという田中の指摘(註18)と、2個セットでの使用という前記の自説を整合させるため、同時に入手するにあたって意識的に同范品を避けたと考えた(註19)。しかし、前記の検討を踏まえれば、⑤のように同范品が作られた段階の銅鐸がいくつかまとまって出土した例のほとんどに、互いに同范のものが含まれていない主要な原因は、意識的に同范品を避けたためではなく、入手時期が異なることにあって考えられる。

それではどのような場合に、入手時期が異なる銅鐸がこのようにまとまって出土することになるのだろうか。それには、以下の2つの場合がある。第1は、単独の集団が繰り返し入手したものをいっしょに埋めた場合、第2は、複数の集団が分有していたものを少数個ずつ集めて埋めた場合、である。しかし、第2の場合、埋納に関係した複数の集団が分有する銅鐸は総体としては型式幅の大きいものである可能性が高いので、三遠式や近畿式で特に顕著なように、少数の銅鐸がまとまって出土した例のほとんどが型式幅の小さい銅鐸の組み合わせになっていることを説明できない。一方、第1の場合

は、入手がそれほど年月を隔てずに繰り返しなされたと考えれば、説明がつく。よって、入手時期が異なる銅鐸がまとまって一箇所から出土する例の多くは、単独の集団が繰り返し入手したものを埋めた、と考えてよいであろう。

つぎに、⑤について検討する。扁平鈕式あるいはそれより古い型式の銅鐸には大きさにいくつかの規格がある。たとえば、外縁付鈕1式から扁平鈕式新段階には、概ね、全高約20cm、約30cm、40cm余りの3規格がある。この段階の銅鐸を含む複数個一括埋納例で、型式構成が判明している23例中17例、すなわち74%はまとまって出土する銅鐸の大きさが揃っている(表4)。いくつか例をあげよう。兵庫県気保例は外縁付鈕2式の横型流水文銅鐸3個と縦型流水文銅鐸1個からなり、いずれも全高40cm余りの大型の流水文銅鐸である(註20)。京都府梅ヶ畑例は外縁付鈕1式2個と外縁付鈕2式2個からなるが、前者が全高約20cm、後者が全高約30cmと、型式ごとに大きさがそろっている。奈良県秋篠例は、まとまって出土した3個のうちの1個が外縁付鈕1式、残る2個が扁平鈕式古段階で、約25m離れた近接別地点からも外縁付鈕1式1個が出土した。奈良県秋篠例はこのように製作年代にかなり新旧のある銅鐸からなるが、4個いずれも全高約20cmの四区袈裟文銅鐸である。島根県神庭荒神谷遺跡出土の6個は、菱環鈕1式から外縁付鈕2式あるいは扁平鈕式併行で、製作時期にかなり幅があるがいずれも全高約20cmで大きさが揃っている。39個と最多の銅鐸がまとまって出土した島根県加茂岩倉例でも、外縁付鈕1式が19個すべて全高約30cm、外縁付鈕2式以降の20個がすべて全高40cm余りと、大きさが揃っている(註21)。

このように大きさが揃っている原因としては、A：単独集団が大きさの揃った銅鐸を入手し埋めた、B：単独集団が入手したさまざまな大きさの銅鐸の中から大きさの揃ったものを選んで埋めた、C：多くの集団が分有するさまざまな大きさの銅鐸の中から大きさの揃ったものを選んで埋めた、以上が考えうる(註22)。しかし、すでに検討したように、少数の銅鐸がまとまって出土した例の多くは、単独集団がそれほど年月を隔てずに繰り返し入手した銅鐸からなると考えられるので、AかBとなる。

また、最多の銅鐸が出土した島根県加茂岩倉例については、BあるいはCとすると、つぎの2点が説明できない。前記のように、外縁付鈕1式から扁平鈕式新段階の各型式には、全高約20cm約30cm、40cm余りの各規格のものが、それぞれある。島根県加茂岩倉例の埋納は扁平鈕式新段階の末以降になされたのだから、この時に多くの集団が分有していた銅鐸、あるいは単独の集団が持っていたさまざまな大きさの銅鐸の中から、同じ大きさのものを選んだのであれば、全高約30cmのものに外縁付鈕2式から扁平鈕式新段階の銅鐸が混じったり、全高40cm余りのものに外縁付鈕1式が混じったりしてもよいはずである。ところが、前記のように、全高40cm余りの銅鐸はすべて外縁付鈕2式から扁平鈕式新段階で外縁付鈕1式がまったくなく、一方、全高約30cmの銅鐸はすべて外縁付鈕1式で外縁付鈕2式から扁平鈕式新段階がまったくない。また、島根県加茂岩倉例に限られた工人集団の作った銅鐸で構成されていることも(註23)、Cでは説明できない。以上から、島根県加茂岩倉例についてはA、すなわち単独集団が大きさの揃った銅鐸を入手して埋めたと考えられるのである(註24)。おそらく、少数個まとまって出土した銅鐸の大きさが揃っている例の多くも、単独集団が大きさの揃った銅鐸を入手して埋めたものであろう。

以上の検討を要約すれば、銅鐸が何個かまとまって出土した例のほとんどは、それぞれ単独の集団

が入手して埋めたものであり、それらの銅鐸は基本的に1個ずつ、年月をそれほど隔てずに繰り返し入手したもので、大きさにいくつかの規格がある型式では大きさが揃えることが多かったと考えられる(註25)。そして、最多の銅鐸が一括出土した島根県加茂岩倉例もやはり、単独集団が大きさの揃った銅鐸を入手し、これを埋納したと考えられるのである。ただし、滋賀県大岩山例については、後述するように複数の集団が使っていたものを集めた可能性が高い。

なお、大きさの揃った銅鐸を、年月をそれほど隔てずに繰り返し入手したとすれば、使用者がこのようにして集めたのか、配布がそのような形でなされたかが問題となる。近畿式・三遠式より古い型式については、まとまって出土した大きさが揃った銅鐸が、異なる工人集団の作ったものである場合がかなりある。たとえば、外縁付鈕2式の横型流水文銅鐸と縦型流水文銅鐸がいっしょに出土した、前記の兵庫県泉気比例がそのような1例である。このような例については、使用者が大きさを揃えて集めた可能性が高い。この段階においては、配布されたというよりは、使用者が主体的に銅鐸を入手したのであろう。

近畿式銅鐸の破片化

埋納について以上のように推定できるとすれば、近畿式銅鐸の破片化については、どのように考えることが可能であろうか。

破片化した近畿式銅鐸は集落内からそのほとんどが出土するので、共存遺物によって廃棄時期を推定できる場合がある。福井県高柳・下安田例3点のうち鈕の破片と突縁の残る身の破片は、ほぼ弥生時代終末から庄内式古段階に併行すると考えられる月影式期の住居跡床面から出土した。大阪府利倉南例は弥生時代終末期の遺構面直上から出土しており、これを覆う包含層からは庄内式から布留式段階の土器が出土した。三重県一反通例は、弥生時代後期の多量の土器とともに溝から出土した。この溝から出土した土器には、庄内式併行期まで下がるものはないらしい。愛知県朝日遺跡から出土した双頭渦文飾耳の破片のうち、頭部が大型の例は山中式段階の土層、小型の例は山中式から欠山式段階の土層から出土した。愛知県見晴台例は、本来は山中式段階の土層に含まれていた可能性が高いが、その上の層からの出土で廃棄時期は限定できない。静岡県松東例は本来は西遠江山中式新段階から西遠江欠山式段階の土層に含まれていたと考えられ、同じ浜松市の伊場遺跡梶子地点例と共存した土器は西遠江山中式新段階であるという(註26)。今回報告する愛知県西側例も、廃棄時期は山中式～新段階である。以上から、近畿式銅鐸の破片の多くは、庄内式直前から一部は庄内式にかけて、かなり短期間の間にそのほとんどが廃棄されたと考えて問題はない。一方、徳島県矢野鐸の埋納土坑内出土土器によって、近畿式銅鐸の祭祀の終焉は後期後葉かその少し後と考えられるから、近畿式銅鐸の破片化の多くはこれと同時期になされたことになる。ただし、前記のように近畿式より古い型式の銅鐸の破片化が後期初頭から前葉に確実になされているので、近畿式銅鐸の中にもその祭祀が終る前に破片化された例が若干あった可能性はある。

近畿式銅鐸の破片は広域から出土しているが、近畿式銅鐸を埋納した地域内ではその取り扱いに地域性がみられない。この地域内では、破壊後の破片の取り扱いについても強い規制が働いていたと推定できる。一方、近畿式銅鐸の埋納例が未発見の、周辺地域から出土した近畿式銅鐸の破片の中には、

これはまったく異なる取り扱いを受けた例が多い。たとえば、静岡県東部の藤井原遺跡では五領期の住居跡覆土上層から孔をあけた飾耳が出土しており、孔の上部には垂下によって顕著な磨滅が生じている。同じ静岡県東部の段遺跡でも、同様に穿孔した重弧文飾耳が古墳時代前期の上器とともに出土した。この地域では、近畿式銅鐸の飾耳破片がペンダントなどの垂飾に転用されてかなりの期間使われることが珍しくなかったようである。島根県出雲市の青木遺跡では、双頭渦文飾耳の破片が墓域内の人骨頭部付近から出土した。福井県高柳・下安田遺跡から出土した近畿式銅鐸の破片3個のうちの1個は、工具に加工された可能性があるという。これらの周辺地域では近畿式銅鐸破片についてそれぞれの地域で各々独自の取り扱いをしており、前記のような破片の処理についての規制が及んでいなかったことがわかる。この状況から判断して、これらの地域は祭器としての近畿式銅鐸を持たなかった可能性が高く、おそらく、近畿式銅鐸を祭器として使用した地域内で破片化したものの一部を入手したにすぎないのであろう。ただし、近畿式銅鐸の埋納例がまだみつからない地域の中には、但馬や因幡のように破片の取り扱いに独自性がみられない地域もある。これらの地域では、完形で埋納された近畿式銅鐸は今のところ未発見であるが、近畿式銅鐸を祭器として使っていた可能性がある(註27)。

突線鈕2・3式の近畿式銅鐸を近畿式古段階、突線鈕4・5式の近畿式銅鐸を近畿式新段階とすると、完形で出土した近畿式銅鐸の個体数は、古段階が52個(63%)、新段階が31個(37%)である。一方、これまで出土した近畿式銅鐸の破片は、鳥取県青谷上寺地遺跡出土の近畿式銅鐸破片3個のような同一個体と考えられる例を1個体とすれば、古段階のものが16個体(73%)、新段階のものが6個体(27%)となる(表3)。ただし、新段階が古段階か明確でない破片には突線鈕3Ⅱ～5Ⅱ式のものが4個あり、かつ3Ⅱ式は4・5式に比べて製作数が少ないので、これらの破片の大半は新段階に属すると考えられる。よって、新段階のものの割合は、実際は27%よりかなり高くなるであろう。すなわち、完形で埋納された近畿式銅鐸と破片の状態で廃棄された近畿式銅鐸で、古段階と新段階の個体数の比率にそれほど明確な差はなく、いずれも古段階のものが新段階のものよりかなり多いのである。

前記のように、共存土器からみて、近畿式銅鐸の破片化は、区内式直前から区内式にかけて、かなり短期間の間にそのほとんどがなされたと考えられる。よって、このように、近畿式銅鐸の破片に新段階のものよりも古段階のものが多いことは、破片化は近畿式銅鐸の終焉段階に集中的になされたが、その時に古段階の近畿式銅鐸がまだ多数使用されていたことを示しているのであろう。これは、滋賀県大岩山1881年出土例の型式構成によって、前記のように近畿式銅鐸の終焉段階に古い型式の近畿式銅鐸がまだ多数使用されていたことを確認できることと、整合している。また、近畿式銅鐸の終焉段階に集中的に破片化がなされたとすれば、完形で埋納された近畿式銅鐸と破片の状態で廃棄された近畿式銅鐸で、古段階と新段階の個体数の比率にそれほど明確な差がないので、新段階の近畿式銅鐸が普及するまでになされた古段階の近畿式銅鐸の埋納がそれほど多くはなかったことになる。

近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の成立

近畿式銅鐸の終焉の状況を考察するためには、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の関係についても検討する

必要がある。そこで、まず両者の成立過程について略記する（註28）。

突線鈕1・2式段階には、大福型、東海派、横帯分割型、迷路派流水文銅鐸、石上型、以上の5つの銅鐸群の存在が確認できる。5つの銅鐸群の製作数や金属原料の使用量に大差はない。すなわち、この段階では、外縁付鈕2式から扁平鈕式古段階における横型流水文銅鐸の製作工人集団のように、特定の工人集団が突出して優位にある状況はみられない。このような、各地の工人集団の銅鐸生産に明確な優劣のない状況は、実は扁平鈕式新段階ですでに始まっており、この段階から、銅鐸の生産と流通の地域化の進行とあいまって銅鐸祭祀自体にも地域性が強まっていったと考えられる（註29）。

近畿式銅鐸は、前記の突線鈕1・2式段階の銅鐸群のうち、近江・大和を含む地域に拠点を置いて活動していたと考えられる工人集団の作った大福型と、銅鐸分布図西部に拠点を置いて活動していたと考えられる工人集団の作った迷路派流水文銅鐸の統合を核として、成立した（註30）。一方、三遠式銅鐸は、東海派銅鐸が、平形銅剣の分布図と銅鐸の分布図が重なる瀬戸内東部に拠点を置いて活動していたと考えられる横帯分割型D類の軸突線を採用して成立した（註31）。近畿式銅鐸の成立については、大福型と迷路派流水文銅鐸の工人集団の統合が考えられるのに対し、三遠式銅鐸の成立については、横帯分割型の銅鐸群からの影響は突線の構成にほぼ限られているので、両銅鐸群の統合はなく東海派が横帯分割型の突線を模倣したにすぎないのか、あるいは両銅鐸群の統合があったのか、明確でない（註32）。

この、東海派への軸突線の導入について考える上で参考になるのが、扁平鈕式新段階末における高住型の成立時の状況である。すでに述べたことがあるように、高住型は、流水文の構成、描線の特徴、反転部の間にある縦の割り付け線などの特徴からみて明石型を祖型の一つとするが、形態や型持の位置と形などは正統派六区袈裟譚文銅鐸とまったく同じである（註33）。さらに最近実見して調査した結果、高住型の鳥取県高住鐸は鍛造後に裾を削って平滑に仕上げていることが判明した。鍛造後に裾や区画内を研磨あるいは削平して平滑に仕上げるこの処理は、扁平鈕式新段階の正統派六区袈裟譚文銅鐸のほぼすべてになされているが、同時期の流水文銅鐸や四区袈裟譚文銅鐸にはごく稀にしかみられない（註34）。すなわち、単に形態の類似のみならず、仕上げるこの特徴も、高住型は正統派六区袈裟譚文銅鐸と同じなのである。このことから、高住型の製作に正統派六区袈裟譚文銅鐸の工人集団の系譜を引く工人が関わっていたことは、ほぼ確定となった。一方、高住型の流水文は、明石型の流水文の複雑な構成や描法を完全に習得した工人がこれを描いており、明石型の系列の工人が製作に関わったこともほぼ確定である。このように、高住型は、明石型と正統派六区袈裟譚文銅鐸の工人集団の統合によって成立したと考えられる。

ここで興味深いのは、高住型は、銅鐸の大きさ・形態・型持の位置と形・銅鍬文内の条線方向などに明石型の特徴をまったく採用していないことである。複数の工人集団の統合によって新たな銅鐸群が創出される際に、形態をはじめとするさまざまな点について複数の銅鐸群の特徴を著しく混交する近畿式銅鐸のような場合のほか、一方の工人集団の影響は文様に限定されており、形態など他の特徴はほぼすべてもう一方の銅鐸群のそれを採用する場合もあったことが、この高住型の事例からわかる。よって、三遠式銅鐸の成立にあたっては、横帯分割型と東海派が統合されたが、横帯分割型の特徴は軸突線以外には採用されず、形態などの特徴はすべて東海派のそれを踏襲した可能性がある。横

帯分割型D類と迷路派流水文銅鐸A2類は製作地がおそらくそれほど離れておらず、多くの特徴について影響関係があることから密な交流が両者の製作工人集団の間にあったと考えられる。それにもかかわらず、迷路派流水文銅鐸A2類は横帯分割型D類の軸突線の構成を正確に受け継いでいない(註35)。これに対し、製作地が非常に離れていた東海派がかえって横帯分割型D類の突線の複雑な構成を正確に取り入れて、三遠式となる。この点と、三遠式銅鐸の成立とほぼ同時期に横帯分割型が廃絶することも、三遠式銅鐸の成立時に横帯分割型の工人集団が東海派と統合されたとする説に有利であろう。なお、横帯分割型と東海派の交流は、三遠式銅鐸成立以前にも若干あったようである(註36)。

三遠式銅鐸の祭式

三遠式銅鐸には、内面突帯が平らになり面が生じた例が多い。これは、打撃の繰り返しによる磨滅痕と考えられる(註37)。これに対し、近畿式銅鐸にはこのような平らな面が内面突帯に生じた例は極めて稀である。このことから、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸では、それを使用する祭式自体も異なっていたと推定できる(註38)。よって、ある集団が近畿式銅鐸あるいは三遠式銅鐸を所有するということは、銅鐸と共にいずれの祭式を受け入れるかというきわめて政治的な行為であったと考えられる。この三遠式銅鐸に特徴的な内面突帯の顕著な面化は、実は東海派の銅鐸の多くにみることができる。東海派と同時期に作られた他の銅鐸群にはこのように内面突帯が顕著に磨滅した例は多くないので、三遠式銅鐸に想定した独自性の強い祭式は、東海派の段階にその萌芽があったようである(註39)。三遠式銅鐸は分布の周縁部を除いて近畿式銅鐸といっしょに出土する例がないことも、両者の差異が政治的なものであったことを示しているのであろう(註40)。

滋賀県大岩山遺跡は三遠式銅鐸の分布圏の周縁部に位置するが、内面突帯の顕著な面化が、ここから出土した三遠式銅鐸のうち、1881年出土辰馬考古資料館445鐸(三遠1式)、1962年出土3号鐸(三遠1式)にもみられる。そして、1962年出土9号鐸(三遠2式)も、前記の2個ほど顕著ではないが、やはり内面突帯が面化している。これに対し、三遠式銅鐸としては特殊な特徴を多く持っている1962年出土8号鐸(三遠4式)は、内型のひび割れによって生じたバリが上下から続いて内面突帯上にも残っているもので、内面突帯がほとんど磨滅していない。

以上から、大岩山出土の三遠式銅鐸のうち、少なくとも1881年出土辰馬考古資料館445鐸と1962年出土3・9号鐸は、埋納前に、近畿式銅鐸とは異なる前記のような三遠式銅鐸固有の祭式に使用されていたと推定できる。よって、大岩山出土の三遠式銅鐸と近畿式銅鐸は、本来は別の集団がこれを保有し、それを使う祭式も異なっていたが、それがあがる段階で集められてこの地に埋納された可能性が高い。このように、三遠式銅鐸の分布圏の周縁部に位置する大岩山遺跡付近まで、三遠式銅鐸はその固有の祭式を伴った形で伝播していたと考えられる(註41)。

近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の併行関係

近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の併行関係、中でも三遠式銅鐸が近畿式銅鐸のどの段階まで作られていたのかは、銅鐸祭祀の終焉の状況と関係する重要な問題であるが、議論がある。佐原は突線紐5式になり近畿式銅鐸の横軸突線が鰭を貫くようになる変化を、近畿式銅鐸の工人集団が三遠式銅鐸の工人集

団を統合した結果と考えた(註42)。すなわち、佐原説では、三連式銅鐸は突線鈕4式までは作られたが5式には作られていないことになる。これに対し、難波は、三連式銅鐸を1～4式に細分し、鈕の突線構成・全高・鋳造文形態などを検討して、三連式銅鐸が近畿式銅鐸の突線鈕2・3式にほぼ併行すると考えた(註43)。すなわち、難波説では、佐原の推定よりもはやく、突線鈕4式ですでに三連式銅鐸が作られていないことになる。

ここではこの問題を検討するために、新たに綾杉文隆帯に注目しよう。この綾杉文隆帯とは、鰭の上端から鈕外縁第1文様帯の下端付近に縦方向に設けられた、断面が低い三角形で綾杉文を飾った幅の狭い長方形の隆帯で、矢羽根状隆起、屋根形隆起などとよばれることもある。突線鈕3Ⅱa式の滋賀県石山寺辺鐸、5Ⅰ式の伝和歌山県鐘巻出土鐸、5Ⅱ式の伝和歌山県出土大英博物館1号鐸、兵庫県栄根鐸、岐阜県久々利鐸、伝愛知県名古屋城漆出土鐸、伝静岡県益山寺出土鐸がこれを有している。これと関係すると考えられる装飾が、三連式銅鐸にある。三連4式の三重県野田鐸の、鰭上端の、第1横帯軸突線と身の上縁の突線の作る狭い区画内に飾られている、縦向きの有軸綾杉文がそれである。ただし、この綾杉文は、近畿式銅鐸の綾杉文隆帯のように突出していない。この装飾は、三連3式の静岡県敷地西の谷鐸の同じ部位にある横向きの綾杉文に起源があり、敷地西の谷鐸の綾杉文は三連式銅鐸の祖型となった東海派銅鐸のうち、突線鈕1式の出土地不明京都国立博物館蔵鐸、伝兵庫県淡路出土辰馬考古資料館409鐸、出土地不明平瀬氏蔵鐸の、鰭部耳の脚の間に飾られている、横向きの綾杉文に由来すると考える。さらには、東海派の祖型となった外縁付鈕2式の3対耳四区袈裟文銅鐸である、三重県磯山鐸の鰭部耳の脚の間に飾られている横向きの綾杉文にまで、その起源を遡ることが可能である。

このように、綾杉文隆帯は近畿式銅鐸では突然出現し、その起源は三連式銅鐸の系列にある。そして、現段階では、近畿式銅鐸の綾杉文隆帯の直接の祖型は、三重県野田鐸の鰭の前記の綾杉文と考えられるので、突線鈕3Ⅱa式の滋賀県石山寺辺鐸は三連4式の三重県野田鐸よりも後出となる(註44)。

この三重県野田鐸の三連4式内での位置付けを、もう少し詳しく検討しよう。三連4式には、軸突線が4条あるいは5条と多条化した例がある。三重県野田鐸、愛知県伊奈2・3号鐸、伝愛知県豊橋市付近出土1号鐸、以上の4個である。愛知県野田鐸は軸突線が4条単位となっているが、下辺横帯下界線の突線は三連3式と同じく4条のままである。これに対し、愛知県伊奈2・3号鐸は軸突線が4条であるが身の上縁と下辺横帯下界線の突線が5条になっており、さらに伝愛知県豊橋市付近出土1号鐸は軸突線もすべて5条である(註45)。このように、軸突線が4条以上になった4個の三連4式の中では、三重県野田鐸が軸突線の条数に関して最も古い特徴を持っている。また、三重県野田鐸を除く3個は、第4横帯の下半、すなわち、下辺横帯直上の斜格子文横帯を省略するという新しい特徴を持っており、愛知県伊奈2・3号鐸はさらに、鈕の外縁を3帯以上に分ける特徴と、鰭を内外2帯に分ける特徴も持っている。三重県野田鐸はこのような新しい特徴を持っておらず、全高も64.5cmと三連4式の中で最小である。軸突線の条数とこれらの点を考えれば、三重県野田鐸は軸突線が4条以上となった三連4式の4個の中で最も製作が古いとできよう。

三連4式には、軸突線が4条以上の例のほかに、軸突線が三連2・3式と同じ3条の例が7個ある。ここでは、特異な特徴が目立つ伝愛知県豊橋市付近出土3号鐸と滋賀県大岩山1962年出土8号鐸を除

く軸突線が3条のものをA群、軸突線が4条以上に多条化したものをB群としよう。A群は、愛知県中根鐸、愛知県神領鐸、京都府下安久2号鐸、伝愛知県豊橋市付近出土4号鐸、伝静岡県出土ギメ美術館蔵鐸、以上の5個、B群は前記の4個である。両者には、以下のような相違がある。

- ① A群の鈕は、極めて縦長で、輪郭が角張らず円味が強い。これに対し、B群の鈕は、あまり縦長ではなく、最も古い三重県野田鐸を除いて角張っている。
 - ② A群は身が細長く、B群は身が太短い。(身高/舞長径)値でこれを示すと、A群の愛知県中根鐸はこれが2.87と大きいのにに対し、B群の愛知県伊奈2・3号鐸と三重県野田鐸はこれが2.40～2.46しかない。
 - ③ A群は、伝静岡県出土ギメ美術館蔵鐸を除いて、鋸歯文をR鋸歯文かL鋸歯文に統一する、あるいはL R鋸歯文とする。これに対し、B群は三連3式と同じく、R鋸歯文とL鋸歯文を交互に配する規則を守っている。
 - ④ A群は、鈕内縁と菱環の界線や、鈕孔のまわりの線を、突線にする。これに対し、B群は三連3式と同じくこれらの内縁の界線が細線である。ただし、B群のうち愛知県伊奈2号鐸は、この界線が細線よりも少し太い。
 - ⑤ A群には、外周突線に伴う細線や、鈕外縁の界線の突線に伴う細線を、省略した例が多い。中でもA群の外縁第2文様帯と菱環の界線は、いずれも突線のみ、あるいはやや細い突線のみからなり、突線と細線を組み合わせることがない。これに対し、B群はいずれも三連3式と同じく、外周縁や外縁第2文様帯と菱環の界線が、突線3条と細線1条の組み合わせになっている。
 - ⑥ 突線に伴う細線をすべて省き区画界線を単線とした伝静岡県出土ギメ美術館蔵鐸を除いて、A群は典型的な三連3式と同じく、中縦帯の軸突線に伴う細線が上下に一続きである。これに対し、B群はこの縦軸突線の横帯部分に細線がない。
 - ⑦ A群の愛知県中根鐸と愛知県神領鐸は、横帯の綾杉文の軸を複線にする。B群にはこの特徴を持つ例がない。
 - ⑧ B群は三重県野田鐸を除いて、下辺横帯直上の斜格子文横帯を省略する。A群にはこの特徴を持つ例がない。
 - ⑨ A群の愛知県中根鐸と愛知県神領鐸は、鈕や鏤の鋸歯文が著しく細長い。伝静岡県出土ギメ美術館蔵鐸もこれに近い特徴を持つ。B群には、鋸歯文がそれほど著しく細長い例はない。
 - ⑩ 横帯文銅鐸はB群に2個あるが、A群にはない。
 - ⑪ A群のうち外周突線に細線に伴う愛知県中根鐸と愛知県神領鐸では、横軸突線が外周突線に伴う細線を切らない。外周突線とそれに伴う細線を鋳型に彫り込んだ後に、横軸突線を彫ったのであろう。これに対し、B群では、三連式銅鐸の通常通り、横軸突線が外周突線に伴う細線を切って、外周突線に達している。横軸突線を鋳型に彫り込んだ後に、外周突線に伴う細線を彫った可能性がある。
 - ⑫ A群は、伝静岡県出土ギメ美術館蔵鐸を除いて、菱環の綾杉文が舞に接する部位に平行線を入れない。これに対し、B類は、いずれも三連3式と同じく、この部位に平行線を入れる。
- 突線が多条化する点と⑥⑧については、B群がA群よりも新しい特徴を有している。しかし、③④

⑤⑨⑪⑫については、B群がA群よりも三遠3式と共通する古い特徴を残している。よって、単系列的に三遠4式内で軸突線が多条化し、A群がB群に変化したとはいえない。両者は同時期に異なる工人集団が製作した銅鐸群であろう（註46）。以上の検討を踏まえて、A群を中根型、B群を伊奈型とよぶことにしよう。

三遠3式をみると、伝愛知県出土法蔵寺蔵鐸が①②⑦⑨について三遠4式の中根型と共通する特徴を持っているのに対し、伝愛知県豊橋市付近出土2号鐸や愛知県伊奈1号鐸は①②⑥⑩について三遠4式の伊奈型と共通する特徴を持っている。三遠式は、三遠3式末ですでに、中根型と伊奈型の2系列に分裂していたようである。

なお、前記の伝愛知県豊橋市付近出土3号鐸は、軸突線が細く区画線との区別が明瞭でない、縦帯の区画線が上下一続きになっており下辺横帯を含む横帯をすべて切っている、左右縦帯に軸突線がある、鈕孔が小さいといった特異な特徴を持っているが、鈕や身の形態は伊奈型とほぼ同じである。よって、軸突線は3条だが、おそらく伊奈型の工人集団の製品であろう。

滋賀県大岩山1962年出土8号鐸も、三遠式銅鐸にはあまり例のない以下の特徴を有し、位置付けが難しい（註47）。①縦軸突線が第1横帯の軸突線を貫かない。②左右縦帯の軸突線が縦帯中央を通る軸突線になっており2条である。③縦横の軸突線が切り合っている。④菱環綾杉文の稜に明瞭な線がある。⑤鰭下端を幅広い隆帯とする。⑥鰭から外縁第1文様帯にかけて綾杉文を飾る。⑦鰭の上下1組の飾耳の間に条線を入れてブリッジを作る。⑧鈕孔の上部が角張っている。⑨舞がほぼ円形である。これらの特徴のうち、④⑤⑧⑨は近畿式銅鐸の影響である。この滋賀県大岩山1962年出土8号鐸は、細長い身が強く反って下へと大きく開く、鈕が極めて縦長である、鋸歯文をR鋸歯文に統一する、鈕の文様帯界線に軸突線よりも細い突線を使う、菱環の綾杉文が舞に接する部位に平行線を入れないなど、中根型にみられる特徴を多く有しており、中でも京都府下安久2号鐸と類似点が多い。さらに検討が必要であるが、以上から、本稿では滋賀県大岩山1962年出土8号鐸を三遠4式の中根型に含めることにする。

三遠4式で出土地が判明している例は少ないが、中根型が尾張2個、近江1個、丹後1個で、伊奈型は三河2個と伊勢1個である。すなわち、中根型が尾張を中心に西へと分布を広げているのに対し、伊奈型は三河を中心に対岸の伊勢にも分布している。中根型は尾張に拠点を置く工人集団の製品、伊奈型は三河に拠点を置く工人集団の製品の可能性がある。近畿式の影響が中根型に顕著で伊奈型にはあまりない点も、中根型の製作地が近畿により近いことと関係しているのであろう（註48）。

以上の私案とは別に、進藤武も三遠式銅鐸の最終段階に複数銅鐸群の併存を推定しており、愛知県伊奈2・3号鐸など「外周および軸突線を多条化し、外縁および鰭を二つの紋様帯に分化させるなど大型化を志向する一群」と三重県野田鐸や愛知県中根鐸など「縦帯を省略する横帯紋銅鐸となる一群で、縦帯を省略し横帯紋となり連続渦巻紋を多用するもの」の二つの銅鐸群があるとした（註49）。しかし、三遠4式の横帯文銅鐸は愛知県野田鐸と伝愛知県豊橋市付近出土1号鐸の2個だが、どちらも前記のように軸突線が多条化したものであり、進藤の類別が矛盾しており成立しないことは明らかである（註50）。また、進藤の類別では、外縁および鰭の文様帯を細分する特徴を持つ愛知県神領鐸は前者の群に、愛知県中根鐸は後者の群に属することになるが、この2個は、中根型の中でも、前記

の綾杉文の軸が2条である、極めて細長いL R鋸歯文を飾る、軸突線が外周突線に伴う細線を切らない、といった、他の三遠4式にはなくこの2個だけにみられる特徴を多く共有しており、両者が別の銅鐸群に属することはありえない(註51)。

以上の検討から、三重県野田鐸是三遠4式の中でも初期のものと考えられる。そして、前記のように、綾杉文隆帯を有する突線鈕3Ⅱa式の近畿式銅鐸である滋賀県石山寺辺鐸は、この三重県野田鐸よりも新しいことになる。よって、三遠4式がほぼ近畿式銅鐸の突線鈕3Ⅱ式と併行するという従来の難波の推定と矛盾しないと考える。

さて、近畿式銅鐸では、縦軸突線はその変化が突線鈕2式から連続的に確認できるのに対し、横軸突線は突線鈕2・3式にはまったくみられず、突線鈕4式段階で突然すべての系列に採用される(註52)。この突線鈕4式段階での横軸突線の導入に比べると、突線鈕4式から5式への変化は、すでに存在する横軸突線を延ばして端を貫くようにするという小さな変化にすぎない。よって、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の工人集団の統合があったとすれば、それは突線鈕5式成立時よりも突線鈕4式成立時であった可能性が高いと考える。ただし、この段階で三遠式銅鐸から近畿式銅鐸へ新たに導入されたと考えられる目立った特徴は、横軸突線以外にはないので、前記の三遠式銅鐸成立段階に横帯分割型が統合されたか否かの問題の場合と同様、単に三遠式銅鐸の特徴が模倣されたのか工人集団の統合があったのか、判断が容易ではない(註53)。

以上のように、三遠式銅鐸の生産が近畿式銅鐸よりも早く突線鈕4式成立段階あるいは5式成立段階で終わったとすると、三遠式銅鐸は、その後、どのように扱われたのであろうか。これについては、以下の可能性が考えうる。

第1は、三遠式銅鐸はこの段階ですべて埋納され、三遠式銅鐸を使う祭祀は近畿式銅鐸の祭祀の終焉にさきがけて終了した。

第2は、三遠式銅鐸は製作がこの段階で終わったが、その独自の祭祀は継続しておこなわれ、近畿式銅鐸の祭祀の終焉時に三遠式銅鐸の祭祀も終了し、埋納された。

第3は、三遠式銅鐸独自の祭祀はこの段階で廃絶し、以後、三遠式銅鐸は近畿式銅鐸の祭祀の中で近畿式銅鐸と同様に扱われるようになった。

三遠式銅鐸には破片の状態で出土した例が長野県宮淵出土の1個しかないのに対し、近畿式銅鐸はおそらく半数あるいはそれ以上が破片化されたと考えられる。このように近畿式銅鐸と三遠式銅鐸では最終的な処理方法が異なっているので、三遠式銅鐸の使用集団は最後まで独自のまとまりを保持し続けたと推定できる。よって、第3ではなく、第1か第2となる。

また、滋賀県大岩山1881年出土例をみると、突線鈕5Ⅱ式の中でも最も新しい特徴を有する近畿式銅鐸と突線鈕2式にあたる三遠1式が共存しているので、近江周辺では、三遠式銅鐸が近畿式銅鐸の祭祀の終焉時まで使われ続けたことがわかる。同じ状況が三遠式銅鐸全体について想定できるなら、第1ではなく、第2か第3となる。

以上を総合すると、現状では第2の、すなわち、三遠式銅鐸の製作はこの段階で終わったが、その独自の祭祀は継続しておこなわれ、近畿式銅鐸の祭祀の終焉時に三遠式銅鐸の祭祀も終了した可能性が高い。ただし、近江と東海で状況が異なり、東海では近畿式銅鐸にさきがけて三遠式銅鐸の祭祀が終

了した可能性、すなわち第1であった可能性もないわけではない。また、東海にはない近畿式銅鐸と三連式銅鐸が共存する例が近江と丹後にはあることを重視すれば、この地域では第3であった可能性も考えておく必要がある。

以上は、近畿式銅鐸よりも三連式銅鐸の生産が早く終了したことを前提とした議論であるが、もし、三連式銅鐸の生産が近畿式銅鐸の最終段階まで引き続いて行われていた場合、どのように考えることが可能であるか、最後に検討しておこう。三連式銅鐸は、1式から3式へと、全体として全高が大きくなっていくが、三連4式は三連3式と全高がほとんど変わらない。三連4式になり、伊奈型は軸突線を4条化さらに5条化するという近畿式銅鐸とは異なる新たな発展方向を探ってはいるが、三連式銅鐸の大型化は三連3式段階内で終わったようである。もし、三連式銅鐸の生産が近畿式銅鐸の最終段階まで併行しておこなわれていたとすれば、近畿式銅鐸との全高の差は、非常に大きくなっていくことになる。具体的には、近畿式銅鐸の突線鈕5Ⅱ式の全高は平均110cmを上回り、最大の滋賀県大岩山1881年出土東京国立博物館蔵品は全高134.7cmにもなるのに対し、三連式銅鐸は最大の三連3式の出土地不明クリーブランド美術館蔵品でも全高97.8cmである。そして、三連4式は、出土時の破損が著しく正確な全高はわからないが全高90cmを越えると考えられる愛知県神領鐸を除けば、全高64～85cmしかない。

このように、三連式銅鐸が近畿式銅鐸の最終段階まで製作されていた場合、銅鐸の製作数だけでなく大きさについても、東海は近畿に対してきわめて劣勢にあったことになる。一方、三連式銅鐸の生産が突線鈕4式成立あるいは5式成立に伴って終わった場合も、近畿式銅鐸に対する劣勢は否めない。銅鐸祭祀自体は継続しながらも銅鐸生産が終了したとすれば、大型品では1個の重量が15～20kgにもなる三連4式の製作に必要な大量の金属原料を確保することが困難となったなどの原因が考えられる。この三連式銅鐸の生産が終わるのとあまり変わらない頃に、瀬戸内東部への近畿式銅鐸の流入も途絶するようである。二つの動向は、あるいは連動しているのかもしれない。

以上、西側遺跡出土例のような近畿式銅鐸の破片での出土に関係する問題について、現在思いつくところを記した。各々の問題についてはさらに検討を深め、必要な部分については別稿を用意したい。なお、本稿は平成15～18年度科学研究費補助金（基礎研究（C））「難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成」の成果の一部である。また、資料調査等に当たっては、青木政幸、赤澤徳明、秋枝芳、阿刀弘史、岩原剛、大谷輝彦、角建一、木村有作、小泉武寛、清水篤、進藤武、出原恵三、時枝務、中川寧、新田剛、野沢則幸、野崎欽五、服部芳人、伴野幸一、樋上昇、深澤芳樹、福永清治、藤田三郎、古川志継、松井一明、松尾充晶、森下英治、森下章司、山田隆一、山本雅靖、湯村功、以上の方々のお世話になった。記して感謝したい。

註

- 1 双頭渦文飾耳頭部の渦文の巻数は、外から中心へと数え、中心点も巻数に数える。
- 2 銅鐸全体の大部分類と細分、近畿式銅鐸と三連式銅鐸の細分、正統派六区契装準文銅鐸の細分は難波1986、亀山型、名東型、扁平鈕式の横帯分割型の細分は難波2003b、東海派の細分は難波2002・2005、突線鈕式の横帯分割型の

- 細分は難波2005による。
- 3 A 類型の破片のほとんどは銅鐸が埋納されることがあまりない集落内から出土しているの、そのような例はあってもわずかであろう。
- 4 春成1982 p 22
- 5 近畿式銅鐸の青銅は錫の含有率が低く、高い展延性があるため、近畿式銅鐸を常温で破壊し小片とすることは容易でない。小泉武寛氏によれば、650℃余りに加熱して加撃すれば、このような鋳物も簡単に破片化できるという。弥生時代にも、銅鐸を破片化するためにこのような特殊な方法がとられた可能性があり、このような熱処理に関する情報も伴って近畿式銅鐸の破片化は伝播したのかもしれない。
- 6 難波2005 p 102
- 7 樋上2001・2002
- 8 菅原ほか1993 p 16
- 9 田中1970
- 10 春成1978・1982
- 11 福永1998 p 225
- 12 小型の外縁付鈕1式には、たとえば兵庫県中村郷のように、内面突帯の磨滅が鈍近くでは軽微で中央付近で著しく、磨滅が裾に及び身の下縁まで変形した例もある。しかし、同じ外縁付鈕1式でも、大型鐸は内面突帯の磨滅にこのような部位による差異が顕著ではなく、全体が比較的均一に磨滅している。小型鐸では内面突帯に舌の当る部位が偏るが、大型鐸ではこのような偏りが生じにくかったようである。大型鐸では舌の長さに比して、舌を吊り下げの紐が長くなる傾向があり、また、銅鐸の底径が大きいため、内面突帯に舌の当る位置がランダムになりやすいのであろう。三連式銅鐸の内面突帯の面化が一様であるのも、同じ理由によるのかもしれない。三連式銅鐸では、大型化に伴って鳴らし方自体が変化し、それが磨滅痕を変化させた可能性もある。
- 13 田中1970 p 57
- 14 春成1982 pp14—18
- 15 難波1986・1991・2003 b・2005
- 16 佐原・春成1982
- 17 難波2003 b pp12.13
- 18 田中1970 pp57.58
- 19 春成1982 p 17
- 20 春成は兵庫県泉北例を2個セット2対の例としてあげているが（春成1982 p 15）、横型流水文銅鐸と縦型流水文銅鐸は製作工人集団が別なので（難波1991 pp61—68）、3個と1個の組み合わせになる可能性はあっても、2個2セットの組み合わせになることはない。
- 21 この段階の銅鐸の近接別地点埋納例についても、6例中少なくとも4例は大きさが揃っている。
- 22 「複数の集団がそれぞれ互いに、大きさの規格が同じ銅鐸を手手した後、これを集めて埋めた場合」も想定できるが、この場合は、それらの集団の間には当然密接な関係があったことになるので、これらの集団の集まり自体を一つの集団ととらえることが可能である。そうとすれば、これはAに含めることができる。よって本稿では、これを別項目として設定しない。

- 23 難波1997 pp17-19
- 24 註22に記した場合のように、この単独集団が密接な関係にある複数の小集団からなっており、互いに大きさを揃えて銅鐸を入手した可能性もありうる（難波1999 pp80.81）。島根県加茂岩倉例と島根県神庭荒神谷例については、同一集団が全高約30cmと40cm余りのものは加茂岩倉へ、全高約20cmのものは神庭荒神谷へと、分けて埋納した可能性があるが（難波1997 p19）、この場合も、型式ごとに決った大きさのものが揃っていたにかわりはない。
- 25 北部九州で作られた銅戈や銅矛についても、複数本まとまって出土したものの互いに同范のものが含まれていることはほとんどない。その原因としては、①複数集団から少数本ずつ集めたため、②単独集団が一括入手したがその際に同范品を避けたため、③銅矛・銅戈は石製鋳型を使って鋳造するが同范品をほとんど作らなかったため（古田2004 p67）、④単独集団が少数本ずつ、基本的には1本ずつ繰り返し入手したため（難波1993 p17）、以上が考えうる。④は、銅鐸が複数個まとまって出土する例について筆者が想定した集積パターンと、基本的に同じである。銅戈や銅矛の場合については現状では①～④のいずれとも断定できないが、銅鐸の場合と類似する④の可能性が最も高いであろう。なお、①～④のいずれの場合でも、問題となるのは、まとまって出土した27本の銅戈のうち、4組11本程度が互いに同范でそのうちの1組は5本が互いに同范である、福岡県小倉新池例である（難波1998 pp3.4）。この例に限って同范品が多いことについては、出土地が北部九州の青銅器生産の中核地に近いことが関係するのであろう。
- 26 佐藤・藤谷1990 p46
- 27 出土状況やその取り扱いからみて、近畿式銅鐸を祭器として使った地域では、近畿式銅鐸の破片が、何らかの呪術的効能を有するとはみなしていなかったようである。近畿式銅鐸の破壊は、祭器としての銅鐸の強い否定であり、その結果、銅鐸の破片に銅鐸の呪力が残存しているような扱いすら認められなかったのであろうか。一方、静岡県東部の飾耳をペンダントに再加工した2例や、人骨頸部付近から双頭渦文飾耳破片が出土した島根県青木遺跡例は、近畿式銅鐸を祭器として使用していなかったこれらの地域では、破片の入手者が、近畿式銅鐸の破片に何らかの呪術的効能を期待していたことを示している。
- 28 難波1986 p137、難波2005 pp99-108
- 29 難波2003b pp19.20・難波2004 難波2-難波4 言い換えれば、横型流水文銅鐸の工人集団を擁し、外縁付鈕2式以来、銅鐸の生産やその原料の入手について他を圧倒し、銅鐸祭祀の展開を主導してきた、おそらく河内平野の地域集団の優位は、扁平鈕式新段階になって崩れてしまった。
- 30 難波1991 p100、難波2004 難波4.5、難波2005 pp107.108 大福型は、滋賀県大岩山で3個、奈良県大福で1個出土している。滋賀県大岩山出土の近畿式成立以前の銅鐸はすべて大福型であること、大福型には東海派と共通する特徴が多く見られること（難波2005 p104）、石上型は大和に拠点を置いて活動した工人集団の製品の可能性が高いが、大福型との類似点は少なく、大福型が大和付近に拠点を置いて活動した工人集団の製品の可能性は低いことを考えれば、大福型は東海との関係が深い近江に拠点を置いて活動した工人集団の製品の可能性がある。
- 31 佐原1964 p141、難波1986 p137、難波2005 p106
- 32 近年、栗原は、三連1・2式の多くの横帯分割型D類の実線に伴う細線の組み合わせの特徴を受け継いでおらず、三連3式になってようやく横帯分割型D類と同様の組み合わせになることを発見し、三連式銅鐸成立時に東海派と横帯分割型の統合はなく、東海派が横帯分割型の影響を受けたにすぎないと結論した（栗原2003）。詳細な観察

に基づいた、非常に興味深い指摘である。しかし、後述するように、横帯分割型D類と極めて関係が深かった迷路派流水文銅鐸A2類でさえ、横帯分割型D類の突線の構成を正確に模倣できていないのに対し、三造式銅鐸がきわめて正確に横帯分割型D類の突線を踏襲していることから、工人が統合された可能性は考え得ると思う。一端捨て去られたように見える古い特徴が、同系列のかなり後出の銅鐸に突然みられることがある。たとえば、東海派の突線鈕1式の伝兵庫県淡路出土流水文銅鐸は、流水文が複合縦型流水文で身の上縁には横帯がある。これは、同系列の外縁付鈕2式縦型流水文銅鐸の特徴の復活である。また、突線鈕1式東海派にみられる筋耳の脚の間の綾形文も、同系列の外縁付鈕2式3対耳四区装束派文銅鐸のその復活である。三造4式のいくつかは鱗を2条の界線で区切って内外2帯とするのは、横帯分割型の特徴の復活であろう。よって、三造1・2式が横帯分割型D類の突線に伴う縦線の組み合わせの特徴を受け継いでおらず、三造3式になって横帯分割型D類と同じ組み合わせになることについても、同様の現象とは考えられないだろうか。また、突線の構成以外には横帯分割型D類の特徴が三造式銅鐸にはみられないことについては、後述する高住型の成立の経緯が参考になるであろう。

33 難波1991 p.97

34 難波2003a 注(5)、難波2003b 注(3) 扁平鈕式新段階の正統派六区装束派文銅鐸で、区画内や裾を研磨あるいは削平して平滑に仕上げていない例は、今のところ、桜ヶ丘4・5号鐸型の伝香川県出土鐸と突線鈕1式大福型の祖型となった伝徳島県出土榎名神社蔵鐸の2個だけである。なお、正統派六区装束派文銅鐸は、扁平鈕式新段階の銅鐸の6割余りを占めているが、成立後まもなく複数の工人集団がこれを作るようになり、2式になると銅鐸群の数は5以上になったと考えられる(難波2003b pp.13-20)。しかし、それらの銅鐸群はいずれも区画内や裾を鋳造後に研磨あるいは削平して平滑に仕上げる特徴を持っており、このように仕上げる細部の特徴まで共通することから、正統派六区装束派文銅鐸内における新しい銅鐸群の成立は、単なる模倣によるのではなく、工人の移動を伴う形で技術の転移がなされたことによると考えられる(難波2004 難波3)。六区装束派文銅鐸は桜ヶ丘4・5号鐸型の中で生み出されたが(難波1986 pp.141.142)、桜ヶ丘4・5号鐸型を直接の祖型とする横帯分割型の製作工人集団は瀬戸内東部に拠点を置いていたと考えられるので(難波2003b pp.18.19)、桜ヶ丘4・5号鐸型もこの地域に拠点を置く工人集団の製品の可能性が高い。前記のように、外縁付鈕2式から扁平鈕式古段階にかけて他の銅鐸群を圧倒していた横型流水文銅鐸が扁平鈕式新段階になって著しく衰退し、銅鐸の主流が六区装束派文銅鐸のグループに移行するのは、瀬戸内東部地域が銅鐸祭祀を主導するようになり、その展開に強い影響力を持つようになったことを示しているのかもしれない。ただし、それは、単独の銅鐸群の製作数や原料入手についての優越によってではなく、前記の工人の移動による技術転移が示すような関係を通じてであったのであろう。

35 難波2005 pp.104-106

36 栗原2003、難波2005 p.105 深澤芳樹氏の数示によれば、土器においては中期末から後期へ移行する時期に、瀬戸内東部の影響の東方への波及が著しいという。山中式成立にあたって古備の影響が強くあったとする赤塚の指摘(赤塚2002 p.33)や、山中式の高弁と古備の鬼川市式1式の高弁の類似性の多さを考えると、陸上の経路での連鎖的・段階的波及のみではなく海上を通じてのより直接的な物資や情報の伝達があった可能性もあるとの高野の指摘(高野2004 pp.97.98)の当否は別として、銅鐸分布図西部の銅鐸群と畿内や東海の銅鐸群との統合によって近畿式や三造式が成立する動きは、瀬戸内東部の土器の前記のような動向とおそらく連動している。

37 本稿では三造式銅鐸の内面突帯の面化を使用による磨滅とみなしているが、これについては全体が一様に平たい

ので使用痕ではないとする見解もある(矢野2001 p8)。しかし、全体として、三連式銅鐸は古い型式ほど内面突帯の面化が顕著であり、新旧の三連式銅鐸がいっしょに出土した静岡県敷地例(2・3式)、静岡県荒神山例(2・3式)、滋賀県大岩山1962年出土例(1・2・4式)をみると、いずれの例でもより長く使われた古い型式ほど内面突帯の面化が顕著である。また、内面突帯の面化した部分は滑らかだが、その他の部分は鈍膚の凹凸の残る表面になっている例がある(滋賀県大岩山1881年出土辰馬考古資料館445鐸、滋賀県大岩山1962年出土3号鐸、伝愛知県豊橋市付近出土2号鐸)。よって、三連式銅鐸の内面突帯が平らになっているのは、使用による磨滅と考えたい。なお、内面突帯全体が一樣に平たくなった原因については、註12で検討した。また、前記の複数個いっしょに出土した三連式銅鐸をみると、1型式の相違で内面突帯の磨滅の程度がかなり違っているの、三連式銅鐸の場合、1型式間程度の使用で内面突帯の磨滅がかなり進行したことがわかる。

38 難波ほか2002 pp182,183

39 難波2005 p103

40 進藤2002 p127、難波ほか2002 p183

41 三連式以外の、滋賀県大岩山出土銅鐸の内面突帯の観察結果の概要は以下の通りである。1881年出土銅鐸のうち、國學院大学蔵の突線鈕1式大福型は内型のひび割れによって生じたバリが内面突帯上に残っているので、内面突帯が磨滅していないことが確認できる。近畿式銅鐸の突線鈕3Ⅰa式辰馬考古資料館蔵鐸、3Ⅰa式野口氏蔵鐸、3Ⅰb式東京国立博物館蔵鐸、3Ⅰb式知恩院蔵鐸は、内面突帯が磨滅していない、あるいはしていてもごく軽微である。1962年出土銅鐸ではどうだろうか。大福型の1・2号鐸は内面突帯がやや面化している可能性があるが、三連1式の3号鐸のように顕著ではない。近畿式銅鐸のうち突線鈕2式の6号鐸は内面突帯がやや面化している可能性があるが、しているとしても軽微である。その他の近畿式銅鐸は内面突帯が磨滅していないようである。また、他の9個とは別地点で出土したといわれている一区流水文銅鐸のⅠ0号鐸は、内面突帯がやや太く、面化が顕著である。興味深いのは、1881年出土例、1962年出土例のいずれでも、大福型はいっしょに出土した三連式よりも製作が古く使用期間が確実に長いにもかかわらず、内面突帯の磨滅は三連式よりも軽微なことである。よって、大岩山出土の三連1式と大福型は、本来、別の集団が使用していたと考えられる。

42 佐原1964 p142

43 難波1986 pp136,137

44 佐原1974、佐原・春成1982では、滋賀県石山寺辺鐸を突線鈕4式とする。しかし、この型式比定は、横帯、縦帯ともに軸突線を有するもののうち横帯の軸突線が鐸を貫かないものを近畿式の突線鈕4式とするという佐原自身の定義(佐原1964 p142)に反しており、佐原の分類基準に忠実に従えば、滋賀県石山寺辺鐸は突線鈕3式となるはずである。この矛盾は、この銅鐸が軸突線をまったく持たないにもかかわらず、鈕の飾耳が巨大である、身が細長い、鈕が高く角張っており顕著な小判形を呈する、鐸幅が広い、大型で全高が90cmを超えるといった新しい特徴を多く持っていることに佐原が拘泥してしまったことを示している。しかし、このような新しい特徴は、実は滋賀県石山寺辺鐸の属するC系列ではA・B系列よりも早くみられるようになるのであり(難波2005 pp109-111)、それらの特徴を有することをもって自らの定義を無視して突線鈕4式に比定する必要はないと考える。同様の混乱は、この前後に作られた多くの近畿式銅鐸の型式比定にみられ、佐原・春成1982では、佐原の定義によれば突線鈕3式となるはずの三重県比土鐸(難波の突線鈕3Ⅰb式)、大阪府羽曳山鐸(難波の突線鈕3Ⅰbか3Ⅱa式)、大阪府菱木鐸(難波の突線鈕3Ⅱb式)、和歌山県前木1号鐸(難波の突線鈕3Ⅱb式)を、

- いずれも突線鈕4式としている。評述はしないが、突線鈕4式に近い特徴や大きさを持つこれらの銅鐸の位置付けについて、佐原はかなり迷っていたようである。
- 45 三重県野田鐸の下辺横帯下界線の突線が横軸突線と同じ4条になっており、伝愛知県豊橋市付近出土1号鐸のそれが横軸突線と同じ5条になっているのは、これらの横帯文銅鐸では、下辺横帯下界線の突線と横軸突線の差異が明確でなく、両者を同等視したためであろう。さらに推定するなら、横帯文を飾る三重県野田鐸で、横軸突線を下辺横帯下界線の突線と同等視して4条としたことから、A群の軸突線の多条化が始まったのかもしれない。
- 46 1986年に三連式銅鐸の細分案を発表するにあたって三連4式を軸突線の条数によって細分することも可能であったが、これをしなかったのは(難波1986 p136)、このような銅鐸群の併存を予想していたからである。
- 47 難波1983
- 48 三連4式にみられる次の特徴は、近畿式銅鐸の影響と考えられる。①三連4式の多くは三連3式よりも身の反りが強い。②三連4式中の中根型のほとんどは、鋳造文をR鋳造文かL鋳造文に統一する、あるいはL R鋳造文とし、R鋳造文とL鋳造文の交互配置にはしない。③三連4式中の中根型には著しく細い鋳造文を飾る例がある。④三連4式中の中根型には、鈕の文様帯界線に軸突線よりも細い突線を、細線を伴わずに使う例が多い。⑤三連4式中の中根型のほとんどは、菱理の綾文が舞に接する部位に平行線をいれない。⑥三連4式中の中根型のうち、伝愛知県豊橋市付近出土4号鐸、京都府下安久2号鐸、滋賀県大岩山1962年出土8号鐸は、三連3式では上区上端にある身上の型持孔が、上区の中位にある。このように、近畿式銅鐸の影響は、伊奈型よりも中根型で顕著である。中根型は、全体の形態も、近畿式の突線鈕3Ⅱ式や4式の銅鐸と類似している。
- 49 進藤2004 p171
- 50 三連式銅鐸の外周突線は、三連4式になっても3条のままでそれ以上多条化することはなかった。よって、進藤の「外周・・・を多条化」は誤りである。また、「外縁・・・を二つの紋様帯に分化させる」は、二つの文様帯からなっていた外縁を3帯以上に細分する、という意味であろうか。なお、鏝を2帯に細分する特徴、外縁を3帯以上に細分する特徴、連続渦文を多用する特徴は、いずれも中根型と伊奈型の両者にみられるので、銅鐸群を分ける基準には使えないと考える。
- 51 中根型の中ではこの2個が新しい特徴を多く持っており、後出であろう。2個のうち、愛知県神領鐸は、鏝を内外2帯に分け鋳外縁を3帯に分ける新しい特徴も持っており、おそらく中根型の中で製作が最も新しい。
- 52 難波2005 pp111.113
- 53 難波1986 なお、つぎの特徴が三連式銅鐸と近畿式銅鐸にみられることは、両者の間に相互関係があったことを示しているであろう。①鏝を内外2帯に分割する。②外縁を3帯以上に細分する。③内縁の重弧文の間に線を飾る。④第2・3横帯の特別視。以下、それぞれの特徴について簡略に説明する。①の特徴は、近畿式銅鐸では突線鈕5Ⅱ式の滋賀県大岩山1881年出土東京国立博物館蔵鐸にしかみられないが、三連式銅鐸では4式の、愛知県神領鐸、愛知県伊奈2・3号鐸にみられる。鏝の内外の鋳造文帯間の界線が2条になっている点でも、これらの三連式銅鐸と近畿式銅鐸は共通しており、影響関係があったと考えられる。この特徴は、三連式銅鐸の祖型の一つと考えられる横帯分割型にもみられ(扁平鈕式新段階の横帯分割型B2類と突線鈕2式横帯分割型C類の出土地不明笠野氏蔵鐸)、鏝の内外の鋳造文帯間の界線が2条の点でも、共通する。よって、この特徴は横帯分割型を祖型の一つとする三連式銅鐸がまず採用した後、近畿式銅鐸に取り入れられたのであろう。②の特徴は、近畿式銅鐸では突線鈕3Ⅰ式の滋賀県大岩山1881年出土ミネソタ美術研究所蔵鐸、突線鈕5Ⅱ式の和歌山県三橋谷鐸に

みられ、三連式銅鐸では4式の愛知県神領鐸、愛知県伊奈2・3号鐸、伝愛知県豊橋市付近出土3号鐸にみられる。③の特徴は、近畿式銅鐸では、突線鈕2式の高知県正善鐸(1条)、和歌山県庵原鐸(1条)、3Ⅰa式の京都府式部谷鐸(片面のみで2条)、3Ⅰb式の三重県高茶屋2号鐸(片面のみで1条)、3Ⅱb式の静岡県穴ノ谷鐸(片面のみで1条)、4式の出土地不明フリーア美術館蔵鐸(2条)、5Ⅰ式の和歌山県雨舘山鐸(3条)、徳島県矢野鐸(2条)、三連式銅鐸では3式の伝静岡県出土法蔵寺蔵鐸(片面のみで1条)にみられる。法蔵寺蔵鐸はこれが1条である。近畿式銅鐸でこれが1条の例は、突線鈕2～3Ⅱb式に限られる。④の特徴については、以下の通りである。三連式銅鐸には第2・3横帯に綾杉文を飾る例が多い。近畿式銅鐸B系列の突線鈕3Ⅱa式の京都府下安久1号鐸では、縦帯の区画突線や中縦帯の軸突線が第2・3横帯部分は貫通していない。この特徴は3Ⅱb式の大府府菱木鐸に受け継がれるが、左右縦帯の区画突線と中縦帯の軸突線は上下に貫通するようになる。この、中縦帯の区画突線が第1・4横帯は貫くが第2・3横帯は貫かない特徴は、突線鈕4・5式のB系列の銅鐸の多くと共通する特徴である。これは、前記の三連式銅鐸における第2・3横帯の特別視と関係するのであろう。また、突線鈕5Ⅰ式の和歌山県雨舘山鐸、徳島県矢野鐸、5Ⅱ式の出土地不明東京国立博物館蔵鐸(『考古学資料大観』6の図136-4)は、突線鈕5式だが、横軸突線のうち第1・4横帯の軸突線は鱗を貫いておらず、第2・3横帯の軸突線は鱗を貫いている。これも、前記のような、第2・3横帯の特別視と関係する特徴であろう。

参考文献

- 赤塚次郎2002『濃尾平野における弥生時代後期の土器編年』『八王子遺跡』考察編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集 pp25-48
- 岩永省三1987『伝世考』『東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念論集 中 pp457-478
- 岩永省三1997『金属器登場』歴史発掘7
- 栗原雅也2003『三連式銅鐸の突線に伴う縦線—三連式銅鐸の成立に関する試論—』『続文化財学論集』水野正好先生古稀記念論文集 第一分冊 pp319-328
- 佐藤由紀夫・藤谷みほ1990『浜松市松東遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 佐原真1960『銅鐸の製造』『世界考古学大系』第2巻 pp92-104
- 佐原真1964『銅鐸』『日本原始美術』4 青銅器 pp135-144
- 佐原真1974『銅鐸出土地名表』『古代史発掘』5 大陸文化と青銅器 pp154-160
- 佐原真・春成秀爾1982『銅鐸出土地名表』『考古学ジャーナル』No.210 pp30-48
- 進藤武2002『近畿式銅鐸と三連式銅鐸』『銅鐸から描く弥生時代』 pp115-129
- 進藤武2004『三連式銅鐸の成立と解体』『第11回東海考古学フォーラム 伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題 山中式の成立と解体』 pp165-177
- 菅原康夫・藤川智之・氏家敏之1993『矢野銅鐸』
- 高野陽子2004『近畿北部における弥生後期土器様式と山中式』『第11回東海考古学フォーラム 伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題 山中式の成立と解体』 pp95-107
- 田中琢1970『「まつり」から「まつりごと」へ』『古代の日本』第5巻 近畿 pp44-59
- 田中琢1977『剣、矛、戈—争乱とまつり』『日本原始美術大系』4 鐸 剣 鏡 pp164-168

- 難波洋三1983『辰馬考古資料館展覧の果』11 昭和58年度秋季展—銅鐸—
- 難波洋三1986『銅鐸』『弥生文化の研究』第6巻 道具と技術Ⅱ pp132—145
- 難波洋三1991『同范銅鐸2例』『辰馬考古資料館考古学研究紀要』2 pp57—109
- 難波洋三1993『青銅の神々』『倭国—邪馬台国と大和王権—』 pp16.17
- 難波洋三1997『出土銅鐸の概要』『加茂岩倉遺跡発掘調査概報Ⅰ』 pp14—23
- 難波洋三1998『同范関係にある銅矛・銅戈の検出による弥生時代祭祀構造の復原』平成6年度～平成8年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書
- 難波洋三1999『近年の銅鐸研究の動向』『徹底討論 銅鐸と邪馬台国』 pp19—81
- 難波洋三2002『八王子銅鐸の位置づけ』『銅鐸から描く弥生時代』 pp74—96
- (難波洋三2001『八王子銅鐸の位置づけ』『シンポジウム「銅鐸から描く弥生社会」予稿集』 pp69—76を加筆改訂)
- 難波洋三ほか2002『〔討論〕銅鐸から描く弥生時代』『銅鐸から描く弥生時代』 pp165—197
- 難波洋三2003a『井向1号鐸の位置づけ』『辰馬考古資料館考古学研究紀要』5 pp43—54
- 難波洋三2003b『徳島市出土の特徴的な銅鐸について—亀山型と名東型—』『徳島市立考古資料館 開館5周年記念シンポジウム 銅鐸の謎をさぐる』 pp1—21
- 難波洋三2004『銅鐸と銅鐸祭祀の変遷』『國學院大學 21COE 考古学・神道 ミニ・シンポジウム予稿集』 難波1—難波9
- 難波洋三2005『近畿式銅鐸と三連式銅鐸—最終段階の銅鐸の動向—』『平成17年度文化財講座資料集』大阪府文化財センター pp99—116
- 春成秀爾1978『銅鐸の埋納と分布の意味』『歴史公論』第4巻3号 pp87—97
- 春成秀爾1982『銅鐸の時代』『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 pp1—48
- 樋上界2001『J区銅鐸埋納遺構』『八王子遺跡』報告編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集 pp38.39
- 樋上界2002『八王子銅鐸発掘記』『銅鐸から描く弥生時代』 pp58—73
- 福永伸哉1998『銅鐸から銅鏡へ』『古代国家はこうして生まれた』 pp217—275
- 松井一明2002『掛之上遺跡Ⅹ・Ⅺ』奈良市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書4
- 矢野健一2001『辰馬考古資料館展覧の果』27 平成13年度秋季展—銅鐸を観察する—
- 古田広2004『第5章 考察—まとめと今後の展望—』『青銅器の同范関係調査報告書Ⅰ—武器形青銅器—』島根県古代文化センター調査研究報告書19 pp65—71

[補 記]

原稿完成後、本稿で触れた綾杉文隆帯を検討した石橋茂登氏の論考(「久々利出土の銅鐸にかかわる試論」『美濃の考古学』第4号 2000)の存在を知った。字数の関係上、本稿では詳しく記す余裕がなかったが、私は綾杉文隆帯の祖型を、①三連式の鐸上端の綾杉文、②滋賀県大岩山1881年出土野口氏蔵鐸のような近畿式の鐸の綾杉文、③菱環綾杉文、以上のいずれかと推定し、その中で①の可能性が最も高いと考えている。これに対し、石橋氏は③を祖型と考え、綾杉文隆帯の変遷案に基づいて、滋賀県石山寺辺鐸が突線鈕Ⅱ式でも最新と考えられる滋賀県大岩山1881年出土東京国立博物館蔵1号鐸よりもさらに後出で、Ⅱ式に相当する段階に属するとした。氏が問題とする石山寺辺鐸の形

態の新しい特徴については、本稿の註44に記したように、C系列ではA・B系列よりも早くからこのような特徴を有するようになると、私は考えている。また、石山寺辺鐸が属するC系列では突線鈕4式で全高が107～115cmとなるが石山寺辺鐸の全高は90.9cmしかないこと、突線鈕5Ⅱ式では2重になっている菱環が石山寺辺鐸では1重であることなどからも、石山寺辺鐸が東京国立博物館蔵鐸よりも後出とは考えにくい。石山寺辺鐸を突線鈕5Ⅱ式相当段階の鐸とする場合、突線鈕3Ⅰb式ですでに石山寺辺鐸に類似した新しい特徴を持っている出土地不明ブルックリン美術館蔵鐸（全高87.3cm）や伝大阪府玉手山出土鐸をどのように位置付けるかも、問題となろう。なお、石橋氏は東京国立博物館蔵鐸を除くすべての突線鈕5Ⅱ式が綾杉文隆帯を有するとするが、突線鈕5Ⅱ式の出土地不明九州国立博物館蔵鐸、出土地不明賀懸寺蔵鐸、出土地不明個人蔵鐸は、綾杉文隆帯を持っておらず、和歌山県三栖谷鐸もこれを持たないようである。以上については、別の機会に詳しく検討したい。

2. 西側遺跡・瓜郷遺跡出土銅鐸片の鉛同位体比測定結果

齋藤 努(国立歴史民俗博物館)

はじめに

豊橋市美術館より依頼のあった、西側遺跡および瓜郷遺跡出土の銅鐸片について鉛同位体比を測定したので報告する。

分析方法

西側遺跡出土銅鐸片は遺跡から取り上げた際、保存のため樹脂(パラロイド)を含浸させてあり、全体に濡色をしている。分析試料としては、遺跡から取り上げ後、まだ樹脂含浸をする前に剝離した錆片と、本体縁部の、樹脂含浸による濡色が比較的薄い部分の表面から新たに試料(錆)を採取したもの2つを測定した。

瓜郷遺跡出土銅鐸片については、断面部から錆を採取して分析試料とした。

それぞれの試料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して硝酸溶液とし、鉛200ng相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置(Finnigan MAT 262)を用いて、フィラメント温度1200℃で鉛同位体比を測定した。

分析結果

表5に分析結果を示した。

馬淵・平尾が弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果、その鉛同位体比の変遷はおおまかに、下記のようにグループ分けできることがわかっている(馬淵・平尾、1982、1987)。ここでも、これに準じてデータの表示を行った。

W：弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。

E：後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域。占墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。

J：日本産の鉛鉛石の領域。日本産鉛は現在までのところ、飛鳥時代以降の資料にしか見出されていない。

K：多鈕細文鏡や細形銅剣など、弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

なお測定結果は $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比と $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比の関係(A式図)で表示した。

第79図は測定結果を、上記の領域範囲のうちW、E、Kとともに表示したものである。

西側遺跡出土銅鐸片から採取した2試料(B7701、B7702)の測定値はWの範囲内にあり、ほぼ同一で、今回の測定について樹脂含浸の影響はほとんどないと考えてよさそうである。この資料は突線鈕3式に比定される近畿式銅鐸と考えられている。馬淵・平尾(1982)は、近畿式・三連式銅鐸の突線鈕2～5式の18資料について測定を行ない、これらがきわめて近接した数値をもつ、統計的に同一の鉱山由来とみなしても差支えない鉛原料を用いて製作されていることを報告している。その数値範囲は $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比で0.8755～0.8771、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 比で2.1630～2.1677であった。西側遺跡出土資料

の測定値もこの範囲内にあり、他の近畿式・三遠式銅鐸と同様に「規格品の原料」が使用されていることがわかる。瓜郷遺跡出土銅鐸片（B7703）についても、この範囲内におさまっており、同様の原料と考えられる。

まとめ

西側遺跡および瓜郷遺跡出土の銅鐸片について鉛同位体比を測定した。測定値はきわめて近接した数値で、これまでに測定されている近畿式・三遠式銅鐸とほぼ同一の「規格品の原料」が使用されていることがわかった。

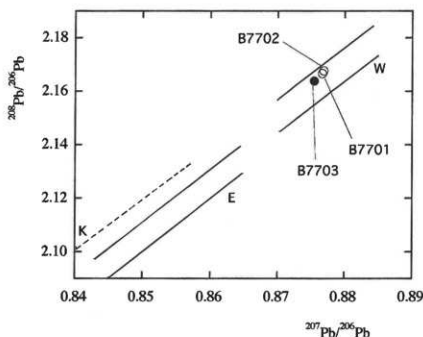
参考文献

馬淵久夫、平尾良光（1982）、「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」、『考古学雑誌』68（1）。

馬淵久夫、平尾良光（1987）、「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比—青銅器との関連を中心に—」、『考古学雑誌』73（2）。

表5 西側遺跡・瓜郷遺跡出土銅鐸片の鉛同位体比測定結果

資料名	分析番号	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	備考
西側遺跡出土銅鐸片 （取り上げ時の剥離片）	B7701	0.8767	2.1666	17.757	15.567	38.471	SK-60C「鐸片」
西側遺跡出土銅鐸片 （樹脂含浸後の資料から採取）	B7702	0.8769	2.1676	17.773	15.586	38.524	
瓜郷遺跡出土銅鐸片	B7703	0.8755	2.1638	17.777	15.564	38.466	



第79図 西側遺跡・瓜郷遺跡出土銅鐸片の鉛同位体比測定結果

第6章 総括 (第80図)

今回の調査区からは、縄文時代～近世の遺構・遺物が確認されている。このうち、縄文時代の遺物は晩期の深鉢が若干出土した程度で、遺構が集中ようになるのは弥生時代後期前葉からである。

本遺跡は長期に渡る複合遺跡であり、遺構の形成時期はいくつかに集中する。ここでは、遺構・遺物のまとまる時期を大きく捉え、遺構の変遷過程を説明することで総括としたい。

①弥生時代後期 弥生時代の遺物は中期の長床様式から確認され、集落の形成はこの頃から始まると推定されるが、明確な遺構は確認されていない。そして弥生時代後期前葉になると、環境SD-1が掘削されるほか、竪穴住居SH-1・4・5が設けられるなど、集落としての様相を整える。

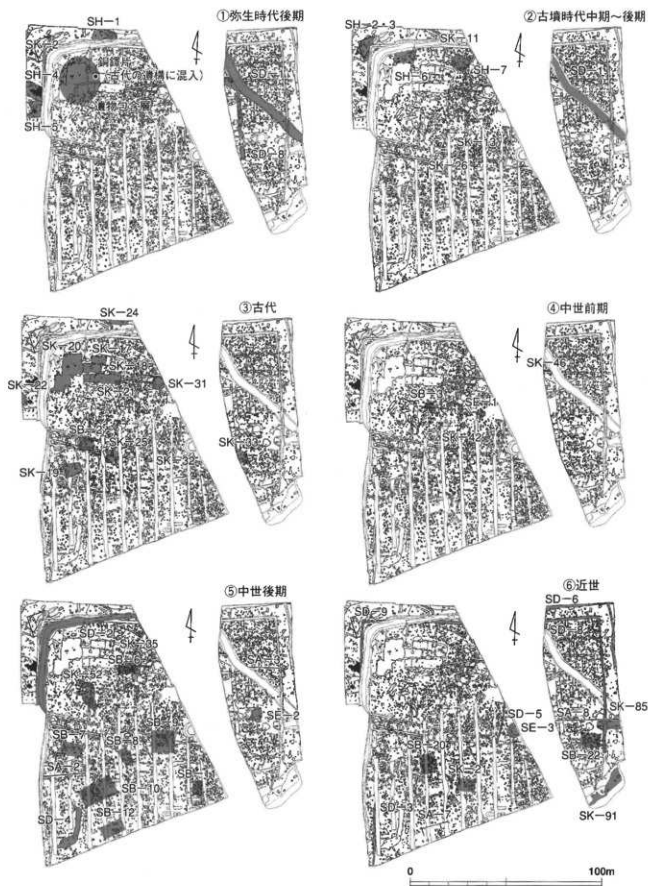
SD-1は断面が箱形を呈した溝で、内部には大量の弥生土器が廃棄されていた。環境としていたが、断面形が逆三角形を呈し、集落の周囲を圍繞する通常の環境とは形状が大きく異なる。ただし、大量の土器廃棄は近在の高井遺跡を含め、弥生時代後期の多くの環境で認められる事実である。また、SD-1は南東―北西方向に伸びており、あるいは段丘を横断して、遺跡の所在する段丘の端部を区画するような形になると思われる。詳しい性格は、調査の進展の中で明らかになることだろう。SD-8は性格不明の溝である。途中で陸橋状に途切れ、北端は西に折れ曲がるように見える。方形周溝墓とするには規模が大きく、またA区に継続する溝は見あたらない。集落内の区画を含め、さまざまな性格を考慮する必要がある。そしてSH-4・5は貼り床の粘土が明らかに被熱して赤化しており、火災住居と考える。

以上のほかに、すでに削平されて検出できなかった遺構もあっただろう。M・N-15・16区付近で検出された黒褐色砂質土層は、わずかな凹みに堆積した遺物包含層であるが、未確認遺構の集中域に相当すると思われる。古代の遺構SK-18に混入して出土した近畿式突縁鋳皿式の銅鐸師耳片は、本来この包含層に含まれた遺物であろう。周縁が欠損しているため加工痕は確認できないが、破片が偶然残された訳ではなく、各地で出土する銅鐸片と同様破砕後に保管されたものと解釈される。

弥生時代後期の遺構は、全体的に調査区の北側に集中しているので、遺構の主体はさらに北側に展開する可能性が高い。注目すべき点は、弥生時代の土器がすべて後期前葉、寄道様式の比較的短期間の遺物で占められることである。中期後葉のうちに集落の萌芽を迎え、後期前葉に環境を伴って展開が進み、銅鐸祭祀を執行した本遺跡は、後期後葉に終焉を迎えるのである。同時期には近在の拠点集落・高井遺跡が最盛期を迎えているので、その衛星集落として機能した遺跡と考える。

②古墳時代中期～後期 一定の空白期間を経て、本遺跡に再度生活の痕跡が見られるようになるのは古墳時代中期からである。竪穴住居SH-2・3やSH-6・7は同時期の集落に伴うものであり、土蔵SK-11からは完形の小型壺が出土している。

SH-2・3は建てかえの関係にあると思われるが、SH-2は長方形を呈し、住居としてはやや変則的な形態である。竪穴住居の中ではSH-6が最も新しく、後期前葉に属する。住居内の土器集中からは土師器の把手付きの鍋や長胴化が見受けられる甕のほか、円筒埴輪片が出土している。この付近に埴輪を樹立した古墳が存在する可能性を示すと同時に、住居の住人が古墳や埴輪づくりに関与



第80図 遺構変遷図 (1/1,000)

したことも考えられる。またSK-11には祭祀的な意図が想定できる。このほか、弥生時代の環壕SD-1が窪地として残っていたようで、上層から古墳時代中期の上器が出土している。

③古代 古墳時代終末期～平安時代の遺構をまとめて古代とする。この時期の遺構は埋土が黒褐色を呈する例が多い。遺構には掘立柱建物SB-2があるほか、性格不明の土壌が多数検出されている。とくにSK-17・18・20・21は1ヵ所に集中し、形態に方形を指向した共通性が見られる。時期は古墳時代終末期～奈良時代、または平安時代とばらつきが認められるものの、この時期差は土器の混入に起因する可能性も否定できない。興味深い点として、建物・土壌とも南北方向を指向するように見受けられ、計画性をもって設置された遺構群とも考えられる。ただし、このような形態の土壌群は類例に乏しく、評価を充分に行えない。

④中世前期 遺構の数は減少し、SB-3をはじめとする掘立柱建物数棟と、井戸・水溜遺構と想定されるSE-1やSK-42、山茶碗がまとまって出土したSK-46などが注意される遺構である。SE-1からは12世紀前葉～13世紀後葉の山茶碗が出土した。規模はけっして大きな遺構ではないものの、水溜的な井戸として長期間使用されたと考える。また13世紀の遺物には墨書土器が含まれていた。墨書は「東」のほか、花押と思われるものがあり、遺構の形成主体の性格を考える上で唆に富んでいる。居館や寺院など、有力階層の存在を付近に想定すべきだろう。

⑤中世後期 掘立柱建物を中心とする遺構群が形成された時期である。通常ならば一般集落を想定するところだが、SD-2は屋敷地区画溝としては規模が大きく、しかもSD-2に囲まれた内部にはほかの区画溝が無い、つまり大規模な区画を形成している。掘立柱建物は主軸方位にばらつきがあり、複数時期の建物が存在することは明白である。それぞれの建物配置や構成が明らかにできないが、SB-8・10・12は主軸方位の一致から同時期の遺構群と考えられ、SB-6・9・11も同様と想定される。中世前期に付近の有力階層の存在を指摘したが、この時期にも有力者の居館、あるいは寺院などが存在したと思われる。仮に寺院であるならば、3間四方総柱建物のSB-9の性格は倉庫ではなく、床張り構造の方形の仏堂（阿弥陀堂）などを考慮すべきである。SE-2は多量の遺物に恵まれ、その存続時期は戦国期～近世初頭で、SD-2とほぼ同期間である。SK-35から出土した青磁椀花皿も、所有者の社会的な優位性を物語る遺物である。

⑥近世 幅は狭いものの、長くのびて大型の区画を方形に囲むSD-8・9、SD-8に並行して通路遺構を形成するSD-6があり、その内部に掘立柱建物群が存在する。SD-8・9に囲まれた区画は東西125mを測り、中世後期と同様通常の集落とは考えにくい内容である。SK-91は大型の廃棄土壌で、段丘崖とその下に続く谷を利用して設けられている。

中世後期から近世まで存在する大型区画を同一の施設に伴うものとするのなら、近在の桃林寺や正太寺の前身、あるいは在地に定住する武家階層などが想定される。

西側遺跡は牛川地区屈指の複合遺跡であり、そこから汲み取ることができる情報は多彩である。本遺跡の発掘調査は今回が最初で、今後も区画整理事業の進捗の中で調査は継続していく予定である。豊橋市の新たな歴史像が本遺跡の調査によってさらに明らかにされることだろう。

版 圖 真 寫





調査区全景（モザイク写真・上から）



1. 調査区遠景（北から）



2. 調査区遠景（東から）



1. 調査区南側（上から）

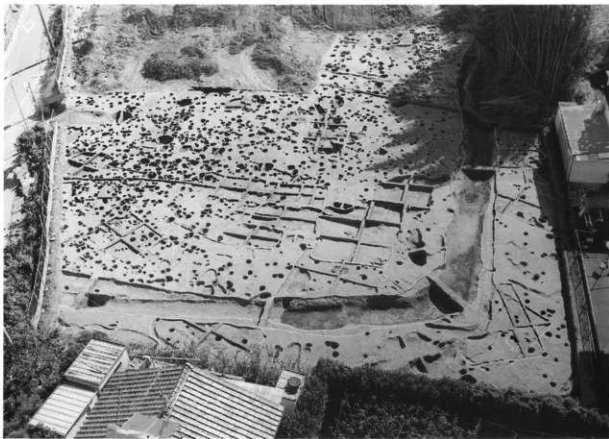


2. 調査区南側（南から）

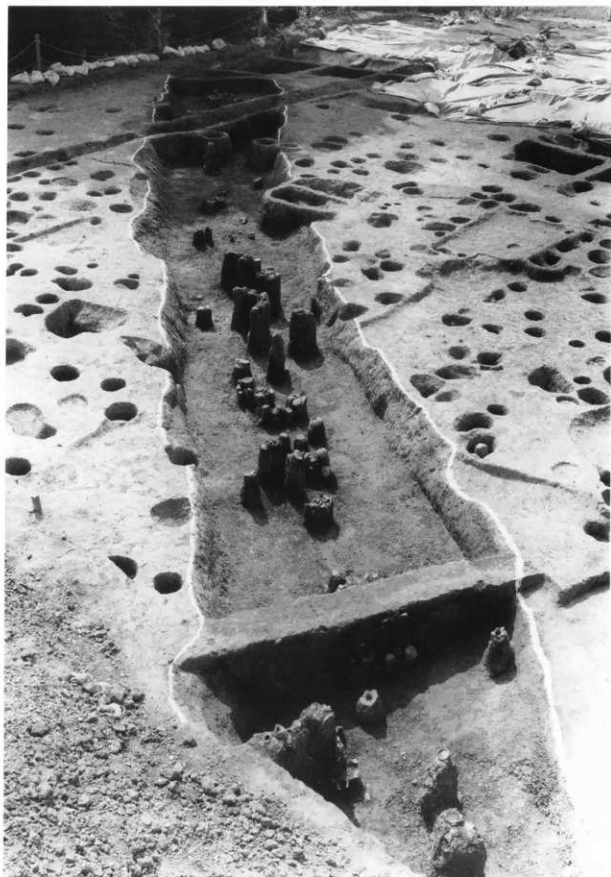
写真図版 4



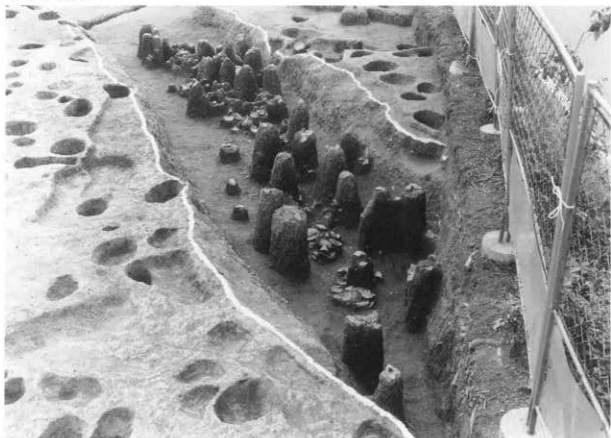
1. 調査区北側（上から）



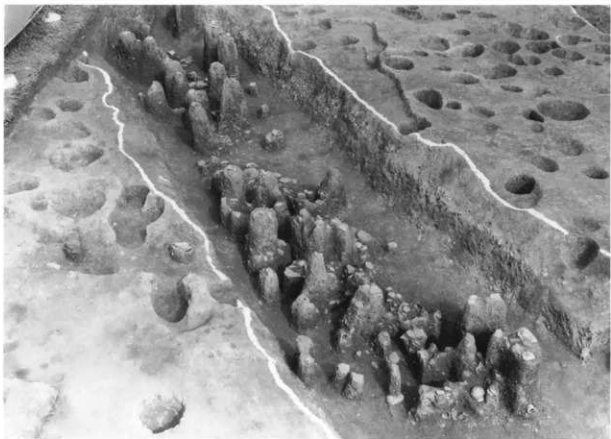
2. A区調査区北側（北から）



S D-1 遺物出土状況-1 (北西から)



1. SD-1 遺物出土状況-2 (R-15区・北から)



2. SD-1 遺物出土状況-3 (R-15区・南から)



1. SD-1 遺物出土状況-4 (S-16区・北から)



2. SD-1 遺物出土状況-5 (S-16区・北から)



1. SD-1 遺物出土状況-6 (S-16区・北西から)



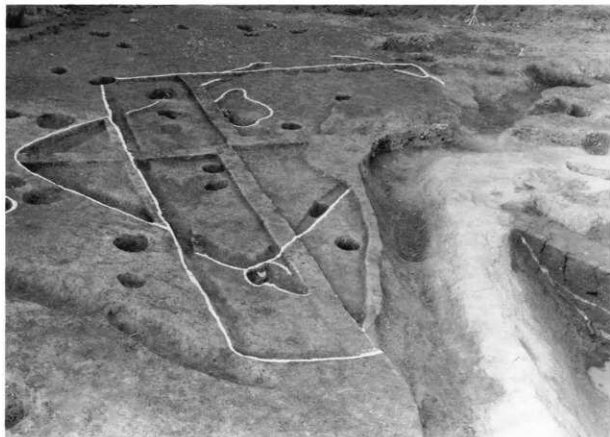
2. SD-1 完掘状況 (南東から)



1. SH-1 (南から)



2. SH-2・3-1 (南東から)



1. SH-2・3-2 (南から)



2. SH-4 (東から)



1. SH-5 (東から)



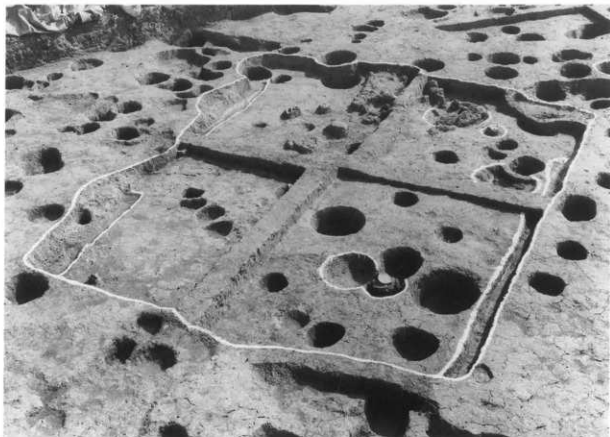
2. SH-6 (東から)



1. SH-6 土器集中-1 (南から)



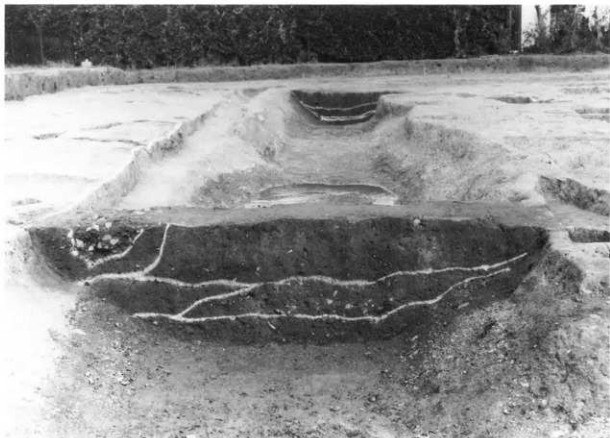
2. SH-6 土器集中-2 (西から)



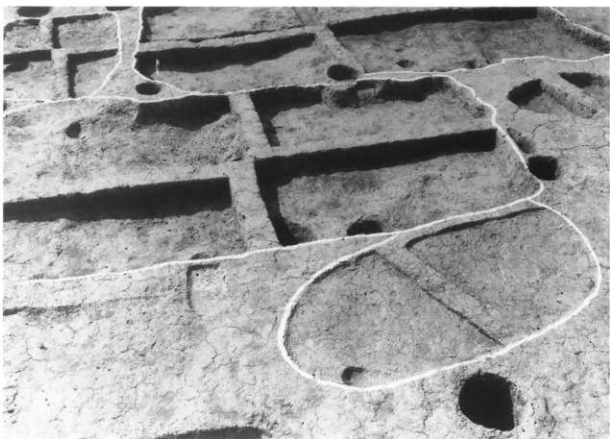
1. SH-7 (北西から)



2. SE-1 (西から)



1. SD-2土層 (南から)



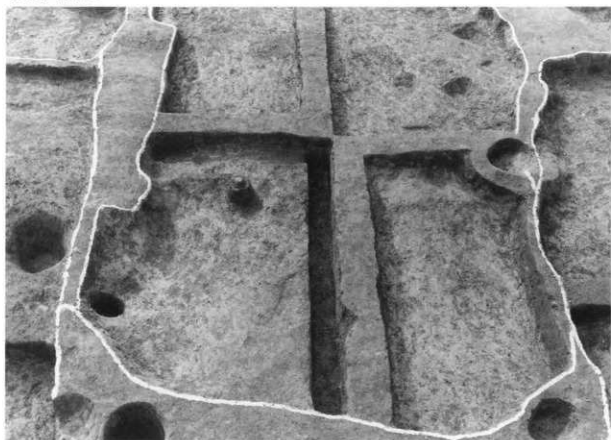
2. SK-17 (北から)



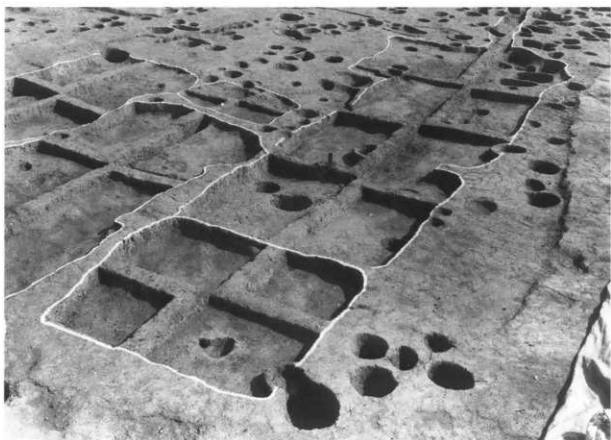
1. SK-18 (南西から)



2. SK-18銅鐻片出土状況-1 (北から)



1. SK-18銅鐸片出土状況-2 (東から)



2. SK-21 (南西から)



1. SH-2・3遺物出土状況（東から）



2. SH-3遺物出土状況（北から）



3. SH-4 貼り床断面（北東から）



4. SH-6 土器集中-3（南から）



5. SH-7 土層（南西から）



6. SH-7 カマド周辺-1（北から）



1. SH-7 カマド周辺-2 (北西から)



2. SH-7 遺物出土状況 (西から)



3. SX-1 遺物出土状況 (東から)



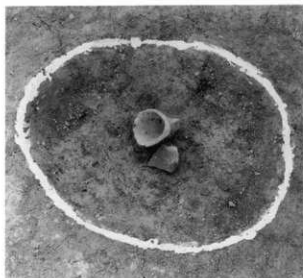
4. SX-2 遺物出土状況 (東から)



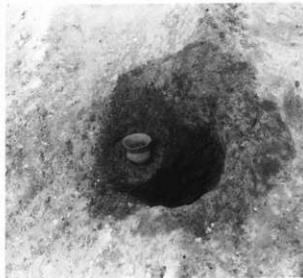
5. SK-4 (南から)



6. SK-4 土層 (南から)



1. SK-6遺物出土状況（東から）



2. SK-11遺物出土状況（東から）



3. SK-12遺物出土状況（北から）



4. SK-13遺物出土状況（南東から）



5. SK-14遺物出土状況（北西から）



6. SK-16遺物出土状況（東から）



1. SK-18銅鐸片出土状況-3 (北から)



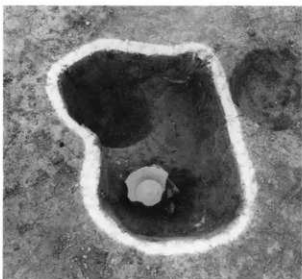
2. SK-18銅鐸片出土状況-4 (東から)



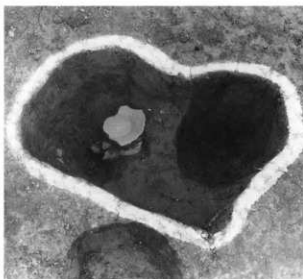
3. SK-31 (西から)



4. SK-31遺物出土状況 (北西から)



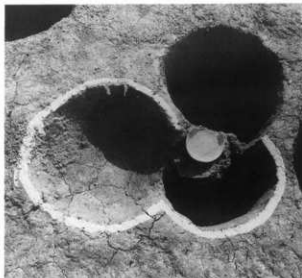
5. SK-35遺物出土状況-1 (東から)



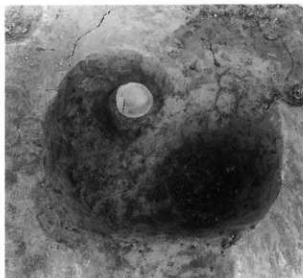
6. SK-35遺物出土状況-2 (北から)



1. SK-52 (南東から)



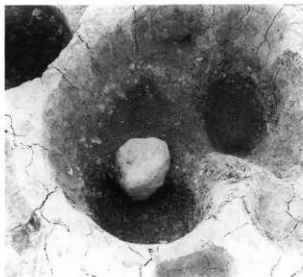
2. SK-69遺物出土状況 (西から)



3. SK-70遺物出土状況 (西から)



4. SK-76遺物出土状況 (東から)



5. SK-77遺物出土状況 (東から)



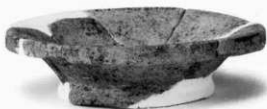
6. 作業風景 (SD-1 掘削)



2



3



6



13



11



18-1



18-2



29



21



22



30



31



40



42



43



44



46



48



47



49



64



65



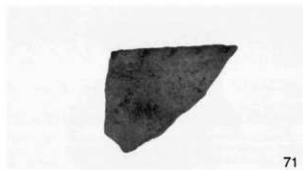
73



91



93



71



83



92



102



103



149



150



151



155



156



159



158



170



179



182



183



184



185



187



188



186



189



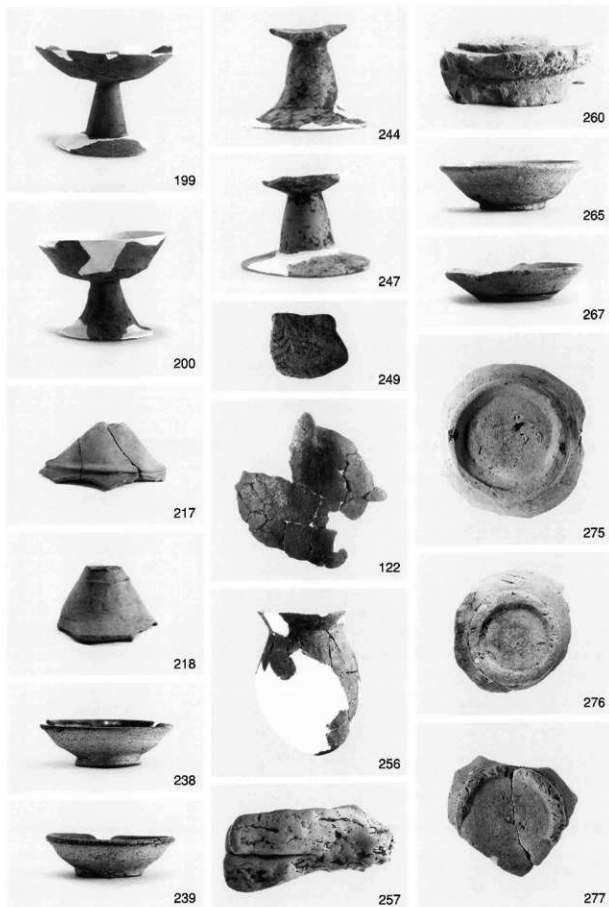
191

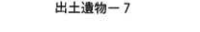
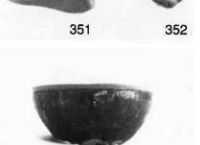
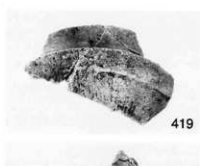


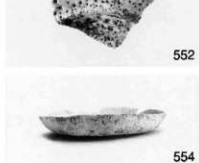
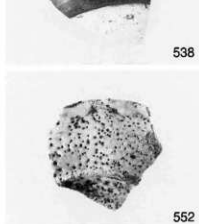
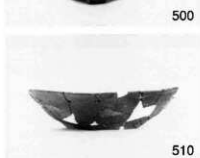
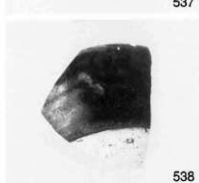
192



194









565



629



642



573



630



653



590



631



655



591



632



661



619



634



662



622



639



663

報告書抄録

ふりがな	にしがわいせき(1)							
書名	西側遺跡(1)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第82集							
編著者名	岩原 剛、賛 元洋、難波洋三、齋藤 務							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1 TEL.0532-51-2879							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしがわいせき 西側遺跡	とよはし 豊橋市 ふたつがきとあるがしにあり 牛川町字西側	23201	79365	34度 46分 00秒	137度 24分 00秒	20030701 ↓ 20031031	3,550㎡	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西側遺跡	集落跡	弥生	溝、包含層	銅鐸片(飾耳)、 弥生土器		弥生時代後期前葉の環壕が検出され、多量の土器が出土した。また平安時代の土壌に混入して、近畿式突縁鎚目式銅鐸の飾耳片が出土している。このほか、古墳時代中期～終末期の集落や、中世・近世の遺構・遺物が確認された。		
		古墳	竪穴住居、土壌	土師器、須恵器、 円筒埴輪				
		奈良	土壌	須恵器、土師器				
		鎌倉	井戸、土壌、 掘立柱建物	山茶碗、舶載磁器、 土師器				
		戦国	掘立柱建物、溝、 土壌	陶器、磁器、 土師器				
		江戸	掘立柱建物、溝、 土壌	陶器、磁器、 土師器				

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第82集

西側遺跡（Ⅰ）

2005年3月31日

発行 豊橋市教育委員会©
美術博物館
〒440-0801
豊橋市今橋町3番地1

印刷 (株)豊橋印刷社